

塔柳川

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成三十年四月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷九七一號



日川協加盟

No. 971

四月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

日本現代詩歌文学館特別企画展
川柳への招待 — 川柳250年記念

20年3月15日(土)～4月20日(日)

◆初日13時30分 ティアラカット

14時30分～15時30分 座談会「川柳を語る」

開館時間 午前9時～午後5時 休館日 3月17日・24日・31日(各月曜)

会場 日本現代詩歌文学館展示室

入場料 一般300円(250円)

学生200円(150円) * ()は20名様以上の団体

現在活躍中の川柳作家の自筆作品を
作者のコメントとともに一堂に展示
川柳の歴史や基礎知識をパネル化
川柳の書籍を紹介

出品川柳作家

赤井花城 赤松ますみ 天根夢草 石井有人 石田一郎
石部明 磯野いさむ 今川乱魚 梅崎流青 江畑哲男
大木俊秀 大西泰世 大野風柳 加藤鯉 川上大輪
河内天笑 川俣秀夫 北野岸柳 木野由紀子 国吉司図子
久保田半蔵門 斎藤大雄 定本広文 佐藤岳俊 佐藤美文
猿田寒坊 塩見草映 零石隆子 鈴木如仙 鈴木星児
鈴木南水 平宗星 田口麦彦 竹内ゆみこ 竹本瓢太郎
田中寿々夢 徳永政二 なかはられいこ 成田孤舟
西來みわ 長谷川冬樹 早川双鳥 尾藤一泉 尾藤三柳
平田朝子 平山繁夫 福岡竜雄 細川不凍 本田智彦
宮村典子 森中恵美子 やすみりえ 山崎蒼平 吉岡龍城
万迷多 脇坂正夢 脇屋川柳 (50音順)

主催 日本現代詩歌文学館

後援 社団法人全日本川柳協会／川柳学会／岩手県川柳連盟

日本現代詩歌文学館

024-8503 岩手県北上市本石町2-5-60

tel 0197-65-1728 fax 0197-64-3621

<http://www.shiikabun.jp> e-mail shiika@shiikabun.jp

春や春

河内 天笑

昨日から上手に啼く鶯がうちの庭とお隣さんを行ったり来たり、気持ちのいい春の歌を聞かせてくれている。

暖かくなったのは結構な事だが、今年のお水取りは嘗て経験した事がない程暖かかった。彼岸の入りに至っては二十度まで上がり、有難いような恐いような落ち着きかねる日々だ。

春場所ありセンバツありの三月はわくわく気分である。月末からセ・パ両リーグとも開幕。いよいよだ。

さて、十九年の大相撲は御難の連続であった。初場所朝青龍の四連覇した前後に、週刊誌が朝青龍の八百長疑惑を報道。この後、春・夏と、もたついていた大関白鵬が連覇、夏場所後に横綱に昇進して、四年半ぶりに東西両横綱の誕生となった。土俵外のトラブルは朝青龍の仮病疑惑で二場所出場停止の厳罰。秋場所後は前時津風親方（元小結・双津竜）が新弟子急死事件で解雇された。てんやわんやの十九年が終わわり、明けた初場所は白鵬の意地で朝青龍に賜杯を譲らなかつた。

しかし人気下降気味の大相撲は大入りが七日もあって逆に盛り返した。

大相撲ヒールが戻り盛り上がる 猪川由美子
朝青龍悪役ならば道はある 小野句多留

これまで朝青龍に対するブーイングの作品を多く見たがこんな嬉しい句に出会って筆者もほっとしている。また春場所は中日、全勝で通過し高砂部屋に笑いが戻った。

高砂や朝青龍は帆をあげて 壺内 半醉
今や幕内四十人の力士の内十三人が外人さんだ。

万国旗揚げたら如何国技館 河内 天笑

と言いたくなる。関取十二人のモンゴル勢に 田中 游山
大相撲蒙古襲来如きもの

は言い得ている。大相撲止めの句は

朝青龍も高見盛も要るのです 前田 咲二

自選句

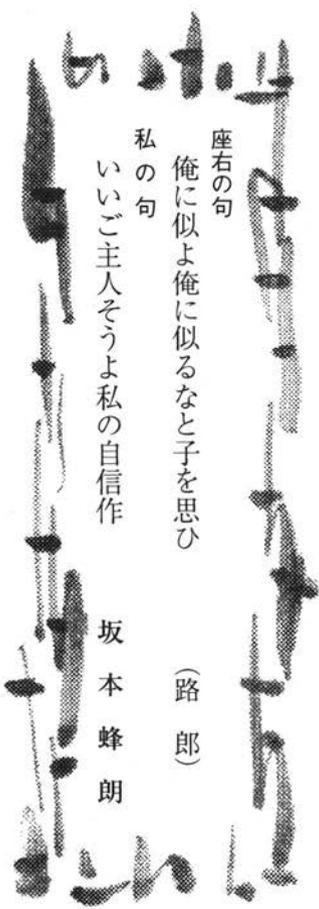
よう分かる落語みたいなお説法 天笑

禁煙をするなと鼻の穴が言う 〃

負け犬になるのでたばこ止めません 〃

拳骨でちゃらになつたら儲けもん 〃

発見がありそうだから足運ぶ 〃



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

いいご主人そうよ私の自信作

坂本蜂朗

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「木を削る」

■巻頭言 春や春	河内天笑	(1)
改訂・増補『薫風句集』索引作成中	栗原道夫	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	(4)
温故知新		(48)
川柳塔の川柳讃歌 (40)	木津川 計	(49)
自選集		(50)
水煙抄	西出楓楽選	(54)
路郎句抄		(78)
ごま川柳入選句発表		(79)
麻生路郎師橘高薫風師から学ぶもの(講演要旨)	早川清生	(80)
第四回各地川柳会代表者会議		(81)
■各地句会だより 川柳塔打吹	牧野芳光	(83)

改訂・増補『薫風句集』索引作成中

栗原道夫

平成14年に、『橘高薫風川柳句集』(以下、『薫風句集』と記す)全句索引をまとめたが、その改訂・増補版を作ろうと去年から作業を進めている。次の内容を盛り込み、より充実したものにすする予定である。

- (1) 読みや字の誤りを訂正する。例えば、『六法全書の重さと聖書の重さ』の「聖書」の読みを「せいしよ」としたが、『川柳雑誌』(昭和38年1月号)を見ると、「バイブル」とルビがあるので、そう直す。「バイブル」と読むことにより、中七・下五のリズムが整い、『聖書』の「重さ」も一段と増す。
- (2) 初出を確認すると共に、句集に収録されなかった句についても収集する。奥田みつ子・小島蘭幸・福士慕情・牛尾緑良・木本朱夏の諸氏から御教示賜わったが、まだまだ初出未詳の句があるので、ぜひ御協力下さい。
- (3) 初出時の句形が『薫風句集』と異なる句については、それも記録する。例えば、

〈敗戦日分水嶺の如くあり〉の句。初出は、『川柳塔』昭和54年10月号。句集『愛染』(昭和61年8月発行)に収録するに当たり、『終戦日』を「敗戦日」に変更した。「八月十

愛染帖……………新家完司選……………(84)

誹風柳多留——一篇研究 33……………鈴木公弘・西口いわゑ共選……………(88)

檸檬抄「横文字」……………大石あすなろ選……………(90)

一路集「始める」……………森山盛桜選……………(92)

「腕」……………村上玄也選……………(93)

「ゴルフ」……………三宅保州……………(94)

初歩教室「それから」……………福本英子……………(96)

秀句鑑賞「同人吟」……………春木圭一郎……………(98)

水煙抄……………

三月本社句会……………

各地柳壇（佳句地十選／小林妻子）……………(104)

柳界展望……………(119)

四月各地句会案内……………(120)

■編集後記（ひとこと／川端一步）……………(122)

座右の句

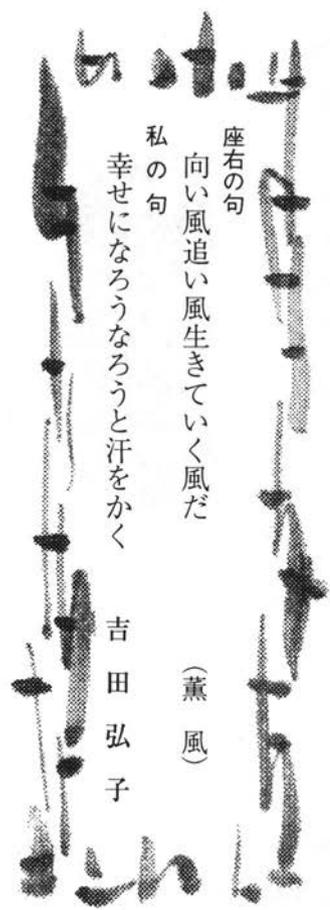
向い風追い風生きていく風だ

私の句

幸せになろうなろうと汗をかく

吉田弘子

(薰風)



五日」の捉え方の変化が窺われて興味深い。初出時の句形が異なる句については、「薰風作品の推敲の仕方」と題して「川柳わかやま」に連載中ですので、御覧下さい。

(4) もとの句集、「有情」「檸檬」「肉眼」「愛染」「古稀薰風」「師弟」にはあるが、「薰風句集」には収録されなかった句について記録する。それらの句の初出も記録する。例えば、「有情」（昭和37年9月発行）は四八七句収録しているが、そのうち一六五句は、「薰風句集」には収録されていない。二枚ずつ二枚ずつ 切る 熱海駅（初出は、「川柳雑誌」昭和33年11月号）などは、「有情」「檸檬」「愛染」の三句集にあるのに、「薰風句集」には収録されていないのである。

(5) 薰風作品は、複数の句集に収録されたものも多いので、どの句集に収録されているかも記録する。例えば、句集「有情」の題名ともなった「砂丘有情 お前と月の出を待とう」（初出未詳。路郎選に洩れた句か？）などは、「肉眼」を除いたすべての句集（「薰風句集」の後に刊行された「喜寿薰風」も含む）に収録されている。

(6) 必要な句については、補注もつける。改訂・増補「橋高薰風川柳句集」全句索引。今年の秋頃には完成させたいと思っている。御支援のほど、よろしくお願い致します。

川柳塔

河内天笑選

豊中市 安藤 寿美子

川あふれず山もくずれずまあいいか

こいびとのいない女の大あくび

福笹を網棚にのせ酔うている

大阪は市長も知事も素人はん

ヒマですがしたくない事したくない

少々の事ではへこまない人だ

八尾市 宮崎 シマ子

噂ほど悪くなかったうちの嫁

友が何故そっぽを向くかわからない

嫌な人一本道をやってくる

人科卒業そろそろ猿の部に入る

命もうオブラートほど薄くなり

流れ行く時も女雛と二人連れ

京都市 高島 啓子

環状線昔なじみの駅がある

ルノアールなら虹色に描く砂漠

東京都庁はバベルの塔である

キリストが主役で眠くなる映画

まっ青な腸だる地中海マグロ

押し花にして知るピーマンの六弁花

堺市 志田 千代

鯨にもかしこみ申す地鎮祭

地下鉄で地震のことをふと思う

メ鯖がでて休肝日ふっ飛んだ

殿方に意地悪されたことはない

ぐずでなく遠慮深いと言うて欲し

孫の手で猫の背中をかいてやる

大阪市 谷口 義

川下で臨時ニュースを聞いている

悪名に気を取り直す大和川

しなやかに生きる室温十八度

しなやかに核心を衝いてくる

おばあさんの見本みたいになつてきた

思っていない事まで喋るから怖い

弘前市 高橋 岳水

(前奏曲)

水柱からしたたる春のプレリユード
花粉症不意にクサメが駈け抜ける

流水に未還の鳥の噂聞く

欠点を曝け仲間の輪に溶ける

乱れない酒は男の勲章だ

看板の粗を探しに行く散歩

鳥取市 徳田 ひろこ

錦より木綿の似合う郷の風

穏やかな松の廊下を拭いている

人間の性が心をひらかせる

負け犬に雪解けてゆくポトポトトリ

婚姻のサインも褪せて半世紀

介護士になって終身雇用なり

羽曳野市 徳山 みつこ

毒餃子に警告された自給率

休耕田トラクターには罪がない

ひと儲け企む顔だすかんだこ

一一九できぬ救急車は瀕死

窓開けて悪夢と光入れかえる

サクラガサイタヘイタイハススムナヨ

鳥取県 山下 節子

高座から人間模様教えられ

朗らかな人もときには気に障る

よく見れば貧乏ゆすりにもリズム

ズタズタと夢を砕いていく詐欺師
そんなはずないとまさかを打ち消した
発病をしてから家系調べてる

鳥取市 岸本 宏章

かびが出た餅だ安心して食べる

湯の恵み湯の町にいて気付かない

二億円当たれば多分気が狂う

男運妻の不満がよく分かる

胸に棲む鬼へときどき豆を撒く

ロポットと百年先を語りた

神戸市 山口 美穂

生きている証拠のメール一 二 三行

年輪と想うて皺をいとおしむ

ここに入れたはずの虎の子がない

早すぎたと梅一輪が震えてる

反論をしてからどつと出る疲れ

多数決も納得できぬ腹の虫

大阪市 小谷 集一

ゆつたりの服がこの頃お気に入り

ケイタイと鍵をセットで持たされる

コンビニと百均あれば生きられる

裏金は罪へそくりはご愛嬌

ブランドに似ているだけで偽じゃない

もがいたら沈むゆつくり浮いている

弘前市 高瀬霜石

イカ刺しがつながっている妻の乱
百パーセント元に戻らぬ仲直り

おしゃべりにつきあい脳を休ませる

ふられると美女じゃなくなる順位付け

肩書きのない人ウマが合いそうだ

両の目を閉じれば見えてくる背骨

八尾市 生嶋ますみ

どの花もクスクス笑い出す四月

あたたかい猫が一匹いるだけで

ケータイの花あちこちに咲く電車

もう一度マジヤンしたいとも思う

悔いてない独りで決めたことだから

思い出す事が父母への供養かも

鳥取市 永原昌鼓

よく食べたよく歩けたと夫を誉め

いいシッコ出たとナースへ見せに行く

五人部屋咳もいびきも気がねする

五人部屋一人じめして年暮れる

糞尿も生きてる証いとおしい

泥の舟修理しながら漕いでいる

羽曳野市 三好専平

広辞苑化粧直しにいそがしい

マネーだけ国境を越えとびまわり

ゼニの世にゼニを持たない良い笑顔

ガレッジのほかに隙間のない都会

歯から目へ耳へと移る老朽化

あこがれた暇を今ではもてあまし

大阪市 板東倫子

美しく老いて死ねとは寂聴尼

少子化へ楽観論と悲観論

偽りの国へ清めの雪しきり

お地藏さんに衝動買いのバラ供え

混沌の地球探りに来たUFO

介護にはロボットさんを買うつもり

茨木市 藤井正雄

倒産の工場にネズミだけ残り

肩こりも愚痴も枕は知っている

城壁の苔語り出す落城記

湯上がりに小梅を添えた宿のお茶

門限が守れなくなる恋の章

しばらくは酸素が薄二度の職

鳥取市 近藤佳子

ふるさとの訛りで話よく弾む

やがて春足を鍛えておきましょう

頬つぺたがつやつやしあわせが匂う

図書館で借りた本では身につかず

空を飛ぶ夢のつづきを見たいもの

ロボットの犬に教わる有り難う

堺市奥 時雄

隠しごとなので今日も喧嘩する
情けない鏡の中の二日酔い

ばあちゃんの有り金見えたレジの前
先客の料理眺めて席につく

幼児の意地悪などこ見てしま
ローン引き残りで立てる暮し向き

竹原市 岩本笑子

診察はどうあれ私生きてる

三歳のウインタカメラ目線なり
テレビから民謡夕餉を温かく

画竜点睛夫を信じて今日生きる
日の丸の赤は満ち欠けなどしない

人間のおごり氷山解けたまま

宇部市 平田実男

二枚目の舌と仮面でご当選
衣と食の半分以上皆チャイナ

地下足袋と軍手で老いをはね返し
バツイチになつて一皮むけました

二世議員ばかり議事堂色褪せる
頑張れよ無理はするなと出す夜食

大阪府 澤田和重

神様がいるなと思う生かされて
いい日です今日という日を折りたたむ

安心が欲しくていつも群れの中

信号が青でも油断するでない
想定外でした女に惚れられて
ずばり言う人で信用されている

豊中市 藤井則彦

先先のためにと覗く青テント

耕した鈍感力でまるく生き
カレンダーに殊更赤く休肝日

能面に覗く妖しい二重あご

万能細胞僕のお蔭と言うマウス

できちゃった婚にも甘い鬼子母神

大和郡山市 坊農柳弘

洞察の甘い男の勇み足

花こしらえ修二会の僧の息遣い
春霞土筆がそつと話しかけ

見つめれば緋寒桜が恥じろうて
なれなれしく私に懐く杉花粉

啓蟄に早や菜の花の真つ盛り

八尾市 高杉千歩

青い鳥見える眼鏡にもう飽いた
偽装薬物未来に夢がなさすぎる

冷凍に馴染めず被害にも合わず
追ってくる老いの早さがスリルめく

戻り寒ホカロン二枚離せない

自惚れてときどき覗く未完の絵

砂川市 大橋 政良

これでもか無言で押してくる威圧
ストレスに酒でうがいをして帰る
未来図の中に風船玉とばす
化けの皮そろそろ剥げる頃だろう
まだ炎える火種を一つ持っている

黒石市 相馬 一花

神様も恋をしましたその昔
ブランドに恥をかかせている中身
雑草のハートを知らぬ都会人
ママさんが菩薩に見える飲み屋街
暇がある時はあいにく金がない

黒石市 佐藤 古拙

妻の留守居場所をさがす冷蔵庫
冷蔵庫嫁の縄張だけに見え
北国のさくら爆発的に咲く
子が飛ばし父が拾って竹とんぼ
税務署を出ると足取り軽くなる

十和田市 阿部 進

落ちついて聞けば何でもない話
何事も大事に生きた父でした
天下り天国未だ健在だ
何時までも若々しさを保つ日々
好きなことなんでもできる一人っ子

平川市 小寺 花峯

わたくしが菟弱となつてゐる過去
辿つてきた過去が歪んだ空つ風
また靴を履き違えたかボケの道
にこり酒上澄みだけを飲んでおく
縄のれん騒ぎ立ててるのがコップ

弘前市 櫻庭 順風

愚痴ひとつ言わず三男育てあげ
曾孫にも囲まれてみまかる白寿
玉納奉寿安らかな旅立ちを
神飾りまごころ託し奉奠す
故人をたたえ思いを届け見送らん

弘前市 須郷 井蛙

広告費出せる会社でまた持てる
休日は腹の時計が狂い出す
東京も久しき目まいしてしまふ
反抗期の矢打つても糠に釘
太刀持ちをいつもつとめるバセリです

弘前市 福士 慕情

忍耐を培っている北の冬
掌にふわりと落ちて消える雪
柔らかい言葉で骨を抜きにくる
不意に来た波に足元攫われる
見学の酒蔵顔が紅くなる

弘前市 今 愁 女

二ヶ月の束の間日差し冴え返る
薄氷がよろめくように解けはじめ
黒土が木々の根方に輪を広め
啓蟄に犬も土嗅ぐしぐさする
月からはしらず昇るこの地球

弘前市 岡 本 花 匠

和服召す妻は佳人の月曜日
目刺し焼きメタボの夕餉笑顔の輪
如才なく体をかわした粋なひと
ハーモニカの思いい出を聞くレポーター
四月雪名残り雪では済まされぬ

弘前市 相 馬 銀 波

合格の土産ばなしは派手になり
国産の食に自信の鉢がある
主流派のちから助成の枠うごく
接点は予算に絞る政治劇
本音よりお世辞が先と手を握る

さいたま市 八 田 敏

還暦も米寿も仲間老人会
老人会古希は若手に数えられ
旅の夢抱いてデジカメ老いも買い
逝きし妻若き日のふみ多き夢
家中の灯をつけて尚淋しき夜

さいたま市 星 野 育 子

どうもより私の好きなありがとう
自己流でいろいろ試す験担ぎ
視線と超ミニは需要と供給
紙一重そこに大差の溝がある
書の個展達筆なれど解読難

日高市 根 岸 方 子

SLの始動が春を連れて来る
せり ならずな我が世の春と休耕地
給食の素材へ父母ががなり立て
漢方を勧める友も膝を病み
寒風も何ぞコートの花でいる

柏市 永 峰 宣 子

平成の古希還暦が若過ぎる
毒ぎょうざ日本の食を照らし出す
日本人主食を米に戻す頃
二年ぶり花芽ふくらむ蘭の鉢
春からの値上げへストープはガスに

柏市 河 野 桃 葉

カフェオーレ恋の予感もする甘さ
無添加の愛に胡座をかいている
夫には内緒ホテルのデイナーシヨウ
ハニカミを武器に男になる王子
少子化にバーバの出番減っていく

東京都 岸野 あやめ

気に入られ買われた靴が欠伸する
きついことさりと云つてのける嫁
えらいもんや二人目産んで出る余裕
花の名も忘れ忘れて老いの春
熱三日醒めたら五歳ほど老けた

東京都 清原悦子

困難を乗り越えられる好きな事
心臓が先に駆け出す二秒前
パノラマに納まり切れぬ春の景
本当の事を見つめていたいだけ
猛犬に注意と犬の人見知り

東京都 小川賀世子

メモに取るほどではないがいい話
楽しい日だった自然と笑みこぼれ
笑い過ぎ目尻のシワを伸ばして
寒い話だ熱爛を追加する
横顔の愁い気になる今日の友

横浜市 菊地政勝

飽食の日本揺さぶる自給率
二次会に入り敬語からべらんめえ
酒盛りの席へ一人のウーロン茶
惚け悲し内助の功を忘れられ
症状を喋ると薬増やされる

横浜市 小野 句多留

小一がそろそろ意識お年玉
エコツアーまた痒くなる好奇心
善人も連呼されたら嫌な感じ
満面の笑顔がミスをとり下げる
激震が続くアメリカ依存症

富山市 島 ひかる

電子音聞き分けている母の耳
大根めし作り平和を嘔みしめる
旨かったその一言に幸満ちる
九条のおかけ続いている平和
旅をする自分探しを繰り返し

可児市 鶴留百合

もう少しきれいに啼いて猫の恋
電池切れさせる迷惑メール数
カバン持ちしたい海外出張へ
巻き込んで当人達は元のサヤ
至福だなコタツに入り雪見酒

可児市 板山 まみ子

演歌にはなりそうもない半生記
四人でも全会一致ままならぬ
夕方の月よあなたも寂しいか
立春に自分のためのヒナ飾り
安心の変りばえせぬ家の味

静岡県 蘭田 猿 杏

尾張旭市 三浦 きぬ

労わりの歩幅で登る夫婦坂

無人駅見捨てはしない花活ける

貫禄のその半分は皮下脂肪

砲身が砂漠の月に黒光り

訓練の時は消火器うまく消え

大山市 吉田 幸子

暖かい心が雪を解く下山

子に乗せて海へ漕ぎ出す娘にエール

端つこのコラム釘づけする叫び

密度濃い暮らしの音がよく響く

自分への応援歌ですどっこいしょ

大山市 金子 美千代

寒ごもりじつくりおでんでも煮よう

機が熟すまでの我慢がまだ続く

まな板のリズムしあわせ立ち籠める

いい事がありそうアロエ花を付け

バカ笑いさせるテレビに腹を立て

大山市 関本 かつ子

サービスの残業なのか灯が点り

増税に下方修正する未来

幹事まで動かなくなる蟹料理

お料理を思い出せないバイキング

育児書も行方不明の三人目

生きるのもしんどいそれが長寿国

長寿国目出度いわけが見当らず

長寿国で老いて肩身が狭くなり

党首討論ふところ心配ない面々

百円ショップ財布気にせず買える幸

年金を誂かされていませんか

人の好いおっちゃん一つ負けてくれ

欠点があるから君は君らしい

私が私らしい咳をする

いい女だったと座禅組みながら

京都市 三宅 満子

栄枯盛衰ずつと見守る地藏様

原油高に柴も燃やせぬビルの街

パソコンに愛想つかされひまな午後

味噌汁に夕べの喧嘩溶かしとく

しばらくは気ままに伸びよ春の草

京都市 西村 益子

頭上から物言わないでお父さん

窓灯りひとつひとつにある暮し

同じ事出来る喜び老い二人

とりあえずお米を洗う老夫婦

晴天にあやかりたくてスニーカー

京都市 榎本宏子

ふるさとがテレビに出ると大騒ぎ

亡き父母の真つ正直が子に返る

友の死に身辺整理せかされる

生き方に方程式をもつカラス

すぐ近くふるさとがある不幸

亀岡市 井上森生

老い最中友と語らう汽車の旅

控え目でほろり嬉しい句に逢える

残高に見合う余命で欲張らぬ

修身は子にも親にもやはり要る

路の藎ほろほろ苦い春の使者

長岡京市 山田葉子

ありがたい掛軸読めぬとこがいい

古稀はそこパソコン居間のアクセサリー

延長戦明日のことは考えぬ

家計簿も値上げラッシュに身構える

若いもんは出かけてますと一人住む

大阪市 神夏磯典子

頂上はまだまだ止つてはならぬ

ダイヤモンド富士に払拭してもらう

辛酸を舐めた芸だな笑わせる

少年の視点を誰も気付かない

ああ桜若返らせてくれる花

大阪市 川端一步

この四月老いは怒りの日とすべし

元気な日見舞い三軒梯子して

今日もまた人殺しとやカラス鳴く

大阪の蕾がやつと咲きました

子ら弾む声が聞こえる新学期

大阪市 榎本日の出

恋煩い一度もせずに終りそう

渋い茶に饅頭すぐに帰れない

美しいバラはとげまで愛される

どこにでもある景色でも懐かしい

相談にのつて責任とらされる

大阪市 西川更紗

メガネはずして立ち食いの駅うどん

無人駅人の温もりうすい駅

入試控えて連日の高いびき

雨催い明日への予定くずされず

ちぐはぐな会話もたのし老介護

大阪市 中井萌

人情の街やったはず大阪は

傷ついて人の情けに溶けていく

染まらない染まりたくない白の自負

味方にも敵にもならず外野席

お経より雑談長いお住職

大阪市 鶴田遠野

妻の留守風邪が計画わやにする
人生ドラマ原作は神が書き

流し目に脳もハートも溶かされる

少子化に青田刈りする保育園

関東煮浮世の味を染みこませ

大阪市 古今堂 蕉子

全身科欲しいわ あこもこも駄目

暖かくなれば会おうと皆にテル

受け答え臨機応変すぎ哑然

感謝する心がつれてくる温み

まっすぐな敵が作れるようになる

大阪市 奥村五月

くされ縁賞味期限が切れている

息子にも殺されそうな世が怖い

パチンコの出玉で決めるお献立

バラの花美し過ぎて棘を持つ

悪態をつく時妻は河内弁

大阪市 津守 なぎさ

春爛漫桜前線北上中

何があってもドラマすむまで動けない

限られた器で謳歌する金魚

無農薬野菜自慢の自家菜園

他人様に教えられてる喜寿の顔

大阪市 松尾柳右子

水仕事終えストープに手をかざす

鍋料理つづく寒い日猫が来る

老眼鏡入れ歯はずして磨く歯よ

絶食の胃の検査済み食進む

齢重ね疎遠になったハイヒール

大阪市 升成好

現代に人情という探しもの

流暢な関西弁は不滅なり

伸びをしてちよつと運動した積り

居ませんの返事で足りる妻の留守

古希いまだ自分の顔をつくれぬ

大阪市 榎本舞夢

忘れたい忘れられない我が子の死

思い出の欠けた茶碗で今も食べ

うきうきと浮かれて足をすくわれる

キャンセルされ事故に遭わない幸もある

母の背を拝んだ遠い日の日記

大阪市 森田明子

友達もやっぱり少しヘソ曲がり

わたくしも絵の中に居る雪の道

水筒に山の空気を持ち帰る

迫られてやつと片付くわが暮らし

言い訳を考え既に負けている

大阪市 小糸 昭子

パソコンもメールも出来ぬ浦島だ
国あげて何処の社会もリベートか
猫のよに日がな一日眠りたし
無料パス貰う写真が高かつた
この年で他人に気兼ねもういやや

大阪市 小泉 ひさ乃

バレンタインためらつているチョコ売場
挫折して迷わず原点に戻る
子の長所伸ばす教師のほめ上手
カーテンを引いて一人の城作る
手術した眼に青空がきれいすぎ

大阪市 井丸 昌紀

お化粧に見とれ一駅乗り過ごす
終電の間際に醒める酔っ払い
入院も結局たばこ止められず
掛け違いそのまましておくボタン
きっぱりと断り切れぬ飲む誘い

大阪市 熊代 菜月

信濃路は雲舞う中の遠火花
精進のあとも鮮やかかくし芸
晴れ女ばかりの旅か雨あがる
年ごとに駅への道が遠くなり
喜寿の腰揺らして見せるフラダンス

大阪市 岩崎 公誠

脳みその重さ軽さを笑いあい
地獄耳どうして話食い違い
古希の坂これから先は折れ曲り
失敗のない男には味もない
甘言と花束の嘘抱かされる

大阪市 中村 れんげ

二度おほこ生きたあかしを句に包む
始発駅子を見送つて余寒のみ
病院に行つて医者から風邪もらい
怪しいと二の足をふむ年の功
洗つた手汚れぬうちに写経する

大阪市 池上 清治

子年生まれ隙間にもぐる癖があり
混まないと一寸淋しい初詣で
値段表覗き会席止めにする
五十年経つ暫定法まだ続き
隣席を覗けば漫画すぼめられ

大阪市 岩崎 玲子

花だより聞くと心が踊り出す
どの花も個性にあつた鉢に植え
側溝に咲くタンポポは母に似て
キッチンの出窓一輪歌つてる
玄関で送り迎えの花の笑み

大阪市 平 嶋 美智子

片すみに居場所があつていい余生

洗濯物肩いからせて陽にあたり

陽の香り包む洗濯物たたみ

氷雨の日軒にお入り雀たち

五センチの雪で悲鳴を上げる都市

大阪市 津 村 志華子

泣き笑いみんな知ってる夫婦箸

幸せのかげら大事に抱いている

点滴の雫に縋る命の灯

まっすぐに生きて憚ることはない

仏さん一生活んめい生きてます

大阪市 岡 本 久 峰

こそこそと投資ファンドにあるずるさ

草芽吹く難波の宮に試歩の杖

ブレーキが利かなくなつて牢屋入り

新知事を待ち受けている伏魔殿

大阪を借金まみれにした太田

大阪市 伏 見 雅 明

飛びついてすぐ持て余す孫の守り

すくすくと身の丈だけは父を越え

休まれて妻の重さを知らされる

時々脳を耕す本を買う

だからだと長い祝詞で座がしらけ

大阪市 川 原 章 久

赤福の戻り待つてた伊勢土産

社長以下お辞儀が足らん頭が高い

銃ナイフ人の命が軽すぎる

飽食の隙間を狙う胃潰瘍

飛び込んだトイレに紙が切れていた

大阪市 大 川 桃 花

選挙カー昼寝邪魔して走り去る

車窓の景色みたいに飛んでいく月日

一日を半分にする午後の雨

時々本気で祈る神ほとけ

シルバー席ぐつつすり寝てるヤングマン

大阪市 福 岡 末 吉

意を汲んで心静かに語る妻

主夫の座に就いて雑事の重さ知る

喜寿近し漸く世の坂見えてくる

従順さ装う妻の無関心

お開きの空気漂い箸が舞う

大阪市 渡 部 さと美

丹波竜姿見るまで死ぬませぬ

紅白の盆梅まさに内裏びな

あの人も夢追い人かピンク好き

中国は背伸びつづけるとぶの中

インスタント便利でおいしいのも罪な

大阪市 近藤 正

迷つたら風の吹いてる方に行く
百日紅植樹は済んだ彬の碑
論戦にクリンチ上手い福田さん
年金から保険料までむしり取り
公約をすぐ反古にする知事市長

大阪市 中村 叡子

大舞台臆せず見事若い知事
孫に豆撒かせて逃げる鬼となり
年越しに叔母は桃割結っていた
五色豆三日がかりで年齢の数
懸命に国親我が子愛し生き

大阪府 米澤 俣子

財産は無いが気楽という宝
春一番という荒っぽい春の使者
一巡りして最初の服にたどり着く
解説へネクタイしめた元力士
青い目の土産地下足袋売れている

大阪府 初山 隆盛

豆板に寄せるぼりぼり囁んだ音
すきま風熱燭あおるウォームビズ
美しい国へ早ばや腰を折る
暗算も酒も強くて輪を束ね
年俸と期待ずっしり背番号

大阪府 野田 栄呼

勿体ない気持が捨てる手を止める
正直と言われて本音喜べぬ
寝静まりトイレ気遣う旅の宿
省エネを一家長老先がける
もう買わん着尽くせないよ迎えまで

大阪府 桑田 ゆきの

好きだった餃子に恐怖煽られた
自打球に当たり歯ざしり雪を蹴る
半分は忘却の果て手毬歌
介護する腕に自信をぶら下げる
宝物探す眼となりゴミを分け

池田市 栗田 久子

納豆をみかたに骨を鍛えてる
相寄れば歯の無い口で語り合う
楽しげな笑いの中でさくら餅
胸張ってエコに徹する老いの日々
西空にとぎすまされた鎌の月

和泉市 横山 捷也

評論がどうどう巡り赤のれん
田畑を継いだが幸せとも言えぬ
無農薬ですと言いついて配る
まとまりそうだビールを追加する
おだやかな顔だったよと電話口

和泉市 西岡 洛 醉

八十円切手の旅も民営化
精一ばい八十路を押し雲流る
派手な服まだ似合います胸を張り
何事も無く凡人の朝が明け
大都会蟻の一匹歩を運ぶ

泉佐野市 山本 蛙 城

僕にまで架空請求来た珍事
賃上げを求め労組がらしくなり
まあ見てろ日本も石油掘る構え
平和だな刺身のつまを自認の日
何てこと国技にいじめあるなんて

大阪狭山市 矢野 梓

一桁に減らして年の豆を食べ
自己流で活けた花にも癒される
取れ立ての野菜に元氣もらつてる
冷凍庫国産以外受け付けぬ
躓いて神がブレイキかけてくれ

交野市 森本 弘 風

病んだ母遠い記憶の中に居る
心電図ツートン取り外す
お父ちゃん待たせたねえと母眠る
診断書三途の川の渡船券
子や孫の悲しみ乗せた霊柩車

交野市 山川 日出子

三十年元気をくれる鳩時計
古時計主がああ世へ先に行く
孫と祖母手作り屏風雑遊び
見事な手兄弟クロスピアニスト(レ・フレール)
戦時中供出の鐘山寺へ

河内長野市 山岡 富美子

時々自分をほく無駄遣い
ゲーム機で脳にも鉄を入れてやる
感情に走ったつけが追ってくる
水をやる花は素直に返事する
食卓にまさかまさかという刺客

河内長野市 植村 喜代

よい年と願っていたら救急車
病院へ足を運んでお正月
美味しくてもお節一人は味けない
嫌な人家の中まで口を出す
孫一人増える予定の四月です

河内長野市 坂上 淳司

上客もツアー客でも同じ湯場
夕食後手持無沙汰のランプの湯
露天風呂湯桶で回すワンカップ
留守番の夫の土産にポトルの湯
脱がないでここはハワイの温泉場

河内長野市 村上直樹

岸和田市 原 さよ子

朝焼けの勇氣凜々一万歩
いよいよの時は昭和の底力

逆風にきりり男は燃えて立つ

がむしゃらに攻めて攻め抜くロスタイム

立つしやがむまだできるからまだ若い

河内長野市 水谷 正子

鬼は外鳩に多目に播いておく

夫婦ですちつとも油断してません

ランドセル一人走ると皆走る

失せ物を探すスタミナとうに尽き

千の風さくら咲いたら観において

河内長野市 井上喜酔

人生は自作自演で面白い

目標も余裕もないが暇はあり

好き嫌いはつきり言える腹の虫

体力が落ちて粘る高齢化

国会は正論よりも多数決

岸和田市 岩佐ダン吉

こぼれるほど一言居士に酌いでやる

黙黙と正論ひとり吐いている

人間ですただただ職がありません

休んだらどうや母さんの口癖

福祉には冷い税を払ってる

年賀状可愛い顔のねずみ達

紅一点こんな老女ですみません

安らぎの旅数日を若がえる

年金の夫婦に寒い記事ばかり

飾り気のない親友の言葉尻

岸和田市 井伊東吉

ケータイに夜も日も明けぬヤングマン

春兆すうなり声出す恋の猫

冬空の晴れ間にしばし騙される

ユニクロとマクド愛するおじいちゃん

官僚に現場の声を聞かせたい

岸和田市 土橋房枝

優しさで一步踏み出す勇氣出る

美しい日本語話す異国人

うるわしき友情消える嘘一つ

神様に愛されるにはまだ足りぬ

愛の表現うますぎて気障に見え

岸和田市 堤 植代

節分がすんで義理チョコ用意する

豆まきも一人でさえぬ鬼は外

高齢も後の部類と知らせられ

待ちぼうけ椅子がないので帰ろうか

ノックする相手がいないバレンタイン

岸和田市 雪本 珠子

古き良き昭和が遠くなつてゆく
自由手にしても心は満たされず
ごめんねの一言あれば許すのに
沢山の笑顔に支えられている
愛猫が安定剤になつている

岸和田市 森元 ふみよ

不信感拭えぬままの投票日
駅伝の襷に繋ぐ郷土愛
突然に友の電話で過去がばれ
血税で同胞見捨て給油する
埋蔵金一億人に分配を

岸和田市 小島 笑司

福は内鬼は外では勝手すぎ
サブプラで世界の株価萎縮する
ガソリン税下げても道は外れない
春近し雪押し割つて福寿草
大阪は顔が変つただけかしら

堺市 河内 月子

春ですよ今日からたんと歩きましょ
かさかさの手を根気よくマッサージ
風邪引かんようにちよこちよこ動いてる
まだ旅は続く脚腰きたえとこ
旅半ば脳細胞に喝を入れ

堺市 村上 玄也

薄情な男が見せる狭い背な
口髭を落として威厳損なわれ
向かい風覚悟の上でする主張
体力のなさカバーする空元気
柔らかな言葉の中に芯がある

堺市 宮本 かりん

思いたつた時をチャンスにしてみよう
長い間を破つてさりげない言葉
振り向いた途端視線がびたり合い
アクセルを踏んで悩みを通過する
彷彿と浮かんだ過去が美化される

堺市 近藤 豊子

気候変動だんだんひろくなる砂漠
砂嵐 小象ら食べる草もない
くつきりと背骨あらわすアフリカ象
桜前線 気候変動気にかかる
インダス川川ぞいに住む蛇つかい

堺市 西村 りつえ

ゴールまで元気な笑顔撒いて行く
時惜しみ日毎昼寝で息を継ぎ
肉じゃがの煮崩れ好きな家族です
点と線繋げなかつた片想い
五十年バレンタイン遅すぎた

堺市 矢倉 五月

友がみなキラキラとして見える日よ
同居して長男さんにされている
出よか出まいかコタツで聞いているチャイム
麻姑の手で背中搔いてるもめた夜
当方の都合で今夜店屋物

堺市 石堂 潤子

どつちでもない事だから迷つてる
一種歩幅広げて煌めいて
昼寝するためのテレビがついている
振り向いて祖母を氣遣う子に育ち
運動のつもりデパート漫遊す

堺市 柿花 和夫

老いるとは愛の偽装に慣れること
晩成を信じているは親ばかり
モナリザは拒否権行使した顔だ
いよいよの時は素直になるつもり
お返しに火種を少し置いてきた

堺市 齋藤 さくら

厳冬に負けず紅梅咲いてくれ
しばらくはギョーザ食べぬと言うてはる
日本製のセーターですと念押され
忙しいうちは減多に風邪引かぬ
さずかつてからが本当の夫婦なり

堺市 和田 つづや

あきらめと悟りの違いまだ見え
人生もしどろもどろで古稀になり
物置きで亡き母の香にふと出合う
郷愁にひたる孤独な僕が好き
火傷するほどの情熱うせている

堺市 加島 由一

今楽をさせたらこの子だめになる
堪えている父の姿もちよつと見せ
温泉に来てまで妻と子の話
しばらくは寝言のことは黙つとく
自衛隊で鍛えてもらいたいモヤシ

堺市 山本 半銭

振り袖へ張り切っているおばあちゃん
昔話箆箆に晴着眠つてる
チョコレートもらつてくれる人が居る
散歩道お宮に鳩が見付からぬ
鳴物入り生まれた府政見守ろう

堺市 源田 八千代

生協の安全神話崩れ出す
二足歩行普通に出来る有難さ
怪我をしてバリアフリーを痛感し
介護保険掛けるほどの支援なし
四歳児初めて作る雪だるま(11年ぶりの雪)

四條驛市 吉岡 修

待つてよう四月一日恋叶う
生き字引重宝がられ煙がられ
サクラチル脛にぎくつと来た知らせ
笑われて笑われてこそ繁昌亭
福耳と見えてどっこい地獄耳

吹田市 山本 希久子

春はあけほのすこし女をとり戻す
退屈は嫌忙しいのはもつといや
妥協して私だんだん小さくなる
ストレートな誘いストレートに拒絶
春の視野ゆっくりペダル踏んでいる

吹田市 穴吹 尚士

婆さんの小百合見に行くサユリスト
今年こそ笑いに行こう繁昌亭
大阪は破産会社と脅される
赤福が売り切れと聞きほっとする
丁寧な言葉で文句つけられる

吹田市 太田 昭

指先に道草させる電子辞書
喉ぼとけ言いたいことを抱かされる
煩惱を捨てて背骨が脆くなる
カリエスの痛み脳天突き上げる
並足の老女が俺を抜いて行く

吹田市 大谷 篤子

飢える日がまた来ないよう祈ってる
娘を育て晴れ着の着付習った日
祝宴の晴れ着に視線寄つて来る
だらだらと暮しストレス溜めている
愛された遠い日の風抱いたまま

吹田市 瀬戸 まさよ

いたわりを言い合ひまして切る電話
氷見の鱈恋し横目で見ると高値
甘酒の日はコーヒを飲まない日
スポーツは苦手利発な子を憂う
日本より広いと知ったカリフォルニア

吹田市 須磨 活恵

百均へ行くとまさかが下げてある
十円が足りずに万札を潰す
冬トマト他人のように水くさい
聞き流す事も覚えたイヤリング
言い負けてぐつと堪えて喉仏

吹田市 野下 之男

ガソリンが道路に化ける手際良さ
倒れても笑顔で走る心意気
人生を泳ぎ疲れた日向はこ
春の夜は蘇州夜曲に美味しい酒
春の夜をただ只管に猫の恋

吹田市 木下敏子

七十のあとも咲きたい彩を足す
咲いたとて摘んでもらえぬ返り花
せめて句に花も実もつけぶらさが
見るだけですまぬまだまだ欲しい服
寒くても早起きをして生き続け

高石市 浅野房子

野分吹く親兄弟のいない里
思惑と当ては外れるものと知る
すりごまをたつぷり母の味になる
リーダーが留守で騒がしいカラス
春を待つ心は昔より強い

高槻市 乙倉武史

毒餃子食の安全警報器
自給率お寒い国の食事情
雪予報アロエを中へ入れてやり
ごゆつくり口は重宝腹と別
ハイハイと二つ返事を不安がり

高槻市 指宿千枝子

見ては駄目と言われ覗いて見たくなり
老眼鏡拭いては覗く針の穴
ストレスを発散させる万華鏡
大寒に重装備して万歩計
番犬が吠えると鬼の面構え

高槻市 杉本義昭

春の芽がそつと顔出す雨上がり
ブラームスやさしくひびく雨の午後
ネックレスあなたにみつめられたくて
捨てた道おいでおいでと誘ってる
疑えばどんどん重くなる心

高槻市 生田義一

新年会酔って悪口止まらない
大寒が雪をお供に今日は
傘寿無事次は米寿と欲を出し
視聴率トップ独走タレント知事
伝統も老舗の意地もどこへやら

高槻市 峯村勲弘

理不尽を内部告発戒める
店頭で株の下落を恨む主婦
膝ゆすりいらちがじつと耐えている
ひまな時読もうと買って積んだまま
遺言の出しの言葉思案中

高槻市 傍島克治

焼芋の売声途絶え冬終る
がまんするほどいらだちはひどくなり
古日記薄れた記憶確かめる
穴馬のはずの夫は駄馬でした
不器用な奴と言いつつこき使う

娘と同居感謝しながら世話になる
高槻市 井上照子

果実酒を少し含んでいい夢を
長電話従姉妹の涙見えるよう
バーゲンに目がよく動き疲れでる
雪少し乗せて紅梅春を呼ぶ

高槻市 左右田 泰雄

凍てついた大地に芽吹くたくましさ

平凡がいいなと思う冬日向
唇を心待ちして目をつむる

雨傘を杖にバス停まで歩く

年寄がキョトンとしてるコマーシャル

高槻市 大崎侑子

自信家の言にうかうか巻きこまれ

中国の自信いずこへ毒ギョウザ
覗き魔のお向かいさんは情報屋

弔辞では仕事の鬼と褒められて

来客の度に家中片付いて

高槻市 富田美義

荒む世の介護の愛に目が潤む

網の目が粗く命が漏れている

結び目を時々緩め風を入れ

背伸びする小指の先が罪まねく

心臓のムダ毛を抜いて出直そう

置いてきた言葉一つに責められる
高槻市 佐甲昭二

耳寄りな話には膝崩せない
男なら叩けばほこりぐらい出る
よく笑う人が黙っている不気味
飾らない言葉がほぐす初対面

高槻市 執行 稲子

叩いて伸べてアイロン要らず天陽干し

生温いセリフストレス溜りそう

これからは過去振り向かずケセラセラ

ゆっくりと卒寿めざして歩く春

のびのびのじいじばあばの鼻の下

高槻市 西谷 治三郎

犬にブランド主人はバーゲン街に行く

品格が流行語とか意味はやけ

しゃあしゃあと平気で言い訳できる歳

人情も頭もテレビも薄くなり

内助無く介護は手抜き値は上がる

豊中市 江見 見清

合格と学費でやれやれが続く

お風呂場の唄カラオケに行つたんだ

城ヶ島で利休ねずみの色を知り

爺さんが逝って崩れた風呂の順

人生ゲーム答はいつも複数個

豊中市 吉田 あずき

大吉と出て賽銭を入れ直す
吉兆の謝罪母とは哀しきもの
赴任地がかぶった面がはずされず
脱ぎ捨てた服さえだるい顔をする
やわらかい雪が境界線を消す

豊中市 岸田 知香子

山遊び甘く見すぎて悔い多い
雪山の恐怖他人を揺さぶらせ
雪便り耳に春節中華街
冷凍品手近に使う恐ろしさ
手作りに越したる事なし母の愛

豊中市 山門 タミ

機械には無理な頭がうるたえる
不自由な我が身さておき子を案じ
老残にむち打つ川柳有難や
真実も嘘もおだても喋る口
福豆を播く真似丈で口に入れ

豊中市 坂上 高栄

マフラーを風なびかせてツーリング
一善の黄泉路を照らす灯は消えぬ
一年を三日で稼ぐエビス様
満ち欠ける十月十日のややの声
団塊の世代北風容赦ない

豊中市 水野 黒兔

村中で一番目立つ寺の屋根
隣との格差に妻の目が光る
大根の白は大地の染め忘れ
地を破るように顔出すふきのとう
二月とは立てた誓いを直す月

富田林市 中井 アキ

逢いにゆく傘にはんなり牡丹雪
陽だまりで昨日をなぞる影法師
私にひとつ欠けてる角砂糖
柿の実の赤に聞きたいことがある
シンプルな余生にもある朱の時間

富田林市 片岡 智恵子

どうしても返せぬ恩のある大地
責任をとるには軽い首である
角界の似て非なるもの無念の死
敵の名に恥じない者を敵にする
真つすぐに生きて残った傷の跡

富田林市 大橋 鐘造

一言が味方の数を左右する
鱗落ち風の動きがよく見える
目をとじて夢の続きに彩をつけ
人気者裏で孤独に耐えている
縄のれん男同士の詩がある

富田林市 稲川 惠 勇

踏むたびにいそいそ春が伸びる麦
すぐ顔に出るので妻に隠せない

ローン地獄終の棲み家が青テント

栄転の辞令で赤字背負わされ

胴上げを横目でにらみサクラ散る

富田林市 池 森 子

だから坂が続いて絆締め直す

七福神みんなわたしを迂回する

掛け違う釦に雪が降りしきる

自画像にいつも炎が見え隠れ

ふるさとの小川へ辿り着くやがて

寝屋川市 平 松 かすみ

置き炬燵サクラサク待つ差し向かい

梅の花がきいっぱい卒寿から

夫無心絵解きクイズをしています

わたくしの後姿を観るビデオ

餅搗きの講釈までも映される

寝屋川市 籠 島 恵 子

赤福の土産いただくあのその後

失ってはならぬ日本の冬景色

色なりと変えてみようか冬帽子

ハナちゃんとハナちゃん一方は子猫

集合の合図があつたらしカラス

寝屋川市 富 山 ルイ子

またまたまた切羽詰まった嘘を聞く

先代の歯科医の治療なつかしむ

雪子報豌豆にする寒冷紗

花粉症ひっきりなしに出る涙

心まで寄り添っていて看る介護

寝屋川市 森 茜

糠床を平らに叩き旅に出る

落ち椿踏まないように島の道

湯上りを隠す鏡のうすぐもり

冬ごもり炬燵弁慶でんとおり

ビールスを拒むマスクが闊歩する

寝屋川市 太 田 とし子

梅の枝あやかる絵馬を陽に向ける

こだわったばかりにホホホが出てこない

若い知事浪速にかける虹の橋

過信した安請負のあと始末

行儀よく並んだ仏にも格差

羽曳野市 酒 井 一 壺

何もかも後手後手ばかり日本国

試されているとは知らずつい本音

私の都合無視してやって来る

相槌を打って相手の腹を読み

美しいけれど魅力のない女

羽曳野市 安芸田 泰子

小糠雨浴びて目覚めたつくしんぼ

雛の宴手持ち無沙汰の父であり

寒牡丹雪にはじらう頬かむり

何もかも許す今夜の細雪

木守柿争う百舌鳥のけたたまし

羽曳野市 永田 章司

肩書きの消えた交流ほんまもの

平日の温泉郷に見るのどか

湯たんぼが一番いいのエコばあば

巻きずしがチヨコレートより先ですよ

ひっそりと豆撒きをする老いふたり

羽曳野市 吉川 寿美

身の内の鬼と仏があいこでしよ

あなたとなら渡れそうだなかずら橋

ボーダーライン引いて逢わねばならぬ人

もう一つのわたしの顔を知る鏡

官僚の錬金術のみごとさよ

羽曳野市 吉村 久仁雄

古傷の疼きに耐えて好々爺

ゴミ出しへ酒席を先に立った主夫

カレンダー通り働きたい派遣

父の遺志休耕田に鍬のあと

酒が延ばし酒で縮めた余命表

阪南市 森村 美花

歯切れよい友の会話にある若さ

爺ちゃんの顔がくずれる孫メー

嬉しいな福耳ですと誉められた

自然体で生きて行きたい最後まで

容赦なく格差広げる小さい国

東大阪市 北村 賢子

助かるべき命をたらい回しされ

ローカルの旅一期一会という宝

信じるから裏切られても信じたい

咲き終えた花へせつない花鏡

付いて離れて何でもありの永田町

東大阪市 安永 春

あの人にあげるウイスキーボンボン

冗談から華を咲かせた赤い糸

天満にも嬉しおますな繁昌亭

マンションに蘭草の部屋はサンルーム

日々つなぐよいしょこらしよで黄昏る

東大阪市 佐々木 満作

鬼の面外せばパパのえびす顔

小遣いの前借りそつと妻に請う

月明かり明日の勇氣くれている

情報の渦に溺れてウツになる

頑張つてタレント知事は子沢山

東大阪市 笠井欣子

駅までに休むところが二ツ三ツ
ホツとした心に風邪が忍び込む
怒るのも気力いります笑つとこ
ブームスかければすぐに眠る犬
くたびれた足にだらだら続く道

東大阪市 中岡 妙

鍋囲み無口な夫婦喋り出し
亭主留守張り切る前に昼寝する
ターミナル人間模様見て飽きず
着膨れて風と向き合う朝の靴
起重機が古家の記憶つまみ上げ

東大阪市 米田水昇

蠟梅の妖艶な香にくすぐられ
箒目をたてて清しい梅の庭
テロに散る洗脳されていた命
洗っても消えない過去の傷がある
冷凍品みな有毒に見えてくる

枚方市 丹後屋 肇

朝ドラにテロップ震度4の報
欠航の待合室でかく軒
信頼の弟子が寝返る下剋上
招待状欠席告げる花粉症
デジカメに愛想振り巻く錦鯉

枚方市 海老池 洋

無心いうATMに見える親
果樹園も野猿にとつていい餌場
雲に浮く富士は正しく神の国
幸福の過ぎて祈りを忘れかけ
葉牡丹も春だ春だと臍を出す

枚方市 寺川 弘一

誰とでも仲良くできる幸福な人
小学生がすぐ富士山を描きたがる
天国と地獄にぎわう秋祭り
歯を磨く今日のけじめをつけるため
愛という字をいくら書いても上手くならない

枚方市 二宮 山久

リハビリも思うに行かぬ指伸びず
病床の退院夢みる露天風呂
病床のペランダごしの花一輪
病床で淋しがつてる万歩計
体から少し休めと指示が来る

枚方市 森本 節子

春になったら身辺整理冬ごもり
赤福が動き出したというニュース
二度三度くり返し見るちりとてちん
木の枝のガラスが見える収集日
あつという間に積もった都会の雪景色

枚方市 伊達郁夫

子に残す地図に近道伏せておく
悪人を演じて善に戻れない
見え過ぎる眼鏡に替えてからの鬱
雑魚なりに隠れることが上手くなる
忘却が汚れた画布を白くする

藤井寺市 高田美代子

大物の無手勝流に押され気味
デリケートな蕾がまだ開かない
その時の事も日記に書いてある
真犯人をじつと見ていたお月さま
一年生の背に重すぎるランドセル

藤井寺市 中島志洋

敵もなし味方もいないお人好し
春風についとかうかと千鳥足
千鳥足土産のすしで調子とり
濡れる肩相合傘で抱きよせる
もう一花咲かすつもりの若作り

藤井寺市 鴨谷瑠美子

地のままで会って友情深くなり
大根があるのでぶりを買いにゆくと
うまいこと年とりはった温い顔
ミニ薔薇の鉢に小人を立てせよう
三月の光眠りを覚まさせる

藤井寺市 若松雅枝

一合で笑いが弾む温い春
鈍感で友の気遣い後で知り
諍いを避けて見ぬ振りしてしまう
細腕で一家支えた自負がある
あれやこれみんな笑いにする夫婦

藤井寺市 太田扶美代

空けてある棚にもどつて来ぬギョーザ
ケータイもカードも持たぬ主義主張
世の流れ見ている空港のロビー
指の先まで不器用になりました
手に溶けた雪は亡母のメッセージ

藤井寺市 鈴木いさお

せっかちな花が二月にもう開く
四捨五入お願い四は捨てないで
四分音符並べたように打つ鼓動
嬉しいと犬も笑った顔になる
オペのあとそつと胃ぐすり飲む外科医

箕面市 広島巴子

菜の花が好きと微笑む友ばかり
妖精がいそうで覗くチュリッ
来年の土筆スギナに予約する
角切られ鹿寒そうに寄って来る
日向ぼこ日時計のよう移動する

守口市 井上桂作

冬は外春は内にと豆をまく
人生を達観したか歌変わる
年金が減らないように祈るのみ
子の出世孤独なれどもああ嬉し
枯れ葉おち土にかえりて木を育て

八尾市 吉村一風

四股踏んで太陽拝み札を言う
急ぐ時こそはゆつくり確かめる
言い過ぎたひと言消すの苦勞する
雑巾がけすると頭も冴えてくる
菜の花の海に蝶蝶溺れそう

八尾市 村上ミツ子

なんの因果か悪用されたぎょうざ
冷凍庫調べてみよう製造所
愛国が愛地球まで高まれば
ママの声きいて顔みて子は育つ
古稀過ぎてまだ夢をみる恋もする

神戸市 両川無限

束ねたら嘘がこんなに重くなる
待ちぼうけもちろん君に惚れている
雨の日のバスは無口なまま走る
乗り継ぎの駅で女神とすれ違ふ
手の内を見抜かれていた置き手紙

神戸市 山口光久

につこりとキャッシュカードに棲む悪魔
踏みだした一步もたつかないように
撫でられてペットも君も御満悦
耐えてたえて母はひっそり忍び泣き
ライバルの泳ぎ上手に嫉妬する

神戸市 伊勢田毅

叛旗抱きナンバーツーがシツポ振る
ウォーキング名前知らぬが会釈する
公約はこっそり裏の藪に捨て
古希過ぎて残り火消さぬ薄化粧
申告を済ませ一息美味な酒

神戸市 山田婦美子

一人欠け何か足りない夕餉どき
欠けた者同士で愛を温め合う
傍役に徹してからの我が余生
筋書になかったまさかの坂に逢う
翁の面神の面影匂わせる

神戸市 田中章子

古くて新しいチャップリンの曲
エステ本おとこ中身で勝負せず
傷口は天日にさらし自然治癒
おはこでも上手く歌えぬマイ・ウェイ
おせっかい過ぎるわたしの性である

相生市 中塚礎石

年金は妻に取られて居候
鍋つつき最後の箸にいる勇氣
熱弁がついっかかりと国訛り
見ているよ妻に勝てそう釘を打つ
人間を続ける一歩また一歩

芦屋市 黒田能子

こまねずみゆつくり回るマイペース
チャレンジへの勇氣真つ赤なシャツを着る
自分史へ素直に書けぬ一ページ
血圧計わたし長生きしそうです
買ひすぎた賞味期限にせかされる

伊丹市 山崎君子

今日立春蠟梅いつかほころびて
カレンダー梅見約束大文字で
もの忘れこんなにひどいひとり言
長電話いつまで続く外は雪
ヤボ用の続く日曜花笑う

川西市 西内朋月

土壇場で神を頼りにしてしまひ
仏壇へお供えをする宝くじ
車窓より富士を眺めている旅情
半額になつて株を抱いている
愛の言葉かけられ伸びるシクラメン

川西市 米原雪子

雪の朝家族総出で雪だるま
癒す顔いっぱい見せる赤ん坊
百薬の長だと言われ断れず
予定ない手帳見ながら辞退する
欠けてても自作の湯呑み捨てられず

三田市 北野哲男

迷うたら早目に一杯のんで寝る
喜寿の春親の齡まで十五年
じいの腕まだ孫二人ぶら下げる
凶らずもなどと嬉しいご挨拶
坊さんのスーツは何故かもう一つ

三田市 久保田千代

母が逝きこんな寂しい日を送る
線香の煙もゆるく一周忌
父と母あの世でけんかしてるかな
もう少しちゃんぼらんに生きたら
八方美人の貴男と飲んで落ちつけず

三田市 堀正和

潮騒が子守唄です砂の風呂
神妙に砂風呂にいるギャルの群れ
砂風呂に日中韓が入り乱れ
露天風呂開聞岳も指呼の中
チンだけで半月生きた湯治宿

三田市 石原 歳子

米所なのに他県の米を買う

期限など故郷産は気にならず

せかされて借りてる本は斜め読み

うっかりと歯科へ口紅塗って行き

早朝の電話に体震えだす

西宮市 西口 いわゑ

時により見て見ぬふりも情けなり

昨日も今日も蘭の蕾の開く音

大物のひと言その場ひきしめる

豆よりも鬼はチョコレートが欲しい

大夕日に迷いを捨てて抱かれる

西宮市 牧 富喜子

評論家生きる希望を失くさせる

寒に咲く花の香氣にある主張

いつになく身の引きしまる寒の水

雪が降るどこかでほっとするものも

対立の時でもないぞ日本丸

西宮市 山本 義子

目をつむることにすっかり慣れて喜寿

目の保養脳に充電しています

地球規模目を覆うこと胸傷む

羅漢さまときらり目が合いアハハハ

目札なるきれいな所作も失せにけり

西宮市 亀岡 哲子

ハンドルに粕汁さえも拒まれる

ふつと来て明るい空気置いて行く

夢の続き見たくて開く朝の窓

友情のまままで終るか缶ビール

逆転を忘れたままの砂時計

西宮市 秋元 てる

丸鬻りのおすしの礼は黄水仙

枯れてなお冬至芽守る鉢の菊

まだいけるねーと鏡に笑いかけ

歯が抜けて優しい声と妻が言う

鬼は外未だおどけ癖残す父

西宮市 片山 忠

歩いたらガソリンなんか要りません

物わかりよろしい離婚経験者

お手軽にもろてやめられない菓

ギョーザから品質管理教えられ

会話力ないと若いと言えませぬ

西宮市 菊池 トミエ

古い枯れへ元気を出せと新刊書

一年が短かすぎるは歳のせい

つまずいてつかんだ菓の暖かさ

ガス止めて果てるを知らぬ長電話

ひとつしか無い命です急ぐまい

西宮市 緒方 美津子

くれるなら電気毛布という歳に
子の舞台大きな拍手みなサクラ
身をひそめ鬼はぎようざの中にいた
ひやかしに覗いた店で買った無駄
装いを帽子に托す定年後

西宮市 井上 松煙

余生など思いもつかぬこまねずみ
能天気によく引っかかる鼠捕り
鬼遣い少なくなつて国荒ぶ
超ミニがスカート履いた犬を連れ
度忘れの脳を覗いてみたくなり

西宮市 坪井 孝一

仏にも鬼にも化ける人の謎
人生はゆらゆら揺れて霧の中
写真帖 やあと手を振る友が居る
愛というジグソーパズル埋まらない
結局は味方はひとり自分だけ

尼崎市 春城 武庫坊

掘り炬燵足を入れたら動かない
寒風がゆつくり溶けて心地よし
嬉しい日楽しい音で米を研ぐ
術後の胃妻は食事に苦勞する
そろそろに木の芽がワルツ踊り出す

尼崎市 春城 年代

夫病みとろとろに炊く春キャベツ
菜の花がぱつと広がる母の駅
千年の都の花を待っている
かごめかごめ味方と思い込んでいた
実南天に久方ぶりの雪あかり

尼崎市 山田 耕治

パパ居ないと長電話する
大あくびして涙ためてる
若作りして無料パス出す
突然ですが墓のセールス
ひとつの傘で老妻がてれ

尼崎市 長浜 美籠

言うことは言つて忘れる聞いたこと
幼さがチラリとのぞく好感度
獅子ゆずが届きひと味違う初春
すぐ切れる性格さては骨密度
お父さま似です凜々しい眉あたり

尼崎市 軸丸 勝巳

手首折りギブスの刑がまだ解けぬ
躓きを防ぐ歩きは 歩調取れ
難儀やね片手でシャツを着る歪み
上中下ならば買いたい広辞苑
後期高齢長寿に重い保険証

尼崎市 林 昭三

寒の月とても寒そう走ってる
またとない父の追伸二行半
アメリカは問題あるがリーダーだ
訪ねゆく世代替りの里の風
一寸した親切老婆のあの笑顔

姫路市 古川 奮 水

卷寿しを丸齧りして節分祭
山菜の味噌和え老母は得意顔
ふる里は山彦聞いた冬木立
誕生日ろうそく光り喜寿祝う
ウイスキーひとり夜長に慰める

奈良市 天 正 千 梢

賛美歌がうまい善人かもしれない
いい男何でみんながほっとくの
貧乏がこやしになったかも知れん
ペンネーム3つは持っているんだよ
マドロスの黒いパイプに恋をして

奈良市 米 田 恭 昌

遍路笠迷いふっ切る鈴の音
生前にもっとと悔むことばかり
屋根からの雪に目覚めた朝寝坊
洗っても焼いても食えぬ毒餃子
中国産食えぬ豆ならまくとする

生駒市 飛 永 ぶりこ

うつぶんを小出しにできるありがたさ
これからは惑わされずに進めます
すぐ貶す肋に潜む朱の妬心
本命のチョコは夫と言っておく
うきうきと蕾が春のラブソング

香芝市 大 内 朝 子

啓蟄へ恋を探しに出かけよう
まだ未練若さをさがすコンバクト
しよげてるとオイオイオイと鳴くカラス
半額の文字に踊って無駄を買う
ああ余生華を摘みつみ生きてゆく

橿原市 居 谷 真理子

理論家で本は返してくれぬ人
太い首養うものが多すぎる
穢土されど児は頭より生まれ来ぬ
俺様を抱け抱け抱けと呱呱の声
こちらこそ愛させてくれてありがとう

橿原市 安 土 理 恵

しもやけの指に暦の告げる春
狭いのが好きですあなたの横だから
覗き見もさせぬガードのかたい芯
甘いせりふその場かぎりに決ってる
葱さげて家路を急ぐときは主婦

奈良県 渡 辺 富 子

雪の朝古都一望が浄められ
カロリーゼロの会話している掘炬燵

鈍感力自慢し合って笑いこけ

修二会の火浴びて愛憎浄化する

万物が潤い木霊する古道

和歌山市 松 尾 和 香

子に渡す宝ないのも家族愛

一つ二つ足りぬ人生朱を入れる

ライバルの太鼓どんどん熱くなる

赤ワイン妻の機嫌でよく回る

加速する物価値上げに身を守る

和歌山市 古 久 保 和 子

蘭展の蘭は気高く寂しげに

感謝状あげるレンジとカップ麺

電話から移されそうな風邪の咳

他人の子は急に大きくなるらしい

ケータイの向こう只今雪景色

和歌山市 福 本 英 子

歳という鎧着けると怖くない

鬻る子も無いのに脛が瘦せてきた

貼り薬手の届かない場所が凝る

オムライスのお皿大きく見えてくる

白い恋人バレンタインにもう来ない

和歌山市 田 中 み ね

中流の暮らしであれば良しとする
見て見ぬふり孫の宿題わかんない

ポイ捨てのタバコを犬が踏まぬよう

あなたにすれば昔話で済むことも

反論をぐっと飲み込む偉いひと

和歌山市 堀 畑 靖 子

ちよい悪の爺婆春のプラン練る

私の玩具にもなる電子辞書

相方の元気を感謝しています

うまいって大和言葉と知った本

無駄遣い節約術の本を買う

和歌山市 玉 置 当 代

温暖化であろうがやはり冬は鍋

白ければチラシの裏も捨てられぬ

無愛想わたしの欠けているところ

末席の正論通ったことがない

CO2気になりながら暖をとる

和歌山市 福 井 桂 香

中庭の梅は蕾も堅いまま

あっちこっちカイロを張って生き延びる

振り返れば割に楽しいことばかり

偽から毒今年も続く怖い日日

寝返りが出来ないままに春となり

和歌山市 武本 碧

筆先がルンルン跳ねる愉快な日
かくれんぼしている右脳揺り起こす
言い訳に下世話のたとえ振りかざす
淋しくて余計な世話も焼いている
喜ぶと涙腺ゆるむ癖がある

和歌山市 喜田 准一

したたかな花が可憐さ覗かせる
返り血を浴びる覚悟で突く矛盾
反論はしなる心で受け止める
誰にでも手繰れば傷の二つ三つ
慌てると優先順位狂い出す

和歌山市 宮本 三喜夫

コウノトリ自然界にて誕生す
三越と伊勢丹統合業界一
トヨタです生産世界一となる
若い知事最年少で誕生す
訪中で関係飛躍期待する

海南市 三宅 保州

添削をしすぎて消えている私
鉢巻きをするとその気になつてくる
満腹のときは尻尾を振りません
何もかも生きているからこそのこと
お花見が毎日できる花時計

海南市 堂上 泰女

学園で水仙の香が春を呼ぶ
寒風で研いでもらっている五体
小雪舞う寒風をつく今日のリハ
寒中に黄のタンポポが春告げる
流水の接近見てる冬炬燵

松江市 三島 淞丘

叶うまで夢と情熱捨てられぬ
ともかくも俺のカラーで生きてゆく
良心の欠片を拾う寺の門
ファッションを着て老春を謳歌する
三流の政治歯止めが掛からない

松江市 松本 知恵子

自然死で凍る夜コロリ逝つたミケ
才媛が根っこ忘れて翔んでいる
雪の日はゆっくり読書腹据えて
寒さ退治言い訳にして寒ブリを
目白来る庭の赤い実減って春

松江市 川本 畔

暴言を吐いてロマンを遠ざける
水と苔いつもきれいな間柄
ひとり減りまた一人減る遊びの輪
春の服探して雪の残る町
もくもくと雲の鯨が太り出す

松江市 安食友子

出雲弁のカルタ読み手も怪訝顔
子の躑猫可愛がりした不覚
スクリーンにときめいている自由意志
親切の歩けコールも雪時雨
楽しいから何度でもいい囁いて

松江市 津川紫晃

ひげを剃る今日を男にする鏡
寒に耐え春へ力を溜めておく
冬深深妻との時間長くなる
春の芽が空を飛びたく顔を出し
子育てに母の匂いが薄すぎる

松江市 小川注湖

福袋一目散に初売り場
正座の子手にお年玉にこやかだ
銅鑼が鳴るテープが切れて子が巣立つ
箸模様ウルトラマンとどらえもん
人生に夢を持つ前から見る

松江市 銭山昌枝

わたくしも種も破れて不協和音
6Bが走らなくなる日が怖い
庇うのも鍛えるのにも程がある
動揺を隠せぬのが絞れない
第三の人生に立つ喜寿祝い

出雲市 小豆澤歌子

ささやかな望みを掴む指の先
ためらわず明日へ流れる水車
私を淋しがらせるあみだくじ
笑わずに萎んでしまう花もある
風吹くな気弱な蝶のいるあたり

出雲市 石倉芙佐子

菜の花の咲く日息子の誕生日
細展やっぱり塩瀬締めて行こ
桜散るきもの一色染めにする
奥めいた処からお招き有るらしい
三日目も妻の御機嫌まだななめ

出雲市 伊藤玲子

国技館モンゴルの花咲きほこる
淋しくて咲き乱れてる寒牡丹
食が危ない半鐘を乱打する
イエローカードを内科医からもらう
大食いの不健康さを銭にする

出雲市 富田蘭水

足湯して希望の春を待っている
まだいける歳とはやされ上機嫌
賞味期限買いもの上手育ててる
エレベータ避けて階段歩をのばす
特攻のもつ精神が退化しそう

出雲市 岸 桂子

手の甲に浮く血管にある歴史
悲しみを残さぬように顔洗う
喪の幕をくぐると重くなる言葉
難しいことには触れず爪を切る
弱者かな手の鳴る方へ向く頭

出雲市 多久和 敬子

引き算の暮しの中で夢を見る
今夫充電中で良く眠る
妥協点見つからぬまま今日終る
なんとなく手と手をつなぐフルムーン
白い粉塗つても私変わらない

出雲市 小白金 房子

車椅子一寸手をかす午後の庭
農耕へ水きらきらと春の歌
手づくりの大豆で祝う福の豆
純白のドレス寿ぐいずも富士
手袋の穴から春の陽を貰う

出雲市 佐藤 治代

感激の涙はすぐに溢れ出る
灰になるまで女ごころは捨てられぬ
競い合う良き友があり生きられる
かぶりつく焼芋はひふへほっほ
のろのろの足畳目に引っかかる

出雲市 持田 多輝子

めんどりも名指しとなれば唄い出す
家族の和囲み幸せ食べている
いずも弁海の彼方へ招かれる
何時の間に枯れたか芙蓉の花を見ず
からだ中得体の知れぬかゆみ湧く

出雲市 吉岡 きみえ

そして早二月の暦逃げてゆく
ひやかしのチョコでもうれしありがとう
うれしいな七福神の音がする
まる裸素直なわたしみてほしい
軍歌なら声を揃える戦中派

出雲市 竹治 ちかし

一つ根の上に子の幹孫の枝
身の丈の幸を望んで満たされる
甘んじて切られてやろう孫の太刀
皮算用たぬきのような顔が寄る
四捨五入させて割り切る処世術

出雲市 園山 多賀子

無為に生き唯諦めることに狎れ
人混みの中で私は探せない
さりげなく会釈を交すだけの人
口先に出たがる言葉唾を呑む
蠟梅の黄にいささかの日脚伸ぶ

出雲市 森 茂美

腹減った屋台の世話になるとする
口だけはまだまだ達者安心だ
目に見えぬ翼広げて恋がとぶ
政治家の嘘は座興じゃ済まされぬ
団塊の娘に白髪みえてきた

雲南市 毛利 幸

人生の山坂越えて春を呼ぶ
覚悟してかかれと尻を叩かれる
人生は光と影の二重奏
街角で拾った愛が実を結ぶ
忙しく暦が私追っかける

島根県 伊藤 寿美

赤ひげが白髪になった診療所
独居五年言えぬ本音が胃に溜まる
春になったら纏ってみたい風がある
年金の池に金魚を飼いならす
ちちははの匂いが残る茅の屋根

鳥取市 中宇地 秀 四

何かある度にお神酒で身を清め
千鳥足オヤオヤ妻が二人いる
泥酔の淑女は魔女の味がする
先ず一献それがバブルの元になる
もう一杯薬と毒の曲り角

鳥取市 中村 金祥

未納金集めに行けば豪華邸
道すがら油の値段見てしまう
延々とまさかが続く偽装ネタ
使わないコンビニだけどつぶれるな
小春日へもつたいないが昼寝する

鳥取市 春木 圭一郎

現実を直視することまず決める
原因は自分にあると言いつ聞かず
目の前のカーテンまずは開けてみる
できることできないことを分けてみる
不安ならそれが何かを確かめる

鳥取市 福島 庸二

他人ごとと思つて進む温暖化
太陽に負けない心燃えている
冷え込んだいまだからこそ種を蒔く
待つてたよ梅一輪の春の風
最後の手ジャンケンポンで道開く

鳥取市 田村 邦昭

除夜の鐘ねずみがいい年連れてくる
当選で昨日の頭高くなり
ロボットに職を奪われ職さがし
やっぱりか神は努力を見逃がさず
近すぎてわがままばかり言うくせに

鳥取市 山宮愛恵

重い雪昨日も今日も降る無言
ひよどりが蜜吸うている寒椿
沈黙が五日続いて人恋し
笑わなきや貧乏神が絡みつく
微笑んでいようお米も味噌もある

鳥取市 吉田弘子

七人の敵とつき合う老いて未だ
手を合わす涙出る時出ない時
人生を差し引きゼロにして逝こう
月あかりほどの幸せよしとする
私の驕りだろうか腹も立つ

鳥取市 平尾菜美

金策へ泣く泣く出向く寒い中
普段着の客なごやかな畑道
曖昧な流儀いつしか姑の道
勝ち組を指す火中の栗拾い
吊り橋へ祈る形の屋台骨

鳥取市 有沢せつ子

寒中に素足で歩く孫ふたり
バスの席後ろのくしゃみ飛んでくる
大風呂の中ほどにいて落ちつかず
自信ない事は小声になつてくる
半額の服がわたしを逃がさない

鳥取市 池原天馬

あと五年覚悟できたか仏問う
日本たたき油農薬それでよい
Uターン者村人の喜捨受けて生き
畑への道登るだけでも息切れす
帰るまで心配してる妻も年

鳥取市 土橋睦子

甘い曲ばかり流そうバースデー
ありがとう内緒と知らず礼を言う
着飾って気持もゆるむバス旅行
叱つても笑つていてもへの字眉
世の中が進んで毒の数もふえ

鳥取市 倉益一瑤

採め事のないよう金は使い切り
馬鹿騒ぎしたあとに吹く寒い風
見栄切った男の傘が開かない
ハードルを高くしたまま跳べずいる
渾身の演技黄色い声で呼ぶ

鳥取市 岩崎みさ江

胸奥の活断層が軋みだす
痛恨へ忘れ上手に裁ち鉢
生れきた曾孫へ思う持ち時間
健康法すこし高めに釘を打つ
野仏のおつむに春よ早くこい

鳥取市 福西茶子

ライバルのウフフにこころ乱される
スーパ―へ行くのは五時を過ぎてから
借金を笑顔で申し込みにくる
貸した金戻れば儲けだと思ふ
生きるとは難儀死ぬのもままならず

鳥取市 太田幸枝

ポトポトと浄土へ向かう一歩ずつ
湯豆腐の湯気にほんのり包まれる
お隣の夫婦が呆けて芝居する
境界線越えて我が家にささ竹が
かき餅に古里の味詰めてある

鳥取市 宮脇道子

母よりも歳を重ねて見る砂丘
ススキでも枯れると背筋伸ばして
超甘いテレビの料理舌お留守
海鳴りは心急かせて春を待ち
ガラス窓小鳥覗きに來てくれる

鳥取市 加藤茶人

趣味仕事会社にいなければ不安
あの羽振りいつまで続く三代目
その昔賞味期限は嗅いで決め
長生きをしすぎてボケて行く恐さ
目が覚めて今日も生きてたガード下

鳥取市 福永ひかり

健診に測り始めた腹まわり
人に良いものがほんとの食の意味
温暖化防ぐマイ箸マイバッグ
地の絆プライバシーが切つて行く
健康へ梅干し納豆ヨーグルト

鳥取市 夏目一粹

無灯火の自転車咳をして通る
右を見て左を向いて猫渡る
からだよりこころ休ませたいお酒
ひたすらに働き通し歩が悪い
ニコニコの認知症なら愛される

鳥取市 奥村彩子

夜のしじま雪どけ唄うトタン屋根
立春に北帰の鳥のさんざめき
豆腐の湯気恋しい人の影ゆらす
たて糸横糸人生まだら織り
語るように歌つて欲しい千の風

鳥取市 植田一京

好きなどときまか私のことですか
願望も入れて自分史書き上げる
いちがいな男の背なが寂しそう
よく遊びよく食べ今日も元気です
迷つてゐる時はサイコロ振つて決め

鳥取市 武田 帆雀

政治犯よりも重たい賽銭ドロ
当選に抱き合う芸のうまい人
知らなんだテレビで識った餃子の字
スタイルは父似がめついとこは母
雪搔きを最優先にして多忙

鳥取市 岸 本孝子

恥をかく度にかしこくなってきた
母さんが叱る理由を孫に説く
泣き笑い同居がくれた宝物
神も仏もあると信じて生きている
春を待つところわくわく旅プラン

鳥取市 西川 和子

涙腺が緩むやさしい介護の手
その夢に辿り着くまで葉飲む
湯豆腐を囲んで終の話など
平凡に生きて賞罰にも無い
恙無く終った今日に感謝する

鳥取市 録 沢 風花

新成人の肩に重たい未来像
訪う人もなく吹雪く音聞いている
一日の半分は寝て猫元氣
路線バス採算とれぬのに走る
マイカーに頼って増える体脂肪

鳥取市 福田 登美

まだ青春いつか逢いたい人ばかり
火傷せぬ距離で心の隅に抱く
言い過ぎず絆をそっと温める
それとなく氣遣う友に癒される
淋しさは身を飾っても変らない

鳥取市 土橋 はるお

障子の穴にポチ袋貼っている
ちっぽけな村の活性策を練る
無農薬野菜山盛り鍋囲む
爺さまは富山の薬しか飲まぬ
アイスバーン車がフラを踊りだす

倉吉市 牧野 芳光

日本語で喋りたがらぬ知識人
女房が有無を言わせぬ海苔茶漬け
ケイタイでどこにでもなる社長室
明日があるように小銭を貯めている
働き蜂の音に聞こえてくる單車

倉吉市 野口 節子

献立に困ると即席ちらしずし
折角のバリアフリーで転ばれる
後輩に抜かれる心地よい疲れ
縄のれん心の刺を抜いてくれ
聖人も弱みの一つ二つある

倉吉市 山中康子

お茶菓子が足らぬ仲間どっと寄り
たずねれば和尚の孫という血すじ
投げられぬ予定にまたも身をこがす
玉手箱いつあけようか恋ごころ
卓袱台にご飯味噌汁お漬けもの

倉吉市 猪川由美子

恋多数冷凍室で息潜め
日溜まりへ偽装のわたし溶けてくる
大相撲ヒールが戻り盛り上がる
就任し日ごと品格できてくる
カネも字も使わずいると勘鈍り

倉吉市 松本よしえ

還暦の子から米寿の祝い酒
バスだけが移動の手段医者に行く
病院の町までバスで一時間
蝸牛何があってもマイペース
東京でのろのろ歩き睨まれる

倉吉市 山本玲子

胃カメラを団子鼻から突つ込まれ
暖冬で熊もおちおち寝ておれぬ
優しい人笑顔できついことを言う
黒すりゴマ肌はつるつる賓頭盧像
駅弁にほかほか添えた国訛り

倉吉市 最上和枝

大仏の鼻の穴まで掃除する
岩の風呂巨大な石がのしかかる
ホカホカの湯タンポ水虫目を覚ます
外国のゴミが岸边に流れ着く
鮭帰る川の流れに逆らつて

米子市 白根ふみ

流し目で乳房を含み初笑い
こだわらずまた一年をマイペース
この星をクリーンにしたいかぐやさま
威張つても家来はたった一人です
翔ぶ仕草さえも出来なくなつてきた

米子市 野坂なみ

白い冬絵具温めて解かしたい
貸切りで騒いだ後の空しさよ
負け犬が楯にしている黙秘権
爪立ちで歩く稽古をくり返す
川柳の卒業証書 終駅に

米子市 青戸田鶴

春風に明るい服を出してくる
カレンダーにしっかりと書いてある予定
気弱な孫たくましい孫いて楽し
千の風口ずさみつつ墓参り
赤い靴買ったが未だはいてない

米子市 光井玲子

鳥取県 松川行男

振りむかず前へ前へとすすみます

沈黙の時間がながい古い二人

散る日まで卒業出来ぬ主婦業だ

何があつても騒がない老父である

肉よりも魚を好む我が家です

米子市 門脇晶子

飛行機ゆれて胸騒ぎする恐ろしさ

噂の人が来て一瞬沈黙す

卒業のない川柳は永久の友

さもの教室卒業しても役立てず

春まだ遠し足の痛みもとれかねる

米子市 政岡日枝子

生涯学習カラオケ店に行く

何処産の蟹だ寄せ鍋さわがしい

楽しくてこの世卒業先送り

明るさも入れて速達便で出す

手を組めば転ぶことない夫婦独楽

鳥取県 盛田夢路

ピンク履きハートは春を待っている

寒梅に元氣もらつて春の詩

悪いのはわたし炬燵のせいじゃない

言い勝つたはずにピシヤリと跳ね返る

満腹にさせてやりたい飢餓の子よ

ズタズタに斬れない舞台音で斬る

斬られても来週出ます脇役で

賀状の余りクイズに応募願かけて

形見分け男の僕に女もの

逆らわず嫁の言いなり見えています

鳥取県 佐伯やえ

来かけた春またも峠で腰おろす

匂い水仙亡き人の声つれてくる

花の季や あといく度の花の季や

春一番ちよつと詩人してくれる

つまずいた石のおかげで今がある

鳥取県 竹信照彦

冬来たりなば立春という構図

旧正月らしく雪降る紀元節

根拠ない建国記念日Xマーク

生ゴミのコンボ満員施肥とする

集めたが剪定くずはまだ燃えぬ

鳥取県 深田俱久

KYは空気じゃないさ景気だよ

歩きましょ孫がよこした万歩計

買い物を待つ間女は煙草に火

指おつて一日一句趣味に生き

朝刊二紙悲痛な記事が多すぎる

鳥取県 細田裕花

仲直り空気が甘く流れだす
ゴミの山いいえ宝の山と言う
酸欠に悩む脳みそかき混ぜる
金という泥流がある選挙戦
抜け道でほっと一息ついている

鳥取県 石谷美恵子

句読点要らぬ夢中の恋のペン
埒も無いもしもの話聞くこたつ
友達は菓子より豆腐竹輪選る
義理と見栄もし捨てれたら金溜まる
ストレスをぶつけるひとが傍にいる

鳥取県 下田茂登子

傘寿来てまだまだ鱗光らせる
古希の駅乗り変え切符持つて発つ
炬燵の中恐いニュースに凍え出す
どんぐりが学のあるとこみせたがり
品格が何処にも見えぬ政治家よ

倉敷市 撰 喜子

すごいなあダイヤについたゼロの数
ねずみの穴へわがもの顔に油虫
出しゃばらず心を飾る妻が好き
食卓に一番のりの部活の子
紙と鉛筆あれば楽しい日を過す

美作市 小林妻子

雪積んで頬被りした信号機
もったいをつけて電話も長くなる
異常気象と言う言訳は聞きあきた
父越えて既に人生まる儲け
お年玉のお年賀ほどの老いの夢

美作市 山本玉恵

うれしい約束とうとう眠れないままで
合掌で消える憎さもかなしみも
つまらない夜だことりと音もない
未知数の中に悲をため哀もため
命はたしか素晴らしい朝が来た

美作市 福原悦子

結論に今しばらくの時間待ち
気苦労はみせず笑顔で介護する
陽が沈む時間が欲しい畑仕事
自画像の裏には泣いた跡がある
筋一本通して甘い母だった

美作市 大石あすなる

裏技を使う左手右も添え
洗濯もの吊すわたしのテリトリー
回遊魚もわたしもとても旅が好き
難解な箇所にはさんでおく栞
手鏡の奥へ女の炎を伏せる

真庭市 国 米 きくゑ

新聞のチギリ絵手紙老母を訪う
節分に立春まだまだ春遠い
藁苞の中で微笑む赤い薔薇
太陽が微笑みくれる今日佳き日
嬰兒の微笑天使なるほどと

真庭市 福 嶋 智恵子

髪を染め歳忘れてる初参り
はみ出てるねずみの年賀孫五歳
子供より本気で遊ぶお婆ちゃん
喜寿迎え虹を抱く夢手放さず
採決に国会無視の党首抜け

東広島市 福 島 万年

合掌をすれば自と南無阿弥陀
ウォーキング元気な歩幅七十五
繕えど妻の勤には敵わない
餃子ぐらい作ってごらんお母さん
法案が通る涙か万歳か

竹原市 石 原 淑 子

背負うた荷ふうつと軽くなって春
母さんの影か私の前をゆく
春光り裸木うごめく枝の先
雨後雨肚を括って四つに組む
三枚におろす魚に詫びて生き

竹原市 時 広 一 路

独り住まいの笑いはテレビから貰う
税金に囲まれながら生きてゆく
駄々こねる膝を宥める下り坂
一杯のコーヒーで良し昼下り
ゆっくりと歩こ白髪に合うように

美祿市 安平次 弘 道

倍返しにすれば神話の鈴が鳴る
結び目が堅くて話続かない
臆病な女ひよっこり鬼に会い
真実を語れば夢が近くなる
酸欠の街にも時は流れてた

東かがわ市 清 川 玲 子

きっぱりとノーとは言えぬ飲む話
商魂に負けた健康器具の無駄
持て余す余暇には庭の草を抜き
余暇ばかりあつてこれからどう生きる
居るだけで楽しい人に輪が出来る

東かがわ市 川 崎 ひかり

履歴書に人間性は記されぬ
印つけた諭吉いまだに戻らない
いつの日か会えるよ地球丸いから
優しさとジェラシー愛の裏表
ありがとう言えば餅もありがとう

東かがわ市 伊勢 八重子

梅粥に癒しをもらう寒の朝

華やいでしばし同居のおひな様

お日様の機嫌見乍ら布団干す

プチケーキ買って独りの誕生日

模索する便乗値上げに勝つ手段

東かがわ市 神保坊 太郎

成るようになったと思う鬼瓦

偽装してないのも胡散くさく見え

合併で熊も都会の人になる

情報が多くて脳が満杯だ

わが庭が広くなつたと猪が増え

東かがわ市 原 賢

さりげなく過去を労う妻の酌

一通の手紙が春を連れてくる

したたかに生きて苦勞も良しとする

追伸の中にワサビも効かしとく

ぼろぼろの人生老いてつぎをあて

松山市 宮尾 みのり

肺癆突くひと言からの不眠症

毒入りがあるかもしれぬ冷凍庫

いいところは甘え上手に攫われる

夫より息子を頼る歳になり
リタイアをして春眠の心地よさ

松山市 高橋 宏臣

だんまりの口へは猫をけしかける

本場に強い男の垢まみれ

七草を買う七草の丘は夢

十指みな開いて許すこととする

猫を抱くころ半分抱かれてる

松山市 古手川 光

季に合った暑さ寒さの有難さ

自給率のツケとも思う毒ギョーザ

便乗はないか値上げの数珠つなぎ

歩歩歩歩歩 歩歩歩で遍路満たされる

血圧が上がる税金無駄遣い

大洲市 中居 善信

気楽とはサンマ一匹焼いている

タレントが勝った負けたと選挙戦

弁当箱の角をつつくは面白い

貧富の差村は白骨林のごと

こそこそと尻尾隠して逢いにゆく

西予市 黒田 茂代

一流の書に魂の思惟がある

白状を迫られている酔芙蓉

前向きの花だ活気に満ちている

どんな顔するだろ事実話したら
踏まれても咲く野の花へ拍手する

高知市 小川 てるみ

冷凍の手抜きパンチの毒ギョウザ

安全安心言えば飢えてく日本国

良心市の良心を買いに行く

七癖の中に遺伝もあるらしい

耐震の築百年が思案する

高知県 小澤 幸泉

老夫婦遠慮している同居の夜

人生を彫る父親の哀しい手

紙くずになった昔のラブレター

飲み薬だんだん量が多くなる

散らかした食器がわらう共稼ぎ

唐津市 市丸 晴翠

北風に逆らい登る傘寿坂

年金丸値上げの波に吞まれそう

万華鏡私の過去の染みも見え

自家菜園三ツ星の味食卓へ

寸劇を繰り返し返しつつ古い深む

唐津市 井上 勝視

年中休み生きてる意義を探さねば

五右エ門はよくぞ現世を喝破した

唯我独尊我が道をゆく鉢いじり

古い事よく思い出す要注意

風化していなくなった罪夢に出る

唐津市 樋口 輝夫

爺様がここに居るぞと咳ひとつ

知らぬふり通して生きる人もいる

呑ん兵衛がまだネクタイを緩めよる

ぶつぶつと蛭が愚痴を言うている

鬼の首取る気で探す誤字脱字

唐津市 坂本 蜂朗

山や川地酒にも酔う村祭り

何も言うなと古里の山や川

故郷の小包父の結び癖

ひとつ根屋根がからみ合う母と妻

白寿への道とも知らぬ母を負う

唐津市 山口 高明

閔兵の首相は一寸格好よい

迎え撃つ軍備おさおさ怠たらず

引きずった過去におびえる巡り逢い

イケメンのホスト侍らす熟女どの

修羅いくつ越えておとこの貌に成る

熊本県 永田 俊子

出るとこへ出たら私も腹くくる

子の問いに話を外らす不整脈

水着は大嫌い不美人でよかつたよ

嫌な思い出忘れた日卵とじ

日々好日と言いたいけれどサロンパス

熊本県 岩切 康子

リハ服へ少し撒いてくオーデコロン

万歩計に抑制される食の量

快い従業員の声の色

道迷い二万歩になり苦笑い

毎月はない命日でする墓参

熊本県 高野 宵草

寒がりに立春という希望の灯

居眠りで読む新聞と日向ほこ

父と子の固い絆にピンタ飛ぶ

露天風呂頑固な父の渋い喉

自分史の回顧は悔いが占めていた

シドニー 坂上 のり子

鯨獲る日本文化は血祭りだ

価値観を言えば宗教戦然り

餃子位で命脅かされている

手作りの餃子我が家の温い味

他人のこと批判する目が見ぬ自分

川柳塔のぞみ 4月句会

日時 4月22日(火) 13時

場所 銀座区民館(地下鉄東銀座③出口)

宿題 「まぶしい」「暫く」「ギブ・アンド・

テーク」各2句「自由吟」1句

欠席投句 4月19日必着 播本 充子 宛

〒193 0832 八王子市散田町2-31-3

温故知新

大阪市 中島生々庵

長生きもしたいし金も貯めたいし

妻と来た湯の宿の日の長さ

豊中市 戸田 古方

ひっかかるものかと詭弁へ黙秘権

宮仕えを正当づけている詭弁

池田市 黒川 紫香

退職金もろてほんとに老いはれる

母親が見合いますよな化粧する

大阪市 菊沢小松園

覚悟した晩のおやすみだったのか(三女十六才急逝)

みおつくしの鐘も空しく響くのみ

出雲市 尼 緑之助

寒稽古腹のた、ない気合聞く

明日あるを信じふとんにいる母子

「川柳雑誌」麻生路郎主宰

三四七号(昭和三十一年四月号)から

川柳塔の

川柳讃歌

(40)

木津川 計

進化して靴の型になつた足

高島 啓子

新しい靴を履くと靴ずれができます。やがて靴に慣れて……。それをしも進化と言つたら、日本の近代史はまさに進化の過程でした。

江戸時代まで父祖たちは草履か下駄を履きました。ですから踵が後ろへとび出す形になつて明治政府が弱りました。中靴を兵隊が履くと踵と足首の間に隙間ができたのです。だから紐で締めつける編み上げ靴を履かせました。それでも空気が残りますからドタドタと音がしました。即ち、ドタ靴の起りです。

古日記わたしより先灰にする

土橋 房枝

「古い日記のページには、涙のあとともそのままに。高峰三枝子の「懐しのブルース」が胸に沁みましたですね。

房枝さんの古い日記には、没後知られて恥ずかしい速い昔の恋の思い出が一杯書かれて

いるのです。いいではありませんか、読まれても。おかんもやるなあ、叔母さんもモテたんやねえ、子や姪を羨ましがらせたらしいのです。「そんなんやつたら残すけど」、ええーっ？何が書かれてるのですか。

汽車の旅手を握り合う窓が欲し

秋元 てる

現代人が時代遅れかを区別する方法があります。恋人同士を「カップル」と呼ぶか「アベック」と言うかです。てるさんはアベック派、というのも客車を引つ張る「汽車」は、ほぼ絶滅していますから。

昔の汽車も、懐しのブルースです。「オーイ、駅弁ーんっ！」と手と首を伸ばし、走りながら釣りを渡し、「スズにシンパンにマツター」の東北の旅がまたブルースでした。

一応は声を掛けるが来んといて

北野 哲男

Aが来るとなるとBが来ない。が、Bには来てほしい。そんな場合があります。声は掛けられたが義理が義務が真実か、それを見極める術に長けるのが人生行路、といわねばならんのがつらいですね。

嘘とまことの男女の駆け引きがまた見極めを要しました。「よさこい、晩に来いと言わんすけれど、来てみりゃ真実来いじゃない」

(「よさこい節」)。バックじゃなかるうか、そんな憂き目を見ながら、人はしだいに切ない賢さを身につけるのです。

身の程を知らず地獄へ落ちました

安立次 弘道

「身の程」を広辞苑は「自分の身分・地位・能力などの程度。分際」と説明します。「身の程を知れ」「下郎の分際で」などを見下げられたりは、NHKドラマ「篤姫」で若き下級武士の大久保利通らが味わう日常でした。明治維新は下級武士らの革命でした。

身分差別だけでなく、能力以上にかかわつたばかりに地獄の責め苦を蒙る場合もあるのです。不得手な分野や未知の領域へ、自信あり気に足を突っこむと苦しいことの極みです。

幸せな奴だ鎖が外れてる

高橋 宏臣

「男はつらいよ」の寅さんが四十八作で十五億人もの集客をなせ見たのかの訳は、彼が勝手気儘に生きる自由人に他ならなかったからです。高度管理社会の桎梏、即ち鎖から自由、貧しくはあるが、フーテンの寅は風の吹くままに生きていたのです。

企業社会だけでなく、見えない鎖につながれて私たちは生きています。そんな中に、運よく外れてる奴がいて、羨ましいなあ。

(「上方芸能」誌代表)

自選集

新家 完司

津守 柳伸

年賀状廃止御無礼仕る

昨年を捨てるポケット裏返す

冬の夜の風は遙かな彼岸から

酔っているときは聴こえぬ風の音

雨が雪に曇が雨にそして春

玉置 重人

遠山 可住

酒煙草あかん男で御しくくい

温暖化憂慮暖冬は歓迎

よろよろと頼りあつてるマグカップ

なにくその体についてこぬ体

魅せられた足が止まった美術館

恒松 町紅

都倉 求芽

声だけは達者ですねと電話口

足跡をまだ追いかけている未練

老いた脳まだ相談を聞いている

酒一合痛みも愚痴も忘れてる

新聞をまだ切り抜いて老いの欲

紅梅をやさしく包む牡丹雪

音もなく積りどさりと脅す雪

毎日がいくさ喜怒哀楽を友にして

瘦せ我慢薄着自慢へ喜寿の声

旅ごころ桜桜のページ繰る

平成の風邪カタカナでやつて来る

産めよ殖やせがいま年金の食い盛り

父ちゃんの内緒みつけた洗濯機

鉛筆はいいなあ昨日が消せるから

世界遺産の旅見ています外は雪

立春の雪を曆に見せてやる

ことさらに入れた余白を狙われる

仕方なく葉も毒ものन्दている

すぐ解けたクイズにお茶が間に合わぬ

お裾分け仏さまにもバレンチヨコ

土橋 螢

鶯の初音は 陸月 鳴雪忌
東京に雪鳥取は日本晴れ
善し悪しに感性があり比べられ
法名をもらって釈迦の弟子になる
人形の腹から百円玉が出る

西出 楓 楽

精神年齢だけはだんだん若くなる
み仏も人の子ちゃんと臍がある
春はそこ舌も尻尾も磨かねば
米朝を聴いてこころの髪伸ばす
いい明日が欲しくて枕買い替える

仁部 四郎

文脈を問わず政治を憎んだ日
文脈をたどると恋文にならぬ
文脈をたどると父の嘘に着く
文脈の乱れ手書きが気づかせる
少年の朗読文脈を糺す

波多野 五楽庵

カクテルのグラスによどむ春の憂さ
おもはゆい言葉のをせて来た葉書
うつの日の絵の具が雨に濡れている
屋台酒旅愁の霧にとりつかれ
目的があつて白から抜け出せぬ

林 瑞 枝

野に山に背筋伸ばして夢飛行
国籍を問わず写した子の笑顔
誰誉めて光りを増したははの星
棧橋の影はわたしの余白かも
人生の波乗り越えた湯治宿

早川 清 生

明日が見える新聞明後日が見えぬ
生の鬼面かくすに鬼の面かぶる
直線で空裁つ権利もつ地主
掠奪と血が迸る革命史
癌全身専務の頃の服着せる

前 たもつ

日本人自認しながら朝はパン
ありがとうの気持を妻にチヨコレート
今更に薪もたけずに冬しのご
先輩の訃報に雪の降り止まず
老々介護北海道へ友送る

宮口 笛 生

正月も入院今年は悪い年
年末年始酒のむ行事入院し
一週間の外泊正月うまい酒
年賀状今年も五〇〇書けぬ俵
捨てられぬ俺年金がたんある

宮西弥生

相槌がとでも上手な恐い舌
別々の趣味で迷いのない夫婦
さよならの言葉の代りに春が来た
せつかに生きて蓄を見忘れる
福寿草潤いわかつ寒の底

森下愛論

どつかりと座りくまなく読む新聞
朝起きて行く当ても無い靴磨く
平凡な夢を追つてる歩いてる
過ぎし日を背負うて明日へ背を伸ばし
マフラーへ考え入れて老いの悦

八木千代

おほろげに椿通りを彷徨す
昨日より高いところに花が咲く
つばみにも話しておこう死に支度
橋守へ手形がわりの椿の実
椿通りはあの世のメインストリート

八十田洞庵

真実を追うペン弱者への味方
因習へ脱皮の口火切った嫁
せつかくの僕の夢みな獲が食う
バス来ない古寺にあるわびとさび
勝者の目美酒に酔うてる隙がある

両川洋々

年金で生きるマニユアル作つてよ
出不精へ誘い上手の風が吹く
ピリオドに生前葬をして逝くか
付かず離れず過去引きずって来た影よ
四面楚歌だから風とも手をつなぐ

阿萬萬的

ごまかすに玉虫色とほいい言葉
割り込んだ駄洒落で話かき回す
やみくもに走れば自分の影がない
残り火を大事に卒寿の夢つなぐ
五分と五分だけど妻には負けておく

板尾岳人

み吉野の桜吹雪にある懺悔
阿倍野発桜観に行く穴子寿司
母と観た時の桜にある余生
満開の弘川寺に棲む西行
やがて散るサクラ惜しんでいる敬具

奥田みつ子

いつからか濃い鉛筆が手になじむ
胸底の鬼を撫でたり叱つたり
思い出があちこちにあり街暮れる
飯の世の飯の姿のノイローゼ
飯の世の飯の姿にある喜劇

河井庸佑

車間距離取って無難なお付き合
肝心な所転んだのを悔やむ
甘い話こんな所にあつた刺
反省が活かされぬまま轍を踏む
約束が守れず友に出来た借り

木村あきら

エラー続出笑いも誘う草野球
転んでも自分で起きるダルマさん
榎山の道にも咲いた山桜
菜の花と共に練り出す遍路笠
借家住いの味は知らないカタツムリ

小島蘭幸

初孫が真ん中にいる和の時間
退職後もう一年のやすらぎよ
エコバッグやさしい人が前にいる
むかし昔自転車の父先頭に
院展のあとの子供の絵もいいね

小西雄々

湯けむりと地酒わすれぬ旅靴
筋肉がメタボと別にゆるむ午後
雨やんだ砂丘らくだが待っている
吹き荒れる砂丘は卯月待ち遠い
嬉しさにトーンを上げて満ちた午後

斉藤 焔

百点のテストスキップして帰る
脈拍がるんるん弾み来るメール
父の樹を抱きたくなつた虎落笛
凧揚げの音が気になる受講中
冬の薔薇ぼつんと冷える深夜の計

塩満敏

杖なしで歩く稽古をしています
きっぱりと断る勇氣ありますか
古里で芋焼酎を呑みました
モンゴルに負けるな日本の大相撲
久しぶり桜島さんこんにちわ

水煙抄

(つづき)

西脇市 七反田 順子

晴れ女思わぬ雨に遭うてくる
着飾っていくあてもないお正月
振袖の二十歳がタバコプカプカと
モナリザのモデル解ってホツとする

水滸抄

西出楓楽選

海南市 小谷 小雪

時々はまとめて日記付けている
以下余白言いたいことを裏に書く
独りごとはつきり言うとお楽になる
座りたい椅子をめざして汗みどろ
りハビリの母を労う桜もち
三日目は絶好調になるおでん

宇部市 高山 清子

頭の中もつれたままの糸がある
ズバリ言われ返す言葉が出てこない
聞き上手忘れ上手でお付き合い
決断を迫られそうで席を立ち
頷いてくれるが味方にはならぬ
ひらひらとラストダンスを舞う落葉

八尾市 笹倉 ひろし

カレンター孫の来る日は花の丸
日捲りとスローライフを談義する
熱燗で心通わす古希の友

八十路坂三途の川が近くなる
四捨五入決まつて僕は四どまり
青春の闇が社会を地に墜とす

大阪市 安藤 なつこ

朽ちはてたかがしを照らす冬の月
立つてなさい、むかし先生偉かった
有名だけで選挙に出る時代
要領は悪いが人生悪くない
メタボとか言われ生活立てなおし
働いて楽ならざれど苦にもせず

米子市 猪森 スミエ

鈍行で八十いくつ駅を過ぎ
温泉のほかほか抱いて早寝する
十二支の一番名乗る知恵袋
鬼太郎の下駄が響くよ港町
父と子が睨み合つてる将棋盤
あれこれと私のプラン砂の山

札幌市 小沢 淳

京濱けに北の昆布の隠し味
さず口をなめ合っている群れ社会
口だけが老人力に遅れだし

背を丸めついて来るのは影法師
札東で頬殴られたそんな夢

無理からぬ事だと父は金を出し

米子市 吉田 陽子

一言を言わなくて悔い言って悔い

点滅の還暦過ぎた恋の灯よ
満開の梅を小鳥と見る一人

青空が広がり歩幅長くする
すぐそこの春を迎える身繕い

パーマ屋へ世間話も兼ねて行く

和歌山県 森下 よりこ

新ストープ民話の里に雪が降る
惚けテストこっそり独りやってみる

しあわせを妬むウイルス紛れ込む
たつぶりの袖湯芯までリラックス

アツアツのたこやきみなを和ませる
紅足して足して伸ばしてゆく寿命

佐渡市 高野 不二

欺されて振込むほどの金はない
記事よりもチラシの方が面白い

ペットボトルで呑むから水がうまくなる

困った風を使つてエコライフ

半分はあやまる役の長になり
チョコレートがほしいお世辞を言うている

立春に遠出をせがむスニーカー
春の雪緩んだ気合入れ直す

風邪引いてないかと孫へ寒卵
花粉症知らぬ自慢の丸い鼻

左手を添える握手が熱くなる
腕時計外して主婦の手に戻り

満点の人で退屈してしまう
お揃いの靴もハニカム万歩計

戦争も地震も刻む家に住み
近すぎる人が重荷になつてくる

しあわせのランプをさがす長い旅
じゃんけんに負けても美人得をする

早春の息吹きに老いの血が騒ぐ
明日から二月一番厳寒期

亡母上よ七十八になりました
春よ来い早く来い来い待つてるぞ

僕一人旧正月に賀状書く
バレンタインのチョコくらいには乗せられぬ

紀の川市 吉村 幸

鳥取市 山岡 紀子

鳥取市 近藤 秋星

京都市 清水英旺

年賀くれた人の訃報にただ無常
ひそやかに棺の人に呼びかける
茶毘の烟一直線に天国へ
横たわる骨の白さは神神し
白い骨になった命を拾い上げ

京都市 藤井文代

生き方を緩めて解る人の情
甘い言葉欲があるからまたなびく
老病棟医学の進歩喜べぬ
餓鬼大将今は我家のぬれ落ち葉
視力落ち見えぬもの見る眼をもらう

大阪市 江島谷勝弘

喋りベタ主語がないぞと叱られる
ケイタイが便利と思う待ち合わせ
役目終えホッとしたけど寂しさも
もうあかんあかんと言うて生きている
何事もじたばたとする歳でない

大阪市 太田としお

朝の陽に向かって嘘はつきにくい
わびさびを生んだ日本に錆がくる
七人の子持ちの方に賭けてみる
山あって谷谷谷の株世界
銀世界まさか偽装じゃないだろう

大阪市 尾崎黄紅

明治生れという笑顔見せてくれ
倅せにしてやる時効いつまでか
お互いに酒の肴にされた仲
人様を信じなさいと亡母の口癖
七人の敵居た頃に戻りたい

大阪市 坂裕之

足湯して大根買った道の駅
腰痛と付き合い長くなりそうだ
妻からのご苦労さまにある格差
鳶から鷹が生まれる筈がない
みんな出て痛みと二人お留守番

大阪市 澤田定子

一歩出て鍵と財布をたしかめる
初春に抱負なく無事祈るのみ
自由席バッグを置いて予約する
匂づくりに息子の辞書が目の目みる
訃報欄先に齢が目止まる

大阪市 田中滋郎

ふところにあなたを許す免罪符
老の字がときどき消える僕の辞書
冬空をゆくオリオンと犬二匹
枯れ枝は蓄ほのかに色づいて
夜せまり一番星が見つからず

大阪市 寺井弘子

筋肉も癒してくれる日向ぼこ
メールより楽しい会話待っている
眠れない雨の音聞く夜の底
来て来てと招く言葉を信じたい
この国の辞書に嫉の字がうすれ

大阪市 萩原大朔

叱る親切れる子どもに縁がない
温顔に芯の強さを見損なう
画面見て患者を見ないお医者さま
バブル果て後に残るはローンのみ
古稀越えて置いた眼鏡を探す日々

大阪市 原田すみ子

見回して時に味方を確かめる
年金で微妙に変化夫の座
ライバルと思っていたのはわたしだけ
跳び回る友を横目に米を研ぐ
好きにして許されたのか投げたのか

大阪市 平井露芳

大阪のおっちゃんからも鉛貰い
宝船乗った気分分で呑む金酒
メリットはごろ寝の出来る量です
偽よりも恐いギョウザに毒の文字
ブラウン管拭いて待ちますあと三年

大阪市 山本加お里

母の影踏み踏み歩く月夜道
順番を待っているように花開く
後ろから掏摸覗いてる人だから
達筆な友のフアックスあったかい
とれるだけ税金とって無駄遣い

大阪市 吉田富美

いい色ね花をほめれば葉もゆれる
母の恩姑にかえして悔いはない
またの日は言わぬ集いに手の温み
傘寿の手余るほど夢掴んでる
禿山を向かい合わせに山笑う

池田市 上嶋幸雀

立春も暦の上という偽装
父よりも多くなつたな豆の数
食べ切れぬ豆は孫にも分けてやり
一年の計揺らぎ始めて二月尽
日脚のび妻もリズムを取り戻す

泉佐野市 稲葉洋

短日を余さず受けて新芽吹く
天も地も来たぞ来たぞと謳う春
婆ちゃんのお作法見たり座り胼胝
背を伸ばそ鬼にあちらへ拉致される
子守り唄聞きつつ眠りたい今も

茨木市 島田誠一

立場変え見れば許せたことがある
孫を見る目でペットを見てしまう
ネクタイの色に野心を見透かされ
白を切る餃子も国も毒まみれ
幕引きは雁首下げて揃い踏み

門真市 矢阪英雄

まごころが消えて世の中闇となる
まごころは形にならずあたたかい
腰痛をいたわるふわり春の雪
雪見酒独りでもよい風が友
老いらくの夫婦に届くチョココひとつ

河内長野市 内海綾乃

赤ら顔化粧が出来ず安あがり
深夜の帰宅明かり見るとほっとする
偽の文字来年こそはいい文字を
灯油高いが風邪引くよりは安くつく
雪の落下大きな音でびっくりす

河内長野市 針生和代

若い積り油断していた骨粗鬆
人生を走り続けて古希となり
年金の家計にみぞれ降っている
競争過熱ランドセルにも押し寄せる
値段みな折合いつかぬショッピン

堺市 大久保伸子

癒える傷癒えない傷もある心
泣き所知っているから大丈夫
カレンダーメモたしかめて動き出す
目標が私のそばへ来てくれぬ
好奇心まだ輝いて古稀の坂

堺市 荻野像山

友人の礼はオッスで済ませてる
すんません言うているのに凄まれる
七福神祭って喜寿の頼みごと
ピリケンにトラを被せて運頼む
軽いガス腹に溜まると重くなる

堺市 近藤治子

呼び声のトーンで機嫌計られる
火を知らぬオール電化で子が育つ
寒の朝寝床と別れ惜しんでる
生ゴミが産む肥料ですエコライフ
自分では人のつもりでいるペット

堺市 羽田野洋介

願いごとポッケに入れて持ち歩く
春の風心の迷い開かせる
さすがだね無駄遣いにもある格差
こたつで飲む冷えたビールも乙なもの
まあいいか鯛の頭よりはまし

B面にしなやかさあるいい出会い
吹田市 藏田光子

竹林がしなやかに揺れ鳥一羽

川底を覗きたくなる水明り

川の字で育てた子らも城を持つ

山嵐川に伝って横なぐり

吹田市 二宮栄子

養老院見舞うかわい園児さん

いい知らせスキップはずむランドセル

外は雨独りの余生考える

コーヒートの香りリッチな朝のパン

チャンづけで呼び合う里のクラス会

吹田市 早泉 早人

ぬるま湯にチャイナリスクが押し寄せる

ゆつたりと本を枕に飲む湯治

缶ビール一本ほどの愚痴を聞く

決断は少し早いと昼寝する

晴れた日は笑顔を提げて出掛けよう

高槻市 笠原 乃りこ

生ぬるい処罰に遺族また涙

階段は上がり切ったがハテ何で

ご要望に応じませんと三毛は去り

ライバルの生あたたかい手を握る

花嫁はみんな美人で才媛で

本当か芝居か惑う父の惚け

ヘルパーの手にしがみつく介護浴

恙ない日々で日記は白のまま

痛いところ突いてる妻の取り調べ

奥方の顔が浮かんでさめた酔い

高槻市 安田 忠子

電気ガス鍵掛けたかと点呼する

合鍵ががたつき出して恋終る

階段を数える癖で足鍛え

驚いたうざいが辞書に載るなんて

ご近所の立話さけまわり道

豊中市 荒卷 夢

束の間を精一杯に雪の花

彼岸にも雪降ってるか甥っ子よ

何十年生きても生も死もふしぎ

人間も少し曲がって魅力的

硝子越し赤い山茶花笑ってる

豊中市 源田 啓生

ハイと言う妻のハートにある色香

鯛大根優しい冬の匂いする

口先は元気と告げる電話口

老梅にシベリヤ寒波打ちつける

煩惱よ私と死ぬまで付き合うか

高槻市 片山 かずお

豊中市 神野 宇乃子

菜の花を芥子効かしてお浸しに
蜜入りのりんごを剥くと雪の音
白魚を噛めばプチッと寒の冴え
蛤と走りの豆でひなの膏
白酒を古びた雫と差し向い

豊中市 谷川 勇治

娘が嫁ぎ家から赤が消えました
縄電車車掌の妻と二人です
疲れたら母さんの輪に入れたげる
かあさんに安らぎ買ってあげたいな
少年の計画にない赤信号

豊中市 松尾 美智代

ヨイショッと一声あげて布団出る
今日も元氣ついついご飯食べ過ぎる
お留守番いのち洗濯しています
使い道もう決めている皮算用
手を結ぶボールが近い亀うさぎ

富田林市 古田 千華

投票函民の足音聞いている
ふだん着の心で活ける桃の花
苛立ちを一息入れて穏やかに
叱られて足だけ母に触れて寝る
気を付けや前に慣らえの出来ぬ子等

寝屋川市 岡本 勲

いつまでも歯痒さ残る拉致問題
豊かさでもつたないが死語になり
ゴミに泣く日本の富士の山
喜寿傘寿卒寿と遠いスケジュール
しあわせは鬼に金棒友に医者

寝屋川市 森田 麗

覚えたて孫の寿限無は舌足らず
コンビニの傘が混んでる雨の駅
筆不精メールですますありがとう
拾い猫元に戻せと言えぬまま
情念を舞い切る女形十五歳

羽曳野市 宇都宮 ちづる

六十の手習い会得は八十路かな
その話五回目と聞き落ち込んだ
カラフルな背中が揺れる一年生
満開の日に逝った母京女
酸欠の空気のような夫婦仲

羽曳野市 森下 一知

怖いもの見たさにうづく好奇心
塩分をひかえて情緒干涸びる
春先の庭に音符が跳ねている
束の間の家出男のおでん酒
肩書きと一緒に捨てたピロリ菌

枚方市 小林 わこ

心の内に聞きわけのないもう一人
憧れのあなたはいつも川向こう

四コマ漫画朝一番に貰う笑み

リーダーの澄んだ目が好きついて行く
落ちこぼれた種もはじける春が来る

枚方市 坂本 ミヨノ

百歳まで美人でいよう欲深く

年甲斐なくバイキング盛り競い合う
雪の庭猫の足跡可愛くて

リハビリをばつばつ一歩鼓動鳴る
愚かな夢当らぬくじを再度買う

枚方市 二宮 紫鳳

点滴に勝りし孫の初便り

ランドセル小さな背なに弾む夢
病など負けてなるかと髭をそる

お多福の笑顔よ続け鮎かぶる
病める日々花と一緒に友来たる

藤井寺市 伊藤 アヤ子

豆まけば拾つてるのは鬼ばかり

せせらぎが根雪を解かし露のとう
桃の花寒の戻りに縮こまり

バレンタイン義理チョコばかり買っている
大根が美味しくてまた関東煮

藤井寺市 津田 シルク

かけ算の九九が聞こえてくる風呂場
長い祝辞にお造りもぬくくなり

犬も服脱いで散歩の春ウララ
里の夜満天の星落ちそうで

幸せのおすそ分けだねいい笑顔

藤井寺市 増井 ヨシ枝

メジロ来る庭に予期せぬ雪が舞う

寒いのにメジロ水浴び手水鉢
ごほうびに赤いマフラー買いました

苦労した数だけ運命光ってる
リハビリの足を疎める寒波くる

藤井寺市 俣野 登志子

再検査結果待つ間の脈の音

ゆず三つほどよく香り終い風呂
節分の寿司細巻きにしてかぶる

誰よりも春を待ってるローヒール
お亡母さんわたしもう古稀守ってね

藤井寺市 吉田 喜代子

曇天には明るい色を着て散歩

隣から豚饅一つおつきあい
ひなまつり義母が好んだ菓子とお茶

山ほどの願いを託す流しびな
噂飛ぶととてもとつても痒い耳

八尾市 赤木 妙子

大掃除で出た千円の埋蔵金

擦り減った指紋が過去をしゃべり出す

すっぴんの時は知人とよく出会う

旅土産ナンバーツウを買ってくる

夢の余白はただ猫のこと花のこと

八尾市 田邊 浩三

亭主より高い医療費ボチの風邪

メル友に催促事項を電話する

悪友はわるい奴だが裏切らぬ

黄泉の国では探さないわと妻はいう

にらめっこ本気で睨み孫泣かせ

八尾市 寺川 はじむ

知った振りして舟を漕ぎこぎ見る歌舞伎

傍からは優しく見られ怒鳴れない

嫌だなと思つたことは先済ます

失敗をするから人生面白い

物忘れやつと見つけたポツケ中

八尾市 前田 紀雄

新知事さん非常事態はそらあかん

公約に偽装はないと言えますか

近頃は料理の本が良く売れる

生活の重視いいつつ消費税

人生は筋書通り生きられぬ

八尾市 松葉 君江

歳の壁プラス志向でのりこえる

ごめんなさい一言いえずストレスに

あたりまえ教えてくれた病みあがり

曲り角父の背中を目標に

余計なこと言うのも老いの仕事です

大阪府 西川 冷子

応援の役目も辛い寒稽古

ただ一人挑む荒波鮪ぶね

木下闇群れるめじろの数知れず

直射日の強さに負ける雪だるま

我が家でも手作りギョウザ蘇る

大阪府 小栢 こずえ

靴みがき晴れになる日を待つている

天気みて今日の行き先決めていく

効くようにならないが湿布をはっている

休日が終りいつもの日が暮れる

夜よ止れ寢床にいたい寒い朝

大阪府 神野 千恵子

入りたくないのに開く自動ドア

物の無いころが不思議と懐かしい

信号が青になつても迷う足

手を合わす背中に人の顔が見え

住み慣れた町で大きく深呼吸吸

大阪府 畑中節子

炬燵中コントのような無駄ばなし
露の臺早や顔を出し春詩う
せせらぎに春を囁く猫柳
栗枯葉被り春待つふきのとう
ほつぽつと日脚が伸びて畑招く

大阪府 若月祐作

玄関を開けて笑えば福が来る
繁昌亭羽織をぬげば笑い出す
頼みごと初めに相手持ちあげる
ネズミ取り派手にかかつて小正月
ときめきを求め新年赤を着る

神戸市 木村忠義

大きめに書くと心が広くなる
日本地図貼って自分の土地と見る
本心を見抜かれてから話しよい
無意識に置くからあとで大騒ぎ
寝る前の考えいつもまとまらぬ

明石市 糺谷和郎

最後まで素性明かさぬ破れ傘
空気読むコツを教わる再雇用
再雇用まだまだ飛べる風を待つ
知恵袋小出し小出しの再雇用
低きへと流れる水を疑わず

尼崎市 加川靖鬼

順風満帆時化の予測が読めてない
あと戻り出来ない鍵を渡される
ビフィズス菌脳にも少し贈りたい
山に来て水と酸素の旨いこと
鼻の穴二倍は欲しい山登り

尼崎市 河津正治

万能細胞生きる望みの夢を乗せ
卒寿の父豊饒として屠蘇機嫌
福々しい顔で見ている道祖神
一呼吸置いて追伸考える
急流も春の瀬音に衣替え

尼崎市 小池幸子

百歳を視野に計画練り直す
介護の手借りず生涯終える夢
大食がもて囃される世の不思議
年の数食べられぬほど長く生き
話し好きやきいも提げて友来たる

尼崎市 藤岡りこ

呆けたかな書棚に同じ本二冊
人眺め退屈知らぬ園の猿
同窓会 和服姿が目を集め
金婚で似合いの夫婦になりました
何故かしら愛しい人皆先に逝く

加東市 安達 厚

人間もいつか絶えると化石いう

食べかたも勉強でしたモスバーガー

八十になっても妻に叱られる

白内障前立腺と話あい

こどもニユースお爺ちゃんにもよくわかり

加東市 黒崎 美紗子

おしゃべりが何より馳走食事会

青信号なのに横から車来た

くじ当たる何よりうれし図書カード

ひと言が忘れようにも離れない

義理チョコと分かっていても嬉しい日

加東市 中村 和代

ロボットに手術お願いする未来

トライしてゴールまだ先若い知事

そんなにも豆食べられぬ年になり

パソコンを前に一日棒にふる

経済の活性化呼ぶ寒気団

篠山市 谷田 多美子

年金を貯めて四月の熨斗袋

人恋し雪が斜めに舞う深夜

軍艦マーチスパーで聞く勇ましさ

かくれてた見栄がうごめくクラス会

たこ焼き屋開店します花の路地

三田市 上垣 キヨミ

書き初めが天空に舞うとんど焼き

羊水に浮かぶ心地の仕舞風呂

少子化に教えて欲しいネズミ算

人生の卒業式の写真撮る

子のケンカ見事にさばく母の才

三田市 白井 二英

ハードルの高さ分かって走ってる

痩せたねと言われやっぱ寂しいな

旅に出て男やモメをテストする

欠点はDNAのせいにする

なるほどというが納得していない

三田市 阪本 藤朗

温暖化ほんとかいなと凍てる日々

万能の豆腐ただ今冬モード

鮫鱈は醜い顔を忘れさせ

いかなごの釘煮に春の扇風機

冷たい手握りあつてる二月堂

宝塚市 丸山 孔一

日溜まりを選つて顔出す土筆ん坊

春眠を貪りたいが目が覚める

湯治場のせせらぎに咲く猫柳

春風がもつと生きると頬撫でる

曲つたり折れたり続く夫婦道

西宮市 石野 照代

一輪のつばきの位置が決まらない
チャックした口がだんだんゆるみます
千年紀いつかはきつと読み通す
すがる手をえらべる時ではありません
ロボットが上役になる近未来

西宮市 藤本 直

マイナスのエネルギーだけ脹れてる
酔い覚めの水置いて妻そつと去り
乾いてる青年ギリギリ音がする
夕焼けを見つめていても明日見えぬ
見続けた夢をロマンと言い換える

三木市 広瀬 房江

美味しいもの一人で食べる味気なさ
同病を泣いて笑って長電話
うたがえは医者薬も恐ろしい
あの袋買った覚えのあるギョウザ
家計とは別の財布で買うおしゃれ

奈良市 阿部 茶々

やれ嬉し今年も無事に初日見て
金婚にまだ分らない淵がある
同窓の最後の弔電誰が打つ
若者がM1シヨウに熱く燃え
飽食に顔色青き人多し

奈良市 乾 春雄

嘘ついて寄り道してた青春期
山越えて川を渡って来た噂
膝枕やさしい母の耳掃除
まだ海の夢を見ている冷凍魚
言葉など要らぬ夫婦で今日も暮れ

奈良市 岩本 浩二

長化粧ここの一番の勝負どき
お隣も嬖天下で波静か
ド忘れか呆けて来たのか気に懸り
びつたりと凶星つかれてうろたえる
モンゴルの国技かいなと賜杯泣き

奈良市 尾畑 なを江

団欒を演出したが疲れきり
盆栽に人間のエゴ押し付ける
年金よ入っておいで行かないで
贈賄をするほど金もコネも無い
毎日を大根役者して暮らす

奈良市 辻内 げんえい

自腹切りそれでも貰う領収書
びつたしに払って財布軽くする
お似合いとの仲人言葉本音かも
脳トレに一日一句欠かさない
ヘボゴルフこんな早朝いそいそと

奈良市 矢野良一

ハニカミ王子ほろにがデビュープロの壁

ささやき女将船場老舗のしたたかさ

今日もまた毒入り餃子ワイドショー

節約に灯油難民二人風呂

二人寝も炬燵代りと我慢する

生駒市 小西稔

ごみの山見るみるうちに銀世界

買物に注意して見る原産地

期限切れ見るとやっぱり食べられぬ

夢に見る試験問題なお解けぬ

ばれてみてほっと息つくわが秘密

橿原市 藤永実千代

自信ない舌に安全任される

人権を傷つけてまで笑い取り

手に入れたピタパが旅に出ると言い

世の動き早過ぎ余裕奪われる

特攻の地にて平和を噛み締める

和歌山市 坂部かずみ

電気毛布冷えた心も焙ってる

お料理のギョツと固まる魔女の爪

晩酌のルールを破るうれしい日

さがし物ばかりで今日も忙しい

子の歳を聞いて驚く親も古稀

和歌山市 田中すす

駆け引きの欲がだんだん膨れ出す

眠らせた過去がときどき目を覚す

汚点一つ残して果てた日の宴

ばらばらと頁を捲っていく他人

堪忍袋の緒は三度目に切れかかる

和歌山市 土屋起世子

お手洗い夫やさしくバッグ持つ

雪道の供にカイロを腰に付け

七転びプラス志向に切り替える

古希過ぎて赤やピンクで身を飾り

孫受験賽銭箱へ札を入れ

和歌山市 根田よしこ

MRI良しと言われて万歩計

寺参り先ずは感謝し願回事

デイサービス家では見せぬ老母の顔

久しぶり笑顔ほめられ愚痴言えず

春よ来い小さな蕾じっと待つ

和歌山市 福井菜摘

派手さには縁ない父の真四角

尽くすことの幸せ母の道しるべ

車座の酒に本音もまわり出す

蹴って出た古巣に尻尾おいてある

そして今あなたの視野に浮いている

岩出市 村中悦男

読経する妻に余分の隙がない
足もとの暖房からの子守唄
ネクタイをはずして家の人になる
ふうふうと北風を背に芋を吹く
請求書寒さに負けた光熱費

紀の川市 宇野幹子

ずぶ濡れの心へ傘をさしかける
シヨパン聴く一枚ずつを脱ぎ捨てて
過保護からニートの若芽伸びてくる
溜息をつくと空気に蹴躓く
老いという鬼に尻尾を掴まれる

紀の川市 北山絹子

自分史の中に昭和の詩がある
鰯焼く匂いを猫が察知する
ブランドの財布に化けてゆくバイト
気紛れな風が花粉を連れてくる
バランスを崩した山が噴火する

紀の川市 木村徑子

友情にふれて少年立ち止まる
文字の海ひとりだがやす小宇宙
スローライフのコントをつづる五七五
ぶきつちよなベンへ頬杖ばかりつく
ポランテア老いの余白が充ちている

紀の川市 辻内次根

MRI過ぎ越し方と行く末と
夕暮れになると故郷の空を見る
貧しくも風を感じて生きている
善人になれない今日の鏡見る
耳の奥ときどき痒い時がある

橋本市 石田隆彦

アンテナが心配の種また拾う
肝臓のサイン無視した二日酔い
四季の風お腹一杯吸って生き
お願いを命令調でする家内
買い上手のつもりが浪速売り上手

和歌山県 堀 富美子

わたし彩セーブしながら輪に溶ける
はらはらした子にはらはらさせる老い
ライバルを気にする内は呆けはせぬ
娘に電話今日の孤独を悟られる
捻子少し緩んだ男もてている

鳥取市 大前安子

時どきはだだをこねます葉指
夫の顔酔うほど美男良いお酒
棚ごとに並んだ本に父の影
胸にある凍る言葉に春の音
ひなの前少女に戻る孫びざに

鳥取市 坂本 智子

寒風に身を縮こめている古木
大樹から春の鼓動を聞いている
老いた母首長くして春を待つ
荒れ狂う海もがきつつ舟を漕ぐ
若者が集う所に活気満ち

鳥取市 津村 律子

買物袋下げた夫に感謝する
転んでもそのつど愛に起こされる
ぼかぼか陽気得したようないい気分
突然の目眩い閻魔の使いかな
死に急ぐことは無いけどギョウザ買う

鳥取市 横田 春名

春風に薪割る祖父の汗俵ぶ
春愁か笑い声にも突つ掛かる
老夫婦無口のままて花吹雪
さざ波のような諍い老夫婦
我逝く日亡き娘産れた日を願う

倉吉市 酒井 芙美子

ごまかしてウフフと笑い嘘をつく
二十年今年のテーマ命です
烏合の衆テーマ決まらず時間切れ
好きなのに胸にしまつて五十年
やさしさが好きで一緒になった仲

境港市 遠藤 那珂子

義母の前大きな魚そつとおく
煮魚がやつと家族の口に合う
欲ばつてみても五本の指の中
あれこれと欲ばり私水がもれ
欲三つ持つて私は生きている

米子市 小塩 智加恵

値上がりも食細くなり恙なし
かじかんだ手はグーばかり負けている
反抗の妻の言葉がない朝餉
お互いに耳遠くなりトンチンカン
子は親に孫は息子によく似てる

鳥取県 飯野 菖子

大根も四季のリズムで太りだす
年よりも少しリズムが若いかな
欠けてるが愛着深く手放せぬ
足腰もリズムにのれば動きだす
朗らかを宝に生きて明日に積む

鳥取県 大田 勝誉

これからという切り札は残っている
いい人に畑を借りて夢育つ
おみくじを引いた大吉持ち帰る
病んでみて夫の気遣い痛み入る
大寒にほんのり咲いた乙女椿

鳥取県 大塚 美代子

在りし日の思い出語るアメジスト

猪も役目果して鍋になる

パソコンの賀状にそつと筆を入れ

コンビニでおせち賄う独り者

除夜の鐘きいてねずみがすべり込み

鳥取県 岡本 幸枝

山小屋のランプも客の安否待つ

店員の心配りが客を呼ぶ

ロボットが独居老人支える日

美味しさを生かす殺すも塩かげん

かいた恥肥やしにしては生きている

鳥取県 岡村 孝明

医の進歩ねずみ命を捧げてる

煮つまった現場の意見社が動く

可愛い子強くなれよと世に放つ

食育をさげび煮物に気を遣う

身の危険感じカMEMシ屁を放つ

鳥取県 北村 稔

花を買う主婦はきれいな人にみえ

花作り損得ぬきのしあわせよ

十秒で札束つかむ相撲とり

熱爛に湯豆腐あれば金いらん

お隣にあかりがついてほつとする

鳥取県 斉尾 くにこ

かぐや飛ぶ十七音が追いかける

シンプルな愛は自信に満ちている

わたくしの芯に水脈きつとある

日だまりへ猫も集まりエコライブ

エコバッグ地球への愛入れている

松江市 相見 柳歩

写すのはやめる時間が止まるから

美しさ餅の白さと君の肌

靴下の穴よりでかいものが夢

地球まで曲がらずここで虹になる

色恋はさておき君と喋りたい

松江市 松浦 登志子

口ほどにも言う目元底力

生き残る術を草花見せてくれ

褒められて余分なことをしてしまふ

消しゴムで消せない言葉ご用心

お世辞だとわかつていてもルンルンに

松江市 山根 邦代

冬晴れに窓をみがいて陽を浴びる

雪踏んで笑顔に会えて温いこと

健康を脅かされる食えらび

端切れにも命あたえてエコバッグ

不揃いの針目気にせず縫い上げる

出雲市 荒木英子

三回忌淋しさ慣れた侘び住居
独り居に笑うことなく隙間風
風邪の床おせち料理を案じてる
厳冬の炬燵生活春を待つ
週二回感謝かんしゃの福祉バス

雲南市 菅田 かつ子

風花へショーウインドーは春の彩
どっこいしょ立てばあれこれ用があり
さようなら川面流るる落椿
お喋りが弾んで少しロスタイム
なんでやねんどのチャンネルもバラエティー

雲南市 武島 ちよえ

新年度何を削ろう油の値
蛇口からぼとりぼとりが恐ろしい
まだ生きるつもりせつせとまとめ買い
小刻みに嬉しい知らせ電話ベル
目をこする間もなく二月去って行き

雲南市 福岡 博利

人はみな越えたくはない山がある
技術より人格学べと書の師匠
一二月シベリヤの朝おもいだす
失敗や迷いがあったて生きてきた
一病を自慢し合って八十路坂

雲南市 渡部 好栄

あの世では待っててくれる母がいる
井戸端もそろそろ賑やか春の風
合併に右往左往の群れ鳩
逆転があつて世の中間白い
人生の出合い不思議な事ばかり

安来市 原 煩惱児

喧嘩した頃が花よと認知症
悔い数多叶わぬ夢よ認知症
天真爛漫孫が励みの喝を入れ
句を捻る妻の病状案じつつ
深夜ふと病む妻思い目が覚める

尾道市 木曾 一徳

春めきて手袋右手失いし
春暁や田水を張りて鋤を打つ
涅槃西風スケッチブック持て余す
水温む一冊増えし料理本
風光る町内会長三十代

府中市 馬場 利子

さりげない言葉に満ちる人情味
四捨五入しても人生イロハ坂
医者通りリズムに乗せる春帽子
登り切る坂の向こうにあるドラマ
笑つても泣いても落ちぬ古い傷

府中市 藤 岡 ヒデコ

七千体だるま見るより見つめられ(三原タルマ館)

物欲がスリムになって楽になり

毎日が最高そして明日が来る

未完にはしないつもり趣味ひとつ

ひびき合う頃幸せだったなと思う

阿波市 三 浦 千津子

負けん気がとれて和らぐプレッシャー

控え目にとてもとと受けて立つ

良心が少し重たい羽のぼし

ATM機出て来るお金温かい

またかいなそんなニュースに慣らされる

今治市 渡 邊 伊津志

横文字のキャラは嫌だという真面目

人責めるたびに感じる自己嫌悪

俳優は顔筋肉のアスリート

隠し味の秘訣はなんと炒った胡麻

声質で人柄測る耳を持ち

大洲市 花 岡 順 子

びつたりの言葉を探すのは苦手

動じない石も転がる石もある

指切りの好きな女で寂しがり

聞き流せない冗談に刺がある

機関銃の女へ立ち向かう無言

香南市 桑 名 孝 雄

春風にサイタサイタは亡母の顔

秋霜にススメススメは亡父の声

仇っばい大中若の三女将

枳酒の塩で飲むほど通でない

酒を飲む根性だけはまだ捨てぬ

香南市 近 森 功

日向ほこ太陽族のなれのはて

明日があるすんだ昨日は忘れよう

膝枕婆さんでよい耳掃除

ポックリ寺いづれ頼むとお賽銭

オイオイと用もないのに呼んで見る

北九州市 岡 田 幸 生

合格のその後に緩みだした捻子

歳月の重荷に曲がりだす背筋

悪友がいけない寂しいワンカツプ

新聞を砦にかわす妻の愚痴

薄味に馴らされ無理が利かぬ老い

福岡県 林 さだき

先読みをしてはストレス抱え込む

隣の娘バイク迎えに来る歳に

過ぎたこともうしばらくは伏せておく

もう飽きた大河ドラマの出世主義

アルバムに五七五の詩を添え

唐津市 岩崎 實

正月の残りの餅を食べている
律儀さが文字文面にあらわれ出
身辺の整理すませておきたいが
わが老いも妻の老いるも同じこと
三十八歳府知事当選その意気で

唐津市 北村 松風

軽率な言葉で友と距離ができ
好きですよ春の先駆け路の臺
年金で仁義すまして逝く予定
我が命消費期限を貼り替える
大正の生まれ戦の青春期

山鹿市 阿部 ミツ子

今年こそ積み重ねよう幸せを
初詣でガソリン高で遠出せず
絵手紙の友と出会う文交わす
湯の町に足元ゆらぐ灯り
あなたには笑顔のときが一番いい

メルボルン 藤原 ポン吉

リサイクル経費かけ過ぎ無駄増える
再生紙表示古紙率嘘の量
墨混ぜて汚くすれば再生紙
立ち小便地球規模ではリサイクル
リサイクル出来ぬ時間を大切に

シドニー 三谷 たん吉

毒ギョーザ売った買ったは日本人
自分らで作って食えば文句なし
原産地どこであろうとみな不安
偽装国えらそに他国批判する
節度なきマスクミ国を傾ける

札幌市 三浦 強一

蟻の足踏んでいるのは象の足
墨擦って紙の白さと対峙する
ことごとと煮豆しんしん雪が降る
津軽三味ずんずん雪を積らせる
切れ切れの記憶をつなぐ二日酔い

日立市 加藤 権悟

フレッシュなスーツ翔び立つ春の駅
やがて社の未来を担う若い風
春一番冬將軍は点になる
リストラの戦に容赦ないノルマ
ひと粒の米に忘れている祈り

栃木県 岡野 すみれ

初場所へ出直しとなる朝青龍
辛抱も美德の頃はとうに過ぎ
愚痴我慢ほどほどにして旅仕度
後付けに必要なのはタイムミング
ほろ酔いで捨てた恋の捨てどころ

草加市 飯土井 健翁

針の穴糸が通せる明治の目
感動の句を暗記して白寿まで
教養の本を読んでる九十八
明治には根性という宝あり
健康は歯医者知らずの明治の歯

昭島市 野口 忠

手作りのギョウザがやつと株を上げ
ギョウザ食う前に割り算する子達
正論を燃やすストーブ熱すぎる
山里はストーブ街はもう花見
梅の香に北風ハツと向きを変え

横浜市 巖 田 かず枝

安心と安全が売り母の味
私の欲の八割食にある
自給率猫の額になすトマト
またお鍋そうよあなたが好きだから
自分へのご褒美チョコが売れている

横浜市 金 森 徳 三

春闘の仲間に入れて年金も
もつ焼きの匂いがしみたガード下
暇と金出来たときには寝たつきり
分別に老いた頭が追いつかず
宝石の前は素早く通り過ぎ

横浜市 川 島 良子

ひと区切り還暦からの第一歩
悪いことそうそう続くわけがない
血圧を言い訳にして朝寝坊
マニユアルの通りに育ち反抗期
履歴書に資格並べて職がない

横浜市 長 島 亜希子

老舗だから旨いと食べた僕の舌
同郷だね里の野菜についた虫
ゲームして肩が凝ったと湿布貼る
何気なく買った新香に知事の顔
立春だせめてスカーフ春色に

岐阜市 平 野 あずま

生き方へ日々推敲をくり返す
国益を果たす炎暑の印度洋
古火鉢母の輝語り出す
養生訓の教えに沿って燭をつけ
長過ぎた恋路低温火傷負う

北名古屋 片 岡 文 男

正月は子のメニユージュけまたメタボ
温暖に眠っておれぬ梅の枝
元氣そうな装い集うシニア会
末等の年賀はがきで並の年
株安はいいがインフレ困ります

奈良市 田中賢治

政権は牛のよだれと数合わせ
捕鯨国戦勝国に組み敷かれ
舶来の食品だけは産地見る
地図出して買った魚の国を見る

鳥取市 谷岡清子

はるか空行つて見たいと夢を見る
次々とおちる雪種よくつづく
母さんの笑顔満点児の笑顔
太陽が元氣出せよと背なを押し

鳥取市 松岡照美

紅をひきマスクにキッスははずせない
孫達と私の暇が遊んでる
冷たいおせち減らしてる三が日
私いて内なる私叱咤する

鳥取市 山口千代子

身を締め耐えて春待つ雪の下
着ぶくれた入浴前の体重計
パイひねり脳のリハビリしています
飼犬は雪より炬燵好きと言う

倉吉市 藤井美津恵

日だまりにいぬふぐり咲き春感じ
蝨梅の香りただよ路地通り
ふわふわの雪は陽に逢いシャーベット
時間ないやつと飛び乗り違うバス

倉吉市 福光京子

不景氣かチラシで太る朝刊紙
今日の子定テレビ欄からチエックする
家庭欄今日のおかずにヒント得る
国語ならまだ負けられぬ模試挑む

倉吉市 前田喜美子

進歩する医学とまどう長寿国
深呼吸よどんだ空氣全部吐く
リサイクルもつたないを合言葉
明日こそ一歩踏み出す思案橋

米子市 見山温子

白バイが後からピタリついて来る
かにすぎが一時無口にさせている
ふんわりと干した布団に猫もぐる
派手な服鏡の中が笑っている

鳥取県 岩崎和子

初場所が終つて夫氣が抜ける
鬼の面茶の間に飾り春気分
寒い日はニラ粥食べてあたたまる
黒豆の煮汁こぼした悔いの朝

鳥取県 加賀田志延

嘘ひとつつこうとすれば汗をかく
日本人囁みしめながら障子貼る
きましろへ運ばれて行くバスツアー
灰になるまでぎっくり腰を連れていく

鳥取県 田口清帆

お年玉あげると孫はすぐ帰る
ゴミ分別ゴミ箱増えて片付かず
忘れぬようメモした紙をまた捜す
代行車飲み代よりも高くつき

鳥取県 橋谷静江

度忘れへ辞書は少しもはなせない
金貯めて良いばあちゃんになりたいね
あと少しのこった時間丸く生き
友達の笑顔見たくて茶に誘う

松江市 柏井日出子

柳界もいろいろ拾う神あまた
ほほづえをしても未映子に程遠い
乳と卵目からうるこがとれました
いいことばプリンスさまのゆかしさよ

出雲市 川島和歌子

あれこれと夢追いながら八十路来る
世界遺産一度に沸いた人の列(石見銀山)
耳寄りな噂拾った散歩道
相談に私の希望入れて置く

高知県 いの静草

払うもの払えば心細い額
買い置きを促すわりに安くはない
尊敬の二文字が底にある夫婦
決着をつけよと膝がゴースサイン

立川市 柏野遊花

節分は鬼より雪が刺激的
快適な暮らしから出るゴミとガス
気がつけば同じ鍋釜地球民
顔文字のメールはいつも媚び上手

藤沢市 加藤スズコ

十年目咲いた一輪雪の朝
ファックスで郷土自慢がとんで来た
初雪に里の雪国懐かしむ
夕やけるねぐらに誘う鳥の声

大阪市 田浦實

肩凝りを癒してくれる一万歩
木蓮が蕾に隠すでかい夢
温い布団これが浄土か雪の朝
願わくはぼっくり頼む阿弥陀さま

大阪市 橋村容子

故郷が遠くになりゆく三代目
橋下知事一気の若さほしいまま
腕白が頬染めながら雪ダルマ
贅沢は許されないが日々安穩

大阪市 吉内(福世改め)タカ子

笑い合う日を楽しみに鬼を抱く
節分や鬼を逃がそう神楽鈴
最敬礼だけで許せぬ世間様
忙しい楽しい日々で気が若い

大阪市 吉川 弘泰

着流しに大入袋の繁昌亭
袋の中で雑談をするくすり達
記憶漏れ防ぐ手段に脳トレを
団塊の酒は心の香水に

岸和田市 中岡 香代

沈黙をピリツときかす話の間
脅迫のようにブームとコマーシャル
灯り付く温かい家ある至福
雑草は無農薬でも良く茂る

池田市 多田 契子

校庭の伸びたポプラも冬休み
計画書立派なものが残ってる
お誘いのある予感する好天気
初詣で国の心配もう十円

岸和田市 米富 淳風

ねばならぬそれがストレスプレッシャー
感激が希薄になってゆく恐さ
歩いたら健康確保した気分
五七五追いかけてくる日が逃げる

泉大津市 助川 和美

行くあてのある妻いつもピッカピカ
雪が降る白いウエア弾けてる
そりゃ太ってるでも愛嬌は負けへんで
繰り返す昔話に欠伸する

寝屋川市 小嶋 みさと

少子化でねずみに智恵を拝借に
山茶花は寒さにめげず赤く燃え
雪化粧まとった木々は別のかお
旅立ちに日も間近なり孫二人

河内長野市 木太久 正一

寒い日の温い便座が有難い
犬ひとり置いて日帰り新幹線
大正の殻をかぶって日向ほこ
全没の反省しきり柳誌よむ

羽曳野市 松本 静子

二上も朝日に映えて手を合わす
防災と言いつつ何もしてない
里坊で座禅し心浄めてる
古里の山は樹氷に包まれる

河内長野市 黒岩 靖博

年金者格差広がる物価高
ぴったりとマークされてた妻の勤
車窓から見る灯は万華鏡
膨らんだブームが弾け水の泡

枚方市 小川 良吉

鍵かけた過去の記憶がふっと出た
無施錠でも安穩むかし懐かしい
妻難聴いとしい心歩み寄る
国会はねじれよじれで民不在

箕面市 寺井柳童

温暖化冴えない紅葉吹き溜り
南天の笑うまい方から鳥は食べ
待っているポストに一通市の通知
裏向けに穿いて気づかず気にもせず

八尾市 田中トシエ

起き抜けの一口旨い寒の水
難聴を嘆くほど佳い話無し
また聞きで大きくなった蟻の穴
風向きで別の噂がまぎれ込む

八尾市 中島春江

着ぶくれて譲られし席目で測る
節分会演技の下手な鬼もいて
土筆和えままごとめきし京料理
肩よせて夫婦善哉月朧

八尾市 西川義明

おはようで朝の空気が動き出す
目標は百歳トイレわが足で
節分に福豆もらう八坂はん
ノーギャラで流した汗に感謝され

八尾市 脇俊子

進退の選択せまる曲り角
喜びは山彦になる日記帳
虫食いの記憶をたどるひとり旅
芯だけは真つすぐでいる夫婦箸

大阪府 高木道子

山里に春のコントを運ぶ風
ほどほどに相槌を打ち裏を聞く
丁寧語使つて躲す蟠り
うっかりの舌で歪にした噂

神戸市 武田恵美子

またしても同じ所を読みなみだ
つらくても遊びの日には飛びおきる
お腹から声出ししたらカエル腹
老夫婦よろこびごとがつらくなる

加東市 岩本美緒子

遠くなった亡夫に未だ守られる
孫娘らの会話の中で浮くわたし
ストレスは無いが手探る道しるべ
めずらしく雪降り情緒窓に和む

篠山市 永井かほる

孫達も黒豆煮付わかり出し
野菜には味増す胡麻のありがたさ
自家たくわんパリパリかめるありがたさ
悪天候菜園行きが待ち通し

三田市 辻開子

すぐおこる病人介護四苦八苦
霊園の勧誘あつて年を知り
かくし味母娘孫へとつなげたら
アルバムをめくり久しく友に会う

(七反田順子さんの句は53頁に掲載)

麻生路郎句抄

(句集「旅人とその後の作品」から)

人生の雑音

職責で窓が一つの中に生き

その嘘に女は継りついてゆく

嘘と嘘 女いよいよ美しく

書斎はいいがゐるた事はなし

お互ひがみな病院にゐるとも知らず

混雑の中で売名忘れない

失明に学者としての名があがり

苦々しがればそれからよりつかず

寄り添へと云はぬばかりに風が吹く

十二月剃刀持って怖がらせ

夫より通帳の方を頼って居

おしゃべりの中にも夫人虚栄が出

心にもない約束が明日となる

死は強しもう女中ではありませぬ

一口もさかぬ強さをもつてゐる

蝙蝠よ僕も裏切者にされ

もう僕も長い食事の連続さ

もしひよつと妻が死んだらなと思ひ

医者が死を早めたことを誰が知る

畳も匂い初刷も匂い

人妻のあまりに長き袂なる

幻の中に時計が鳴っている

君・君もう少し静にして給え蠅

会社が仆れるかも知れぬ世にゴルフ

ご応募ありがとうございました。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

第1回 オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社主幹

河内天笑選

梅干と胡麻のおにぎり野太い子
健康と長寿の秘訣ごまパウー
和洋中何でも御座れ俺はごま
ごま好きの一家にさせた主婦の知恵
好きやねんごま何にでもパッパッパ
ご先祖と春を分け合う胡麻よこし
すりごまとポン酢が待つよ鍋の湯気
ほろ苦い野草もごまが丸くする
ごま和えに一本つけて伸直り
遠足へごまいっぱいのにぎり飯
一品のごま和えあれば心満つ
おぼちゃんのパワーはきつとゴマの所為
黒ごまの出番赤飯むしあがる
手間隙をおしまぬ母のごま豆腐
すりごまをまた送つてとエアメール
ごまで目を付けてうさぎのお弁当
両膝で挟んで母は胡麻を播り
しつかりとごまを食べてる顔の艶
すりごまを配り引越しご挨拶
ゴマ好きになつてしまった婆ちゃん子

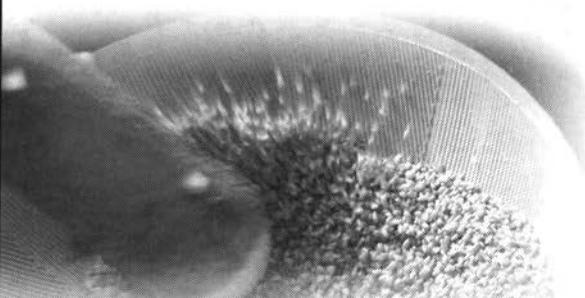
【準特選】

少しずつ毎日食べてごまパウー
ごま和えの春菊匂い春其処に
【特選】
ただいまを胡麻の香りが出迎える

- | | | |
|------|----|-----|
| 河内長野 | 坂 | たかし |
| 堺 | 源田 | 八千代 |
| 河内長野 | 坂上 | 淳司 |
| 犬山 | 関本 | かつ子 |
| 犬山 | 金子 | 美千代 |
| 紀の川 | 吉村 | 幸 |
| 京都 | 榎本 | 宏子 |
| 京都 | 三宅 | 満子 |
| 和歌山 | 大西 | 町子 |
| 東大阪 | 北村 | 賢子 |
| 岸和田 | 土橋 | 房枝 |
| 愛知県 | 早川 | 遯行 |
| 大阪 | 津守 | なぎさ |
| 芦屋 | 黒田 | 能子 |
| 豊中 | 江見 | 見清 |
| 豊中 | 神野 | 宇乃子 |
| 吹田 | 太田 | 昭 |
| 吹田 | 穴吹 | 尚士 |
| 河内長野 | 網木 | けい子 |
| 河内長野 | 小川 | 富美子 |
| 東京 | 清原 | 悦子 |
| 大阪 | 川原 | 章久 |
| 堺 | 志田 | 千代 |

オニザキの

すりごま



自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工販売
から50年。
オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

(講演要旨)

麻生路郎師 橋高薫風師

から学ぶもの

早川清生

各地川柳会代表者会議でお話をさせて頂くことを、光栄と思っております。実はご依頼を頂戴した時は、路郎、薫風両師の追想を、思いつくままお話しすればよいかと気軽に考えておりました。しかしいま司会者が申されたように、本社の業務推進ともかかわって、近來本社内でさらに路郎を知ろうという気運が高まり、経緯を重ねて今日に至っております。企画担当の井伊東吉さんからもお手紙があり「誇りをもって活躍するにはまず原点に立ち帰り、塔社全員に先人の教えの理解をはからねばならない」とありました。

川柳塔誌の新年号巻頭には天笑主幹が二階を降りてどこへ行く身ぞ

という路郎師の句に寺尾俊平さんが感動された逸話を記し「借り物でない自分を吐露し続けることが、いのちある句を生む原点であろう」と述べておられます。編集後記には希久子さんが「現代人の思想にびびったりと触れた

詩と言えは川柳の外にはない」という川柳雑誌創刊号に寄せた路郎師渾身の思いを記しておられます。川柳塔今年は両師への回帰が顕著で、改めて先覚のふところへ飛びこみ、インパクトを受けて、さらなる発展をめざし実作に取り組もうとしております。

ところで私が川柳を始めたのは昭和二十八年、薫風師は三十年ですから私の方が少し早いのですが、路郎師にお目にかかったのは彼の方がうんと早い。ご承知のように彼は川柳を始めるにあたってまず病院を抜け出し、初対面の路郎師を訪ねてお考えをお伺いし、また不朽洞に入ってからはずぐ編集に携っておられる。万事に迅速、積極的であります。句作七年で彼から句集「有情」が送られてきたときも驚きました。当時句集というものは、作者句業の集大成として晩年に一冊出せばよいという暗黙の考え方が強かったからです。このころ彼の作品は川雑の誌上ではあまり見られず、私も彼を寡作の人と思っていました。しかし「有情」にはきらきら輝く斬新な感覚の句がずらり、実は当時彼は柳派を問わず句会荒しに出かけ、句作ももちろんですがいろいろな柳人との交流を図っていたのです。

これだけのことからでも彼の資質のすぐれ

た何点かが伺えます。まず彼の着眼の鋭さ、たしかさです。次にその先見性、さらには機敏で果敢な実行力、そして大事なのは路郎師譲りの革新性でしょう。それらはこのあと川柳塔社躍進の大きな推進力となりました。彼はあの恵まれない健康状態の中で、生涯を川柳のために尽瘁されたが、路郎師も妥協のない人です。川柳塔誌の初期の号に体調を崩しているという記事がよく出てきます。川柳の仕事に無我夢中で打ちこまれる。とことんやられるのでダウンされる。それでも起き上り川柳に立ち向かう。両師とも鬼神でした。

路郎師の自らに厳しく、弟子にも厳しかった話はいろいろ残されています。だが私は十年あまり路郎門の不朽洞におらせて頂いたのですが、師の掌の上で自由自在にやらせて頂いた。型にとらわれず、個性をよく見てのご指導だったと思います。私は路郎師生涯の目的は、川柳における詩性の探求と発展、そしてその社会化だったと思っています。師の作品は森厳な哲理に基づく人生観であります。「旅人」を日々愛誦拝読しているという薫風師は、それでいて師とまったく異なる句風です。「知的叙情こそ現代川柳の糧である」とする彼にとって、知的叙情の完成こそが句業の目標だったろうかと私は思っております。

第四回

各地川柳会代表者会議

二月十六日、第四回各地川柳会代表者会議をホテルアウイーナ大阪で開催し、会長二十四名を中心に多数のご出席を頂いた。

今回は、本社との意思疎通に止まらず、地域川柳会の実情や、運営上の悩み、会員の拡大などの意見交換に多くの時間を割き、川柳塔の問題点を共有する事を主眼として議事進行を行なった。天笑主幹の開会挨拶のあと、路郎師の直弟子である早川清生氏から講演を頂いた。(要旨前頁掲載)

☆次いで本社から、昨秋の同人総会時の諸質問に、西出楓菜理事長から正式に回答した。

一「常任理事会の取り決め事項を可能な限り全会員に連絡願いたい」の要望については、部門間の連携を良くする為に昨秋から不定期で部長連絡会を開催し、その協議内容は常任理事会で審議する。連絡は内容に応じ理事・同人にご案内する。会員全員への連絡は塔誌の「柳界展望」に掲載している。

二「理事の担当分野を明確にしてはどうか」には、現在も個別に業務をお願いしているが、今秋からの理事委嘱には担当の職務分

野を明らかにしてお願ひする。

三「川柳塔の川柳、路郎師の川柳を勉強する機会が欲しい」には、本日も早川清生氏に講演願った。天笑主幹の塔誌の巻頭言も「川柳塔とは、路郎師とは」を語りかける物にしたいと考えられており、早速一月号からその趣意を強められている。また、塔誌に路郎師の句集「旅人」からの転載、大先輩の句を「温故知新」欄に掲載を始めているので精読願いたい。

四「七十五歳定年制を見直してはどうか」には、心身ともに永年の疲労が蓄積されている場合が多く、一旦は激務を離れて頂いて、相談役参事として大所高所からご指導頂く事になっている。

☆誌友拡大対策の経過と取り組みについて、西内朋月同人誌友部長から報告した。

一 各川柳会からの塔誌送付依頼には、ご案内の通り積極的に対応し、誌友が増大傾向を見せている。

二 本年度も塔誌送付による誌友拡大策は継続するので、積極的に同人誌友部へ連絡願いたい。

三 誌友の期限真近には、継続されるように紹介者から働きかけをお願いしたい。

☆各地川柳会の実情調査のアンケートの纏め

につき、井伊東吉企画事業部長から報告した。

一 詳細は席上配布のアンケート取り纏めの通り。(遠隔地の欠席会長には別途送済み)

二 この情報を活用して、本社と各地句会との連携を密にしたい。

また合同句会開催など、句会同士の横の連携を図ろうのご意見も頂いた。

☆誌友拡大対策の具体例発表

○六甲川柳会 山口光久氏

神戸に句会がなく、先ず初心者勉強会の形で発足した。二十人近くの初心者と世話人五人で運営している。ほぼ一年が経過し、三月号から各地柳壇に参加する。

初心者を集め勉強会からスタートするについて、川柳塔本社から物心両面の支援をぜひともお願いしたい(川柳塔社として何が出来るか検討したい)

○豊中もくせい川柳会 江見清氏

月二回の開催とし、月央に句会、次の月始に勉強会を行なっている。句会の没句(無記名)を集めプリントにして、勉強会参加者全員で意見を言い合う。会員のレベルアップと同時に、初心者に先ず勉強会に参加してもらい、不安感を取り除く効果がある。すでに三年経過し、誌友も徐々に増えつつある。

○岸和田川柳会 井伊東吉氏

句会とは別に勉強会を開いている。いきなり句会に参加しにくいと、十五名ほどが参加「川柳しませんか」「豆秋のユーモア句鑑賞」などから句作も始めて、徐々に誌友が育ちつつある。本社でも初心者指導のリーダーを育てて欲しい。また塔誌に勉強になるエッセイなどの掲載を望む。

○太田昭氏（川柳塾五月）から初心者対応の塾運営のご披露があり、草の根の運動から、いつかは誌友へと期待していると述べた。

☆フリーターキング

上記の発表を受けて、全員でフリーターキングを行なった。

天笑主幹から会員募集の手段として、社内川柳、公民館や駅での掲示、居酒屋での色紙張り出しなどの紹介があった。加えて山口光久氏から、六甲では同様手法で三十代、五十代の若い会員が参加されていると紹介された。

また、前たもつ、村上直樹、大内朝子、池森子、江見清氏から、それぞれ意見が出された。会長の後継者については、句会所在地の行政との絡みで市民でないと無理な場合もあるなど問題は残るが、若い人を育てながら句会運営を図り、後継者として育成しなければならぬ。前途に希望を持っていると結論された。

（企画事業部）

第23回国民文化祭・いばらき2008 川柳作品募集要項（概要）

自然あふれる ふる里に ひびき輝くあたらしい文化

1、応募受付期間 平成二十年四月一日（火）～六月三十日（月）（当日消印有効）

2、応募規定

- (1) 作品 一人各題二句詠（未発表作品に限る）
 (2) 応募料 一人につき一、〇〇〇円（但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方及び小・中・高校生は無料とします。）
 (3) 所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込受領証又はその写しを添えて応募してください。

3、宿題・選者へ事前投函 高校生・一般の部
 〒311・4304 茨城県東茨城郡城里町下青山一丁目 城里町教育委員会事務局内

- 「納豆」 丸山しげる（埼玉） 「水」 早川 双鳥（山口） 「スピード」 江畑 哲男（千葉）
 「猪」 川俣 秀夫（栃木） 「ひびく」 田頭 良子（大阪） 「反省」 峯石 隆子（宮城）
 〈当日投函〉

第一次選考

- 4、賞（予定） 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・茨城県知事賞・第23回国民文化祭茨城県実行委員会会長賞・茨城県教育委員会教育長賞・城里町長賞・第23回国民文化祭城里町実行委員会会長賞・城里町教育委員会教育長賞（他全日本川柳協会会長賞・茨城県川柳協会会長賞）

5、発表会場 川柳大会（当日投函受付、入選発表、選評、表彰式）
 平成二十年十一月九日（日） 十時三十分～十六時〇〇分 コミュニティセンター 城里
 入選作品は、「作品集」として刊行し、応募された方（小・中・高校生は入選者）に無料で配布。

6、交流会 平成二十年十一月九日（日） 十七時～ コミュニティセンター 城里・多目的ホール
 問い合わせ先と募集要項の依頼先

7、問い合わせ先と募集要項の依頼先
 〒311・4304 茨城県東茨城郡城里町下青山一丁目 城里町教育委員会事務局内
 TEL 029-288-3135 FAX 029-288-7006

8、主催者 文化庁・茨城県・茨城県教育委員会・城里町・城里町教育委員会（他全日本川柳協会・茨城県川柳協会・第23回国民文化祭茨城県実行委員会・第23回国民文化祭城里町実行委員会）

■各地句会だより

川柳塔打吹

牧野 芳光

鳥取県の中部に位置する、人口五万人弱の倉吉市は、大山の火山灰土が広がる農地を抱え、農業が主体の地域である。

ここには倉吉川柳会と川柳塔打吹（打吹川柳会）が歴史の古い川柳会として存在している。

川柳塔打吹は、昭和五十七年十一月に奥谷弘朗氏が初代会長となつて発足し、今年で二十六年の歴史を重ねることになる。

途中、会員減少等による句会存続の危機があり、平成九年一月に野口節子氏を会長として再出発したことから、句会誌「打吹川柳」は同月号を一号として現在に至っている。

句会誌は、現在も会員が力をあわせ、手製で作製しており、最近では表紙をカラー印刷にして、心温まる句会誌と自負して編集作製に励んでいる。

定例会会

毎月第二土曜日の午後一時から、倉吉上灘

公民館を会場として開催しており、県内他句会からの参加も得て、毎月三十名余りの出席のもとに、和やかな雰囲気の中で句会を行なっている。

選者は他句会の参加者の方を主体にお願いし、会員の作句力の向上等の勉強をさせて貰っている。また、会員の中で順次選者を指名して、選句力の向上を目指している。

当句会の特徴としては、三才五客の他に、



ユーモア吟一句を加えて選をお願いしており和やかな雰囲気作りの一助になっているものと思つている。

勉強会

句会終了後に、時々一時間程度、会員を対象に勉強会を実施している。

前回の句会の没句を数人がピックアップしたり、「なぜ没になったか」等意見を出し合ったり、席題を出して、集つた句を初心者に選をしてもらつたり、また、日頃疑問に思つていることを話し合つたりと、会員の要望を汲み取りながら勉強をしている。

今後は、これまでやっていなかった吟行会などを企画できたらと考えている。

当日の句会から（三才より）

雪像の芸術品に一目惚れ 貴恵

止まり木で待つていたのは雪女 螢

そわそわもどきどきもなく石地蔵 孝恵

嬉しさを隠しきれないのも男 節子

そわそわせず待つて下さいまんま様 克枝

ハンカチに包んで渡す針もある きみ子

真っ白な布に表も裏もある 公恵

どうにでもなる布だから白で織る 三津子

寒月や山には山の音がある 芳光

水の音まな板の音母の音 美知江

木枯らしと春一番のチャンバラだ 石花菜

愛染帖

新家 完司 選

堺市 山本 半銭

後期高齢いやな分別してくれる

(評) 四月から始まる「後期高齢者医療制度」。

七十五歳以上の人は全員が対象。制度の是非は別として、「後期高齢」という言葉が不快。

黒石市 相馬 一花

途中から霧散してゆく良い噂

(評) 悪い噂なら尾鰭まで付いてどんどん広がってゆくのだが……。他人を褒めるのが嫌いな人や嫉妬深い人が多いということか。

豊中市 安藤寿美子

いいねえと思う男は孫の齡

(評) とときめきは年齢に無関係であり、理性では抑えられない。あんまり触れ歩くと「いい歳をして」と言われるかもしれないが……。

吹田市 早泉 早人

三泊で酔いとなる夫婦旅

(評) 自宅ならフイツと飛び出して頭を冷やせばいいのだが、旅先ではそれが出来ない。夫婦旅も一泊二日程度が無難なところか。

京都市 三宅 満子

赤福に徹夜で並ぶひまな人

(評) 「赤福餅を食べないと死ぬ」ほど再開を待ちかねていたのだろう。それとも単なるお調子者か？ あるいは、赤福のサクラ？

鳥取県 石谷美恵子

お喋りは好きだがスピーチは苦手

(評) 同じお喋りでも友人との雑談と数千人を前にしてのスピーチではえらい違い。演説名人は聴衆をカボチャと思っているのだろう。

大阪市 古今堂薫子

世界遺産だ青い空白い雲

(評) にんげんが作ったものは何時も見ていると飽きてしまう。春夏秋冬、朝昼晩、刻々と移り変わる大自然のパノラマこそ世界遺産。

枚方市 海老池 洋

持病みなどれも加齢というカルテ

(評) 最新の医療技術も新薬も「加齢」には役立たない。まことに残念なことだが、大金持ちだつて老人になると思えば諦めもつく。

藤井寺市 鈴木いさお

熟睡が覚めぬのならばそれもいい

(評) 夢も見ずに熟睡している時は、意識がないから死と同じように思える。熟睡したままあの世へ行けたら楽なことだろう。

和歌山市 田中 みね

いい死に方せんぞ財布掏った人
頻尿へ今日の寒さはほんまもん

西宮市 坪井 孝一

あかんべえして見えます抽象画

エステサロン嘘を覚悟で妻はゆく
雑巾しか縫わぬミシンがあくびする
産院を食事で決める娘の時代

神戸市 田中 章子
紀の川市 辻内 次根

屈んだらあつと叫んだ腰の辺

食べて着て着てみな中国のお蔭です
高菜漬ぶつ切りにしてにこり酒
おい嗅ぎペンキ塗りたて触れてみる

豊中市 神野宇乃子

くによくやととしてはるようで隙がない

ロボットの個性だろうかミスして
初天神帰りは寄席で初笑い
雪降れば行かぬ程度の府知事選

四條畷市 吉岡 修
大阪市 板東 倫子

囑託の僕の机にチヨコひとつ

転職に母の遺影は首を振る
また薬のむ事忘れ叱られる
寒いねと南の窓へシクラメン

堺市 加島 由一
倉吉市 松本よしえ

偽装には正常よりも要る努力

通帳を見るよう開ける通知表
通帳を見るよう開ける通知表

三田市 阪本 藤朗
海南市 小谷 小雪

通帳を見るよう開ける通知表

榎原市 居谷真理子

暮れてから逢おう汚れが目立つから
願うのは世界平和とワタクシの平和

米子市 政岡日枝子

沈黙を破るお笑い系の孫
掃除機が吸い込んでいく福は内

西宮市 片山 忠

値切れない妻に頼られ従いてゆく
立ち読みで女の心理知っておく

池田市 栗田 久子

つい無口何の不満もないゆえに
手鏡の中のわたしはまだ女

尼崎市 山田 耕治

縁側に気がねのいらぬ肩揉み機
びったりのあだ名のままのクラス会

西宮市 緒方美津子

気になって起しにゆくと休刊日
どの家も天井裏にいたねずみ

羽曳野市 徳山みつこ

産声が一家を春の真ん中に
惚けたかと聞けばもとからだと言われ

高槻市 片山かずお

好きだからこそほどほどの距離に
三田市 北野 哲男

大阪府 米澤 俣子

車座を忘れてからの寒さだな
和歌山市 木本 朱夏

プッシュしてごらんよきつとひらけるよ

鳥取市 土橋 登

バトカーが止まり空気が重くなる
美人の湯顔までつかりたい気分

豊中市 吉田あずき

地吹雪の怖さを知らぬ雪見酒
寂しくて二つ作った雪だるま

弘前市 高橋 岳水

解禁を待ち焦れてる釣道具
悪友がポツクリ闇は直ぐそこへ

西子市 黒田 茂代

部品さえあれば使えるものを捨て
まともでは利益なかなか出ぬと言う

弘前市 福土 慕情

日が昇る天動説が分かりよし
五本指ソックス指がよくはしゃぐ

鳥取市 岸本 宏章

おとどっこいゴキブリだつて同居人
こんなはずでなかった箸から逃げる豆

和歌山市 古久保和子

ひどくなる抜け毛をひとのせいにする
腹黒い人が儲かる民主主義

弘前市 高瀬 霜石

入園の母のスーツも掛けてある
素っぴんがいいと夫は言いません

大阪府 森田 明子

友だちにだあれも居ないお金持
万障を練り合わせなくてもも行ける

堺市 宮本かりん

海南市 三宅 保州

大型化進む企業も体形も
不器用な二人で転ぶのも一緒

大阪市 小谷 集一

燃える団塊人生は二毛作
孫十五眩しき光放ち出す

大阪市 神夏磯典子

念入りな口止め酔えば思い出し
丁シヤツでだらだら今は充電中

鳥取市 永原 昌鼓

老いの身へ大敵小敵攻めて来る
美人湯もエステも効かぬ深い皺

大阪府 小栢こずえ

雨上り傘も事なく帰宅する
若つくりしても口癖よつこらしよ

大阪市 田中 滋郎

降る雪に心高ぶり街に出る
鈍感力磨きがかかる老夫婦

唐津市 市丸 晴翠

万歩計つけて寄つてる呑み仲間
六十以上と書いてはし優先席

美作市 小林 妻子

悲しみのニュースばかりでまた泣いた

寝屋川市 籠島 恵子

鳥取市 夏目 一粹

河内長野市 坂上 淳司
鍵っ子の侘しさわかる妻の留守

藤井寺市 高田美代子
無病息災はかは望まぬ事にする

岸和田市 井伊 東吉
鈍感を称える本にありがとう

八尾市 村上ミツ子
どーんと歩く人生のど真ん中

福岡県 林 さだき
通夜で聞く戦地の父は別の入

香芝市 大内 朝子
ふわふわと女が匂う春ころ

八王子市 播本 充子
選択は正しかったか石の上

大和郡山形 坊農 柳弘
逆らえぬ位置で煙草をそっと消す

八尾市 高杉 千歩
本物の笑顔が浮かぶ露天風呂

唐津市 樋口 輝夫
自慢話すること無くて隅にいる

鳥取市 福西 茶子
わたくしに金貨せなんて無理なこと

松江市 川本 畔
竹林が揺れて病む人思い出す

大阪市 伏見 雅明
通勤の始発で夢の続きを見る

橿原市 安土 理恵
彼の岸に辿り着いたらまた逢おう

松原市 王置 重人
一大事痛い痒いがふえてきた

富田林市 古田 千華
無印の友情だから連絡と

生駒市 飛水ふりこ
培った仲間の息の温かさ

札幌市 三浦 強一
ライバルの油断を誘う大あくび

倉吉市 野口 節子
貧乏性派手に遊んだことがない

堺市 奥 時雄
ほらほらね自慢話になってきた

芦屋市 黒田 能子
昔ほど嬉しくはない誕生日

松江市 津川 紫晃
人の輪をぬけて時々深呼吸

堺市 矢倉 五月
初孫にずっと尻尾を振ってます

堺市 和田つづや
謹啓でりちぎな兄の文が来る

東大阪市 中岡 妙
新築の工事騒がし羨まし

鳥取市 春木圭一郎
のんびりと文芸香る地を巡る

大阪市 大川 桃花
傷心の旅もあるだるエアポート

倉吉市 最上 和枝
笑い顔見せて赤ちゃん笑わせる

尼崎市 春城武庫坊
ゆらゆらと流れにまかす我が余生

尼崎市 春城 年代
雪解けの道ゆく病夫の背に祈る

大阪市 小泉ひさ乃
決まらずに何度も消している五文字

和泉市 横山 捷也
一坪を耕し春の息吹待つ

日立市 加藤 権悟
福寿草いよいよ日本春にする

東大阪市 北村 賢子
トキメイテ渡したこともあつたチヨコ

豊中市 荒巻 夢
ハミングが波立つ心抑えます

羽曳野市 酒井 一壺
足跡を真つ直ぐ残すむずかしさ

鳥取県 竹信 照彦
皿洗い済んで包丁研ぐ冬日

大阪市 谷口 義
お掃除をするほど暇なわけでない

茨木市 藤井 正雄
ネズミしか知らぬ通路がある旧家

和歌山市 たむらあきこ
子育てのあとを埋めてる林住期

海南市 堂上 泰女
子育てを終えてから知る子の心理

鳥取市 倉益 一瑠
自己嫌悪笑顔を作る癖がある

奈良市 矢野 良一
傷口を優しく癒す屋台酒

大阪市 奥村 五月
佇立って屋台で煽るコップ酒

弘前市 相馬 銀波
さあ二合今日の私を振り返る

松江市 三島 淞丘
世の中はそんなものさ酒を酌む

今治市 渡邊伊津志
枝豆をつまみ他愛のない話

鳥取市 岸本 孝子
金欠病よりも恐れる認知症

奈良市 尾畑なを江
捨てようとするマブタに終戦後

河内長野市 村上 直樹
ひもじさを知らぬ男の軽い骨

寝屋川市 平松かすみ
木々縫った風がテントを慰める

大阪府 西川 冷子
六本木ヒルズこれも日本の国かしら

豊中市 水野 黒兎
山彦がおいと村に春を告げ

鳥取市 西川 和子
花の道歓声あがる福祉バス

大阪市 井丸 昌紀
味方より三人多い敵の数

和歌山市 田中 すす
感情線の怒りまだまだ健在だ

吹田市 大谷 篤子
寒い朝夢の中でも咳をする

和歌山市 武本 碧
虎の子をサブプライムに脅される

高槻市 左右田泰雄
安物買いの財布小銭がよくたまる

柏市 河野 桃葉
年金が痩せて謙虚になる財布

大阪府 萩原 大朔
見て聞いて試して買わぬ客も客

倉吉市 山中 康子
結論は金にまつわることばかり

堺市 羽田野洋介
孫の言うセンスいいねは眉につば

鳥取市 吉田 弘子
ホームドラマわたしの過去をだぶらせる

大洲市 中居 善信
てにをはを間違えたのか一人ぼち

三田市 上垣キヨミ
メルヘンのヒロインになる霧の夜

大阪府 岩崎 玲子
亡き母が撫でているのか郷の風

大阪府 初山 隆盛
ブランドで飾りすまを埋めている

加東市 黒崎美紗子
笑ったら腰痛いつか消えていた

岩出市 村中 悦男
心身がひとつに溶ける風呂の中

出雲市 園山多賀子
卒寿今おこがましくもサブイバル

大阪府 澤田 和重
ライバルのつかい壁と対峙する

鳥取県 斉尾くにこ
神じやなく監視カメラが見ています

橋本市 石田 隆彦
半分は他人が混じる外の風

紀の川市 北山 絹子
絵てがみの中に季節の詩がある

枚方市 丹後屋 肇
青い目がVサインする苦の庭

立川市 柏野 遊花
四か月微笑続けた鉢の花

唐津市 山口 高明
姑さんの部屋の灯がまだ消えず

紀の川市 木村 徑子
マスコミに教えてもらうエコライフ

枚方市 伊達 郁夫
冬に咲く花はほっこり温かい

鳥取県 細田 裕花
正装をして運命を受け入れる

西脇市 七反田順子
ふるさとはお茶と情のてんこもり

寝屋川市 森 茜
わたくしを頼ってくれる人もいる

唐津市 井上 勝視
一年中休みをくれぬ五七五

誹風柳多留一篇研究 32

227 四ツ手駕淋しくかける定直段

増田 町駕籠、特に遊所通いの駕籠にはチツプをはずむのが普通。チツプ次第でかけ声高く疾走してくれるが、ただの決まりの値段ではさびしくのろのろと運はれる。

四ツ手がご上手に乗るとびんぼうし

宝13仁2

四ツ手がご行々の、道てねたられる

明五松2

山口 賛。景気つかず。

228 へらぼうな夫トを持って御仕合

増田 この「べらぼう」は先の十丁ウ10の句と同様に「不粹、野暮」の意。男仲間からは「べらぼう」と陰口をきかれるような亭主をもった女房は幸せ者である。

小栗 賛。無論皮肉である。

229 いやあお出だといけい子を座にしやうじ

増田 酒の席に女芸者がやって来たとき、「いやあおいでだ」と声を出して迎え入れる。

おとり子か出ルと座敷か生きて来

増田 忠彦・山口 由昭
小栗 清吾・伊吹 和男
山田 昭夫
清 博 美

224 我内へ先こしかける旅かへり

増田 長旅から帰ってくると、まずは我が家の玄関先に腰をおろして家内の無事を確かめて喜び合う。そのあとで、留守中の世話になった近所へのあいさつに回る。

旅かへりわらじのまゝ、で小半時 二礼2

とほ口へ見物のある旅かへり 四14

全員 賛。

225 ほめられる所で切れる三のいと

増田 弾く三味線が興にいつて聞き手がほめるようなところに来たところで、三の糸が切れてしまつた。

三の糸ふつり切れる声のよさ 四27

山口 賛。声も高い所で聞かせ所。

小栗 賛。三の糸が切れる程、音が高く（糸を強く張った状態）強く弾く所が、即ち聞かせ所なのだ。

226 諷をばむす子すてゝんげりにする

増田 謡講を口実に家を出て、そのまま遊所へ行く息子。「……てんげり」は「……てけり」の転で、謡曲に多い口調。

してやつた顔で出て行諷こう 明四智2

諷講おやじ四五度とくわせられ 明二義3

もつとも、こんな吉原好きもいる。

よし原で諷講とは珍らしき菊丈 宝11105
全員 賛。

山口 橘町の踊り子で相手は留守居役あたりか。

いたづらな御手だとげい子わるびれず

230 うめられぬかわり油の中で死二

増田 たぎる油で釜ゆでにされたという石川五右衛門。「埋められぬ…」というのは、戦国時代から江戸初期には行われたとされる穴晒鋸挽(体を埋めて竹鋸で首を挽く)のことでしょうか。

小栗 賛。「埋められぬ」が、ハッキリしないが……。

231 おまへもかわたしも九さと松か岡

増田 縁切寺・駆込寺などといわれた鎌倉の松岡山東慶寺の句。縁切りを求めて寺に入った女同士の話。九は十九で女の厄年。「あなたもそうですか、私も十九です。やはり年回りですね」というもの。

全頁 賛。

232 くだきやつこそあろうのにぬきみ也

増田 くだきようにことをかいて抜き身とは

…という句。この抜き身はオトコのハダカミのことであろう。例句のように、刀による脅迫まがいのくだき、をも利かせる趣向か。

ことくなる刀をぬいてせめる恋 初19

山口 賛。どちらにもとれます。

山田 賛。でも刀までは考えず。

おへきつたのをさしつけてくどく也

末32

233 古いやつうしろから来て目をふさき

増田 前の句に続いて、くだきように対する批判。後ろから手で目をふさいで誰かを当てさせる。そいつは使い古された手だ、というもの。川柳には、つめつたり簪を借りたりと「古いやつ」は多い。

山口 賛。手としては古い。

234 としやうのざいにと下女八ひつはたき

増田 ドジョウは生きたまま料理するから女は敬遠するが、そこは田舎育ちの下女。桶から跳ねたり手からすり逃げようとするのを「なまいきにドジョウの分際でと、たたきつ

ける」「ひっぱたき」は俎にたたきつたり、鍋にたたき込んだりする形容であろう。

こわそうに鯉の舁を持つツ女 初3

しんそうのざいにとひとくく、し上ヶ

全頁 賛。

235 あいちつとおか場所と八とはりこまれ

増田 野暮な男の嫌みな要求を峻拒する吉原の遊女。「あい、こは岡場所とはちつと違いんす」とアリンズことばでやりこめられる。岡場所とそりやちかいんすよしなんせ

山口 賛。河岸見世ならそうでもないでしょうが。

236 花なら花さあそひならあそびとさ

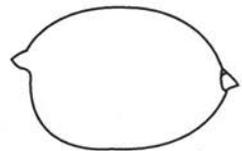
増田 遊びに出かけようとする亭主への女房のいいぐさ。「遊びなら遊びとおっしゃればいいでしょうに、花見だなどときちな口実を使わずに」。出がけよりも帰ったときの口げんかとする方がよいか。

山口 賛。会話だけを使った面白い句。話体川柳というものである。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



ク.ク

「横文字」

鈴木公弘選

横文字の意味が判らず辞書を引く
アラビヤ文字右から書くの知らなんだ
横文字はおろか母国語さえ書けず
横文字に広がってゆく子との距離
ローマ字で漢字を探す電子辞書
横文字が迷う二ホンかニッポンか
横文字をゆっくり読めばローマ字だ
横文字を孫は私に尋ねない
横文字は苦手薬も花の名も
横文字に強いキャリアの鼻柱
横文字の略語が昭和煙に巻く
日本語より英語がうまい三歳児
ブランドの横文字だけは知っている
横文字のバッグに詰める虚栄心
横文字が管制塔を支配する
葡萄酒と呼ばれて横を向くワイン

鳥取市	山口千代子
岸和田市	雪本 珠子
大阪市	板東 倫子
八尾市	生嶋ますみ
大阪市	升成 好
羽曳野市	吉村久仁雄
豊中市	吉田あずき
堺市	奥 時雄
鳥取市	永原 昌鼓
横浜市	小野句多留
三田市	堀 正和
池田市	上嶋 幸雀
佐渡市	高野 不二
羽曳野市	安芸田泰子
西子市	黒田 茂代
池田市	上山 堅坊

「横文字」

西口いわゑ選

横文字で言えばすつきりプライバシー
線無しで横文字うまくかけた頃
横文字で攻めるともろい戦中派
ハローだけ覚えて呼べばコンニチハ
横文字で秘密めいてる子の手帳
横文字の暮しの中にある日本
横文字は敵国語だと教えられ
横文字も気合でするり切り抜ける
横文字に弱い男のコップ酒
ガーデンングに合わせ横文字の表札
横文字の積荷で埋まる魚市場
メタボリックなどは知らない野菜好き
エクスキューズミーそれだけ覚え外国へ
漢字にはアルファベットにない深み
横文字が地球のネット放さない
横文字が増え老境を悩ませる

京都市	高島 啓子
西宮市	秋元 てる
富田林市	片岡千恵子
美作市	小林 妻子
海南市	堂上 泰女
シドニー	坂上のり子
和歌山市	福本 英子
西宮市	牧瀬富喜子
大阪市	鶴田 遠野
和歌山県	森下よりこ
大阪市	奥村 五月
弘前市	斉藤 荔
大阪市	古今堂蕉子
羽曳野市	永田 章司
立川市	柏野 遊花
尼崎市	春城 年代

横文字が知りたいことの邪魔をする
 横文字がすんなり入る子供部屋
 台所をキッチンと言いつ煮ころがし
 横文字の映画ぐつすり寝て帰る
 横文字で最初に書いたアイラブユー
 横文字を織り交ぜ語る国訛り
 横文字になって株価が上を向き
 ハローだけ覚えて呼べばコンニチハ
 横文字のはじまりだったババとママ
 横文字が鎖国の壁に穴開けた
 殺すぞと書いた横文字読めますか
 最高の横文字ノーマアヒロシマ
 横文字のこれから先は基地の街
 英字新聞二枚重ねて葱包む
 プレッシュヤーをさん付けにしたおばあさん
 バケーションンスペル間違えずに言える
 お祓いを受けて看板横文字に
 お土産の横文字読めず食べられず
 海を見詰めている横文字の墓標

鳥取県 平木 公子
 紀の川市 宇野 幹子
 可見市 板山まみ子
 大阪市 奥村 五月
 東かがわ市 川崎ひかり
 鳥取県 斉尾くにこ
 札幌市 小沢 淳
 美作市 小林 妻子
 海南市 三宅 保州
 枚方市 寺川 弘一
 鳥取市 土橋はるお
 大阪市 古今堂蕙子
 宇部市 平田 実男
 藤井寺市 若松 雅枝
 加東市 中村 和代
 和歌山市 居谷真理子
 堺市 土屋起世子
 堺市 矢倉 五月
 八王子市 播本 充子

和歌山市 古久保和子
 藤井寺市 高田美代子
 京都市 高島 啓子

軸吟
 こいびとに横文字使う二つ三つ

狂いそうだから横文字捨てました
 横文字に征服される大和文字
 ローマ字の駅名これは領ける
 パナソニックになって世界をかけたぐる
 KYなんて変な略語が幅利かせ
 横文字の花が床の間を飾る
 フランス語で名前をつけて高く売る
 ワルツならリード待ちますチョットだけ
 横文字の四股名そろそろ出て来そう
 料理名食材までも欧米化
 振り仮名を打った英語が通じない
 横文字に負けぬ老兵怒り肩
 横文字に気付かぬうちに慣らされる
 横文字のはじまりだったババとママ
 横文字も二月は甘いチョコレート
 横文字を更に縮めてギヤル会話
 わかったと言いつそりと辞書を引く
 横文字に残る歴史にあるロマン
 海を見詰めている横文字の墓標

鳥取市 夏目 一粹
 神戸市 山口 光久
 富田林市 古田 千華
 寝屋川市 森 茜
 堺市 羽田野洋介
 鳥取市 福西 恭子
 豊中市 水野 黒兎
 加東市 黒崎美紗子
 横濱市 金森 徳三
 尼崎市 長浜 美籠
 和歌山市 古久保和子
 唐津市 仁部 四郎
 出雲市 竹治かし
 海南市 三宅 保州
 堺市 加島 由一
 大阪狭山市 矢野 梓
 豊中市 安藤寿美子
 香芝市 大内 朝子
 八王子市 播本 充子

倉吉市 野口 節子
 藤井寺市 太田扶美代
 岐阜市 平野あずま

軸吟
 スマートに横文字で来たさようなら

始める

大石あすなる選



春へ向かって走り始めた好奇心
一本の指でパソコン始めます
まず鏡拭いて始めるメーキヤップ
何となく始めた趣味に嵌ってる
手引書と参考資料寄せはじめ
散歩など始める決意するメタボ
好きなことやり始めたら馬鹿となる
始めたら答えはあとでついて来る
新聞を読み始めると眠くなる
初めてにしては度胸が据わってる
始めたがすぐ頓挫したダイエット
身辺整理始めて矢張り仕舞い込む
結論があつて始める会議室
定年で始め虜になつた趣味
和服着て稽古始めの礼をする
酔うてはいるいつもの話出始めた
川柳を始めた頃は呆け防止
今年こそさあ始めるぞ一万歩
建て前は始めてにして見合する
始めたら物になるまでやめられん
才能がないと始めてすく気づく
六十で始めた趣味に助けられ

茂代 北朗 美千代 實 弥生子 周子 ちかし 絹子 公誠 富子 裕之 強一 妻 子 茶々 千歩 としお 蕉子 典子

ダイエットまず腹八分から始め
始めての人に解らぬ説明書
川柳を始めて脳が開花する
パソコンを始めた動機不純です
団塊の夫が家事を始めだし
もう止めたはずのタバコの火を付ける
子はなれ始める時を迷う母
始めるにあたり注意を読んでおく
会見を始める前にリハーサル
仕事場に一札をしてとりかかる
始めると周りが見えぬので困る
始めたら終りは無いと趣味がいう
始めたら邪魔と追われた台所
団塊が探し始める趣味ひとつ
ダイヤルを回し始めて気が変る

茶子 直花 時雄 シマ子 善信 房枝 悦子 正和 キヨミ 照彦 弘風 愁女 ミツ子 あずま ぶりこ 猿杓 日枝子 慕情 霜石 充子 樋口輝夫

子育てが済んで始めるポラントイア
手始めにみじん切りからさああなた
ラーメン屋始めましたと来た葉書
敷居を跨ぐことから先ずは始めよう
ふりだしで鍛え直して跳ぶつもり
定年の日から始める皿洗い
クレヨン画まずは大きな丸を描く
句読点これから思案始めます
要領をつかみ始める独楽の芯

金儲けできぬ男の腕自慢
台所妻の右腕ともなれず
小犬抱く腕を鍛える鉄アレー
腕があるから定年は恐くない
良く動く腕で感謝してやります
貧乏に耐えた細腕褒めてやる
弱そうな相手探して腕試し
細い腕むかし農家の世帯主
まだ元氣腕たて伏せを二十回
骨粗鬆症とは思えない二の腕だ
頼もしい未来が眠る腕の中
すこ腕と言われた男だが惜しい
多機能の農具だった祖父の腕
腕一本で生きた自信がボクにある
何億も稼ぐお方も腕一本
やわらかい月に誘われ腕を組む
無駄口をたたかぬ父は腕が立つ
此の腕があればと男たじろがず
草の実が家長の腕に絡みつく
単純な男の腕がすくに鳴る
一徹を通して出来た力瘤
合格の腕に抱えた漫画本

五月 黒兔 茶子 實 行 蜂朗 千代子 蝋 千代 志代 浜丘 圭一郎 哲男 扶美代 としお 鐘造 光久 重人 幹子 みのり 典子 安泰子

森山 盛桜選



腕

腕に覚えあつてむずむずしています

両腕を広げて春を待つている

腕相撲勝つたためしがありません

最後には腕より神に期待する

腕力に物を言わせる世ではない

腕つぶし強くてけんか出来ません

この人と腕組み運がつかました

腕の立つ男に人は無理を言う

自己主張少し抑えて腕を組む

楽器弾く腕しかり持たぬキリギリス

右腕と言われ便利に使われる

いつか来るひとり支える日の腕だ

とび込めば羅漢の腕のやわらかさ

先代の右腕らしい咳払い

温暖化へヒトの腕組みまだ続く

佳

腕利きになった幾度も泣いたから

クレインの腕がかかえる小宇宙

訳あつておんな一人の腕っ節

腕に差はないが二人の運不運

甲斐性のない腕で漕ぐ笹の舟

人

お借りした腕がだんだん邪魔になる

地

右腕も窓際まではついて来ぬ

天

二の腕に歳月たつぷりと溜る

軸

落とし穴見分ける腕は持っている

美智代

慕情

蕉子

ちかし

秋星

美津子

(矢)五月

銀波

裕花

(花)順子

かずお

弥生

古拙

四郎

富子

一粋

小雪

朝子

准一

霜石

充子

正和

徳山みつこ

ゴルフ

村上 玄也選



春の音芽萌え出すゴルフ場

恙なく百が切れないゴルフ歴

中流の意識で担いでるクラブ

上役のゴルフ理論で二日酔い

ゴルフ場今日は飛行機留う話

接待のゴルフに黒い下心

七十の汗生き甲斐になるゴルフ

不平不満スカッと飛ばすドライパー

ストレスをコースの芝にくれて来る

ゴルフ場だけ華やかな過疎の村

植山行きの途中でクラブ振っている

ふりまわすクラブに老いが容赦せず

明日コンペ敵は膝からせめて来る

子は塾へ妻はカルチャー俺ゴルフ

ゴルフならしんどの言わぬお父さん

またゴルフですかと言いたそうな妻

プロ並みはファッションだけのティアアップ

朝一のショットが分けた明と暗

真っ直ぐに飛ばぬ我流の癖がでる

万歩計つけてコースを右ひだり

グリーンまで人影見えぬ四人組

雷にナイスショットもほつとかれ

メンパーらしいコースの草を抜いている

芝を読む真似は出来ても入らない

ゴルフツアー芝生いためただけの旅

スコアより芝生のみどり空の青

ゴルフ下手しゃべるゴルフはうまくなり

ゴルフアは少し上手いと小煩い

快復期ゴルフの真似を叱られる

目的は十九番というゴルフ

人柄がゴルフボールに乗り移る

ゴルフ向け昨日手形が割れました

アイアンを一本載せてある櫃

ゴルフなど知らずスターの後を継ぐ

ギヤラリーを沸かすスターの名ショット

スイングのおへそを狙うカメラアイ

緊張の一打で稼ぐ億の金

佳

チコレット賭けて友情ひび割れる

この狭い国にひろいゴルフ場

ラウンドのマナーでわかるゴルフ歴

散骨はホームコースとしたためる

日曜もパパはゴルフという仕事

人

仕事では見せぬ緻密なゴルフする

地

キャディだけ汗をかいているゴルフ場

天

腕のこと触れずにクラブまた替える

軸

傘持つとクラブ構える癖が出る

靖鬼

幸雀

日枝子

(矢)五月

一風

時雄

銀波

正和

一人

重人

扶美代

裕之

庸佑

政勝

朝子

公誠

霜石

百合

充子

みつこ

明子

不二

富田美義

初歩教室

題 — それから

三宅 保州

『旅人』の自序

麻生路郎師の句集『旅人』の自序は、後世に遺る名文として有名ですが、ここに改めて紹介させていただきます。

「エスベラントのために一生を捧げたザメ
ンホフ博士は偉かった。ロシヤ文学の英訳に
一生を捧げたマガレット夫人は偉かった。く
そ虫の研究に一生を捧げたアンリー・ファブ
ルは偉かった。何れも自分の夢を実現させた
人達である。

そして川柳に一生を捧げた私は？私は云う
べき言葉を知らない。

川柳の社会化運動と、一冊のこの句集。

私にも多くの夢がある。私の一生はまだピ
リオドを打たれていない。せめてそれを力ぐ
さに、歩き続けよう。」

けだし、これほど胸を打たれる名文は数少
ないことでしょう。そして、あなたは川柳に
一生を捧げるかと問われると、内心忤怩たる

思いの方が多いのではないのでしょうか。

【『それから』の句意が分かり難い句】

一見すると佳句のようですが、「それから」
が何のそれからか分かり難いため、句意全体
がばやけ勝ちの句です。「それから」の前後
の表現や「それから」に代わる具象の表現で
補いたいものです。後記の佳句や推せん句を
参考にして下さい。

それからは自力で生きる他になし 秋 星

それからを生きる力をもらう風 利 子

それからはお任せします想像に キヨミ

それからが知りたく古書を探す日々 さだき

それからの噂を拾い胸に抱く 乃りこ

それからは恋に引つ込み思案する りこ

それからは女の涙武器にする 和 代

それからの事は語らぬカスミ草 イセ

それからがあると信じて床につく 夢

それからはリズムに乗って米を研ぐ 健 柳

それからは半音のずれ消えぬまま すみ子

【添削・批評句】

原 それからがこれからになる二人旅 大 朔

添 これからになる具体的に。

原 それからがこれからになる時刻表

添 それからを云わず語らず秘めておく 冷 子

添 別れてもあなたを胸に秘めておく

原 出産をしてから母の顔となる 絹 子

添 自然のことに近い感がしませんか。

添 もう母の顔になつてる岩田帯 洋 子

添 禁酒禁煙守っています退院後 瑛 子

原 それからね一つお願ひ月旅行

添 世界一周したらお次は月旅行

原 当確も人気先行その先は 義 章

添 人気だけで務まりますか当選後

原 それからと余談のように本音聞く 志 延

添 それからと余談のように本音見せ

原 ビビボのそれから後は眠れない 勇 治

添 救急車近づいてから眠れない

原 夕ごはんそれから長い飲兵衛や 周 子

添 飲み出すとなかなか終わらない夕餉

原 それからは非常袋を枕元 治 子

添 枕元に非常袋の地震以後

原 褒められた煮物それから飽かれる 幸

添 今日もまた煮物煮物を褒めてから

原 友と会いそれから昔語り合おう 稔

添 旧友と会つて昔に花が咲く

原 飲み過ぎて記憶ブツンそれからは 高 弥 生

添 飲み過ぎてからの記憶はありません

原 お酒好きそれから長い愚痴こぼす 智加恵

添 酔うほどに愚痴りだしたら終わらない

原 母が逝きそれから私強く成る 那珂子

添母逝つてからは自立をした私
 原 欲捨てそれから友が多くでき (吉) 節 子
 添 欲捨ててからは友だち増えました
 原 聞き上手こころ優しく花咲かす 賢 治
 添 それからとこころ優しい聞き上手
 原 昔話それからそれと聞きたがる 光 子
 添 昔話それから先はまた明日
 原 それからと次を促す話し好き 孝 明
 添 それからと次を促す聞き上手
 原 一人暮らし何時かそれからどうなるか 綾 乃
 添 それからのことを思っている独り
 原 リハビリの努力それからほつ一步 ミヨノ
 添 リハビリの一步それから歩が進む
 原 加齢とはそれからそれと気が変わる かずみ
 添 加齢とはそれからそれと気にかかる
 原 旅かばんそれからこれもと痛み止め (備) 節 子
 添 それからとあれこれ詰める旅鞆
 原 民放のそれから時コマシヤル 松 風
 添 それからというときコマシヤルになる
 原 置き忘れた財布は首に掛けて持つ こずえ
 添 置き忘れた財布それから首に掛け
 原 それからと座り直され奥歯かむ 宏 造
 添 それからと座り直され身構える
 原 友の消息それから先が気にかかる 美智代
 添 転居先不明の先が気にかかる
 【少し工夫すると佳くなる句】

原 喪があげるそれから毬はよく弾む 幹 子
 添 喪が明けたときから毬はよく弾む
 原 それからを覚えていない宴の締め 堅 坊
 添 それからを覚えていない宴の果て
 原 勤め上げそれから先はお人柄 裕 之
 添 勤め上げそれから先は自分流
 原 相槌がよくそれから止まらない 千代子
 添 相槌を打つとそれから止まらない
 原 それからと続く話に裏がある 弘 泰
 添 それからと誘う話に裏がある
 原 握手してそれからファンになりました 房 江
 添 握手してくれてファンになりました
 原 それからの話子は愉快に作る 亜希子
 添 それからの続き創作する子ども
 原 それからが何度も妻の取り調べ かずお
 添 それからと終わらぬ妻の取り調べ
 原 先ず化けてそれから行手考える みち代
 添 先ず化けてから行く先を考える
 原 君に逢うそれからずつと君が好き 柳 步
 添 君に逢うたびにだんだん好きになり
 原 二手三手それから先が読み辛い 昇
 添 三手先ぐらいまでなら読めるけど
 原 発火しそれから恋の落とし穴 わ こ
 添 引火してそれから恋の落とし穴
 原 誓詞よむ二人それから修羅の旅 信 子
 【二人】はわかつてるので不用では。

添 誓詞読み終えて明日から修羅の旅
 原 それからの話聞いても味気なし たん吉
 【話】を「謝罪」とかにすると具体的。

【佳句】

使用済みそれからエコを考える 宇乃子
 それからはパソコンよりも年の功 起世子
 腹へこで食べたおにぎり五つ星 實
 手術終えそれから先を言わぬ医者 孔 一
 手輪にそれから先を教えられ 清
 それからは株屋の前は素通りし としお
 それからは台本にない株下落 武
 それからの噂がほしい好きな人 すみれ
 箒当ててから言うてんか使い道 像 山
 それからも月の兎をさがしてる 徑 子
 それからのことは触れないことにする 次 根
 【今月の推せん句】
 髪を切りそれから春を謳歌する 森田 麗
 ポジティブ(積極的)な生き方に共鳴。
 それからの流れを変えた咳ひとつ 福井菜摘
 大物か、タイミンクの良さか。着想が良い。
 年金のそれから探す蝸牛 高木道子
 時事吟の域を超えた心象性。蝸牛の擬人化。
 【私の句】
 それからは命二つの岩田帯
 (登載されたの方は役員が添削して返送します。)

秀句鑑賞

同人吟 福本英子

— 3月号から

二月中旬秀句鑑賞の束が郵送されてまいりました。覚悟の上ですがゲラ刷りの句を何度も読み返している中、愈々選に迷ってしまい困っている時、読売新聞のコラム欄に、作家サマセット・モームがある時、生涯最高の感激はと聞かれて「戦場の兵士からあなたの小説を一度も辞書の世話にならずに読んだ」と手紙をもらった時、とありました。

故西尾葉主幹にも、辞書を開きながら川柳を読む人はいないから、解りやすい句を作るようにと教えて戴きました。

それで決心がつかしました。背伸びせず自分の解る句を選ぶことに。素晴らしい句を落していますがお許しください。

身に覚えあるから情け湧いてくる

伊達郁夫

少しでも自分に覚えがあると人情として、ほっておけないのでしょうか。人間はみな本性は優しく出来ているそうですから、情けは人の為ならず。

人形になるほど女甘くない

宮尾 みのり

今はイケメンの人形みたいな男性がよく持てるようで、女性と入れ替わりました。どうぞ女を甘くみないで、芯は強いのです。

ダイエツトできたら皺が増えてきた

村上玄也

女の方の句かと思いました。あちこちでよく耳にする話で、その後皺をとるのにまたお金がかかるらしいです。皺を見たくないために白内障の手術を止めた人が近所にいます。綺麗に年齢をとるのも大変ですね。

国境より厳しい隣りとの界

平田実男

国境とは大きい話と思つたら中、下句で身近かになってほっと一安心。よくあることで暮してゆくには一番大事なことです。日本に生まれて国境の心配が他国より少ないのが嬉しいです。遠くの親類より近くの他人と言いますから、お隣りとは譲りあいをして仲良くおつきあい出来ますように。

脳天を突き抜けてゆく唐辛子

大橋 政良

唐辛子の句を見ると故川上富湖さんの「素

晴しい友だ七色唐辛子」をすぐ思い出されま
す。でもこの句はずばりと単独で脳を刺激するほど効いたのですね。雪の深い砂川でピリツツとしないと生活してゆけないかも。政良さん男性らしい句をありがとございました。

にんげんを大の字にする青量

高瀬 霜石

この青量は嬉しくなるほどの広さ、また広くてもカーベットの部屋で大の字になりたくないし。旅館の大広間では寝転ぶ気にもなれず、また青量の匂いも手伝って、適当な広さが人間を大の字にさせる何かあるのでしょうか。ほっとさせる嬉しい句に出会いました。

決断をしてから歩幅広くなり

菌田 猿杓

男らしく颯爽と風を切って歩く猿杓さん、考えごとなどしてぼそぼそ歩く姿は似合いません。歩幅が広がるだけで胸を張り世間も広く見渡せます。春に向かつてどうぞ。

佗助のさしてたことをせすに散る

高島 啓子

佗助の一輪あるだけで、床の間の品が漂ってきます。京都の方らしい綺麗な好きな句。

願いごと五つ頼んで五円投げ

古今堂 蕉子

世知辛い世になったと神様も苦笑いしそ

な句。栞先生がいられたら「もつと張り込みなはれ」と叱られるかも。でも若い人らしい句です。「ITの力は今やモンスター」と並べられてるのが愉快です。

都市砂漠孤独な人が多過ぎる

板東 倫子

最近のニュースは都会の物騒なことや、孤独死など余り美しいことを耳にしません。本当に砂漠のように潤いが無くなってしまいました。過疎になっても田舎の温かさ、助けあいを見習いたいものですね。

証明書なしでシニアの券くれる

奥村 五月

嬉しいのか淋しいのか心細い思いを私もしました。まあ得をしたんだと思つて前向きにまいりましょう。

介護でも揉めて相続でも揉める

加藤 茶人

相続で揉めたり兄弟仲違ひは昔から聞いていましたが、最近はその上介護まで付いてくるとは。長生きするのも、貯めるのもむつかしい時代になってきました。遣い切つてコロリと逝けたら最高ですが困つたものです。

行司だけ日本人の一番

水野 黒兔

この句は川柳にかかわつていない人もみな

苦笑いしてくれる楽しい句になりました。何も申し上げることはありません。

休んだが会社も部下も恙なし

酒井 一壺

私ことで申し訳ありませんが、この句でじんと胸を打たれました。主人は地方銀行で堅物の三本指へ入るほど。病氣も何も休まず結局は過労死になりました。「君が休んでも銀行は回るよ」と友人からよく聞いた言葉です。何も彼も後の祭りになりました。

大地に続く玄関先を掃いている

政岡 日枝子

家の玄関が大地に続いているなんて、思つてもいけませんでした。気付かせていただいたありがとうございます。これからの余生心を開いて玄関からお隣りまで掃いてゆきます。

楯山が見えているのに欲ばらぬ

佐伯 やえ

いやなことみんな忘れる安来節
楯山と安来節、全然反対のように思えますが、双方の内容の明るさに、鳥取、出雲地方の温かさの伝わる嬉しい句をありがとうございます。

諭吉殿も一葉さんも出て行った

小林 妻子

新聞の時事吟ファンもサラ川のファンもこ

の句には納得されるでしょう。解りやすくくてすぐりもあり、何故捕まえつかないの、と言いたくなりました。妻子さんの句はいつも楽しませてくれます。

「亭主の顔見てみたい参観日

坂本 蜂朗

参観日の句をずらりと並べられた蜂朗さん、教室の様子が手に取るように伝わってきます。父兄のがやがやも、先生のでんでこ舞いもそれを速くから観察されて川柳にするとは。

後からボイコットされませんように。

三枚に下ろされてなお男なり

太田 昭

近頃めずらしい男はん？それとも空威張りと一瞬考えましたが、昔魚屋さんが腐つても鯛や鯛やと声張り上げていたのを思い出しました。戦時中の懐かしい思い出です。有難う。そして気になった句を最後に。

ごく稀に神が下さる甘い水

矢倉 五月

ハンドルを切り間違つて現在地

柿花 和夫

歳月を待たせておいて飲んで

安藤 寿美子

秀句鑑賞

—3月号から

春木圭一郎

驚きが少しずつ減り老いてゆく

荒巻 夢

若さとは向上しようという心があるかどうかで決まるという。感動したり驚いたりすることが減ることのないよう、気力と情熱を持続したいものである。

変調へ妻の間診受けている

辻内 次根

体がだるかったり頭が重かったりすると、妻があれこれと気を遣ってくれる。食欲は？睡眠は？まるで名医のよう、てきばきと処理してくれて助かる。

老いの手に尺八握りボランティア

田邊 浩三

福祉施設への音楽演奏などによる慰問は、高齢者や子どもたちを癒やしている。自分自身も楽しめ、交友の輪が広がる尺八を続け何でも演奏できるよう頑張りたいものだ。

カロリーを取った分だけ漕ぐペダル

糞谷 和郎

自転車や歩行者は健康にいい。少々の距離ならできるだけ車に乗らない。ガソリンも高くなっており一石二鳥である。

腹の虫酒を飲ませて治ませ

岡村 孝明

天笑主幹の句に「腹の虫治まるころは酔いつづれ」がある。酒はほどほどが肝要。

笑ったら肩凝り少し楽になり

原田 すみ子

笑う門には福来るである。たいがいのことは笑うことで霧散する。子どもらの笑顔が増えるよう環境を整えてやりたい。

傷口へいつも他人は触れたがる

大久保 伸子

特に過去の古傷へ触れてくる。他人の不幸は蜜の味と言うが、少し親しくなっただけに聞いてくる。ほっておいてほしい。

断つて二度目の誘い来ぬ誤算

寺川 はじむ

誘いがあった。断れば頼みに来ると思っていたのに次は来ない。挑戦しなかったのに。

必要とされる喜び腰が伸び

小栢 こずえ

必要でない人は一人もいません。

生きているだけで倅せ今日の春

広瀬 房江

今日もそれなりにやりたいことをやりながら生きている。存在だけで価値がある。夢や希望に向かって進めば言う事なしである。

つまずいた石には悪意ないのです

山田 侃太

その石は前からそこにあった。その石につまずいたのはあくまでもそこを通った人の責任。でも意外と石に文句を言う人が多い。

かじられた脛から足が脆くなる

吉田 陽子

脛をかじり大きくなった私は、今かじられている。それを喜んでいる節もある。少々脆くなっても大きく成長した姿が見たい。

自分好きになれたらなんと素晴らしい

斉尾 くにこ

自分が好きになれない私を誰が好きになるだろう。自分が見ても素敵な自分になれるよう努力したい。

ピエロ役演じ続けて癖になる

小沢 淳

始めはピエロ役を演じていたつもりで、いつか主役と思っていたのだが、いざその段になったらすっかり道化師役が板についてしまっていた。日頃から自分を鍛えておきたい。

原稿募集

—ペットものがたり—

特集原稿を募ります。
 人の心を和ませてくれるペット。そのペットにまつわる話や思い出など、何でも結構です。同人の御応募をお待ちしています。
 四百字詰め原稿用紙一枚半(二百字×八百字) 本社事務所宛
 タイトルは別につけて下さい。
 締切り六月十五日、発表九月号予定
 但、原稿の採否、添削は編集部に一任願います。

編集部

第19回 時の川柳交換川柳大会

日時 5月17日(土)10時30分開場、締切12時
 会場 兵庫県民会館9Fホール
 (JR.阪神.元町駅10分) TEL.078-321-2131
 会費 2,000円 (記念品・発表誌呈)

— 講演 —
 「何故俳句より川柳を選んだか」

— 川柳の可能性 —

中日川柳会相談役 浜口 剛史 氏
 — 兼題 — 各題2句 席題なし

「置 く」 辻 葉 選

「音 く」 土田 欣之 選

「告 ぐ」 小島 蘭幸 選

「葉 ぐ」 恒弘 衛山 選

「久し振り」 本田 智彦 選

「街 詠」 赤井 花城 選

「雑 詠」 平山 繁夫 選

— 特別課題 — 1句

「大きい」 大森 一甲 選

特別課題の入選句には景品進呈。欠席投句拝辞知事、市長賞他多数(合点方式)

懇親宴 5,000円 同館10F 当日受付
 平成19年度 時の川柳作家賞、第28回ときせん賞入賞者の表彰を行います。

主催 時の川柳社

後援 兵庫県、神戸市、神戸市教育委員会他

川柳たましま社

創立50周年記念大会

とき 5月18日(日)開会13時、締切11時半

ところ 浅口市民会館金光 TEL 0865-42-2845

参加費 2000円(昼食・発表誌呈)

御祝儀拝辞 投句拝辞

兼題と選者(各題2句)

「咲 く」 薨 帆子(三原市)

「そして」 西川けんじ(岡山市)

「指 」 田中 峰代(京都市)

「食 」 新家 完司(鳥取県)

「風 」 大家 風太(久米南町)

「姫 」 森中恵美子(大阪府)

当日席題 (出席1番目が出題)

問い合わせ先 〒719-0101 浅口市金光町

占見新田1325-10 北川 拓治

TEL.0865-42-6039

第9回井笠川柳会笠岡大会

(第25回薬大会)

とき 5月24日(土) 締切11時半 開会13時

ところ 笠岡市保険センター(ギャラクシーホール)

TEL.0865-62-5701 笠岡駅から徒歩18分

題と選者 赤井 花城

第1部 「不安」 矢沢 和女 共選

(事前投句・2句) 高岡 健太

長谷川紫光

第2部 「消」 小島 蘭幸 共選

(当日投句・2句) 久本にい地

特別課題(1句)当日発表 高木 勇三 選

第1部(事前投句・年間賞対象)指定の用紙又は

便箋に住所氏名(ふりがな)電話、柳社を明記

会費2000円、(欠席投句1000円共)4月30日(必着)

投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68

井笠川柳会宛 TEL FAX 0865-62-6200

賞品・賞状 多数(句碑贈呈2名)除幕式5月24日11時

主催 井笠川柳会 後援 岡山県他

本社三月句会

三月七日(金)午後一時

アウイーナ大阪

春を思わせた昨日ほどではないが、今日も暖かい。99名の参加を得て三月句会は定刻どおり開催された。

お話は川柳塔同人藤井則彦氏。

前回の団塊の世代問題につづき、今回も国民が今、大いに関心を持っている裁判員制度の事。遠い話と思っていた十月が目前である。データによると、裁判員になる確率は大阪がトップで、全国平均有権者四千六百六十人に一人という割合が、大阪では二千五百六十人に一人という群を抜いた比率である。

裁判員制度の趣旨、必要性、またその選び方、資格、仕事の内容と仕組み、はたまた任命を受けたが辞退したい等の対応の仕方、辞退できる主なケース、予想される問題点等々。

難しいテーマをレジュメに添って分かりやすく解説、明快な話術に引き込まれて四十分はあつという間に過ぎた。(扶美代記)

初出席の四名 尼崎市 児玉歌子さん

羽曳野市 吉村久仁雄氏
和歌山市 たむらあきこさん
加西市 金川宣子さん
月間賞は大阪市の谷口義さんに輝く。
(司会)美籠・昭
(協取り)蕨子・月子・久千代
(受付)歳子・宏子 (清記)直樹

席題「円満」 黒田 能子選

円満な輪の中にある五七五
わいわいと鍋円満を湯気にする
福福しい顔が引き立つ不精髭
円満にみられて得なえびす顔
円満そうな顔をしている鬼の面
円満になつてあの世が近くなる
円満といわれる奥に住む般若
円満な金平糖などつまらない
円満な顔で軒は日本一
円満の秘訣は妻に逆らわぬ
よそさまの為に見せとくペアルック
円満に今日を生きてる斬られ役
病んで知る円満である大切さ
円満に別れて春の蝶になる
円満に別れ老春謳歌する
奥様の鼻歌流れ今日も無事
円満と不満を往き来してる魔女
円満と言うが単なるお人好し

我が娘には親の姿を見せておく
円満に見える眼鏡をかけている
円満な暮しへ水を差しにくる
円満なご一家でしたのにまさか
おたがいの短所を知つて丸くいる
円満なお顔に成つて生き仏
円満の秘訣へ僕が折れている
円満の秘訣聞き役に徹する
円満に許す限度を守つてる
円満に見せて役者は裏で泣く
円満に済まぬ日もあり車椅子
円満にするほかはない観覧車
円満と思われがちな丸い顔
円満に生きた証の笑い皺

佳
桃の花やさしい娘になりました
あれもこれも妻が正しい我が家です
家族円満すぎて娘が嫁がない
団欒の茶の間に父の顔がない
柔らかいボール投げ合う夫婦仲

人
カロリゼロの会話で満ちている夫婦
ゴメンネと言つたらゴメンネが返る
天
円満に流れて石も丸くなる
軸
円満そうなカーテンの内ら側

順子
好
日の出
昭
玄也
哲男
理恵
奮水
千里
蛙城
希久子
れんげ
朱夏
房子
房代
森子
玄也

宣子
扶美代
房子
天笑
千里
朝子
朝子
富美子
里江
東吉
シマ子
保州
美籠
楓楽
美籠

扶美代
弘風
楓楽
幸雀
洋
富子
千代
美籠

封を切るワツと貴方の風が来る 倅子

佳

思いの丈を二十五グラム書く封書 保州
憧れは憧れのまま閉じ込める 喜八郎

泣き虫の男同封致し出す 義

封切るとボクが飛び出す仕掛けです 保州

封筒の中は溜息だけだった 扶美代

人

封を切る少し手前にある動悸 柳弘

地

茶封筒で届いたこれっきりの白詞 森子

天

ひとひらの春を同封してかしく 朱夏

軸

封を切る男難女難の帯の位置

兼題「誘う」

池

森子選

誘うなら今だと梅の花香る 瑠美子

鬼も仏も誘って坐る難まつり 一風

青い実を蝕む出会い系サイト 淳司

往復葉書春は楽しいことばかり 和子

多数派が手の鳴る方に雪崩れこむ 葉子

梅の香が小鳥を誘う頃に逢い 正

頭数足らん時だけ呼んでくれ (久) 千代

ハンカチを落として見ようこの辺り 蛙城

誘われて微妙に揺れるヤジロベエ 楓楽

誘い水知らんふりして乗ってみる 雅明

念入りに説明したら断われ (矢) 五月

疑似餌だと知らぬ振りして誘われる 麗

美女からの誘いに罫を覚悟する 光久

ウインクだけで錯覚するのは男 美龍

あいまいにチャンス半身で誘ってる 修

二度まではノーと言ってる自尊心 賢子

胸に棲む悪魔が誘う独り言 集一

みそきしてお誘いお待ちしています (志) 千代

花びらの軽さで風に誘われる 希久子

魔法からの誘いは地獄行きだった 光久

このころはよく葬式に誘われる 天笑

お誘いには応じ兼ねます閻魔様 鐘造

核心をすばり衝かれてから誘う あきこ

ひげ剃って誘い待つてる昼の月 郁夫

男を誘うバラは幻かも知れぬ 洋

濾過された風がわたしを誘い出す 篤子

やすやすと誘いにのらぬ花の芯 賢子

断われぬようにしてから誘われる 准一

春風が誘う埋めたはずの恋 深雪

異次元へわたしを誘う青いバラ 朱夏

手招いてくるのがうちの旦那さま (久) 千代

今が匂引く手あまたという夕陽 アキ

佳

愛妻家と聞いて誘ってみたくなる 啓子

バイオリンが誘う祖母への腹想曲 奮水

壊したくないので誘わないでいる 時雄

対岸で誘う女の有りつ丈 歌子

お誘いがあれば銀河の涯までも 天笑

人

真剣に誘うと愛が前を向く 寿子

地

火だるまになる誘いだど知っている 楓楽

天

真正面に座り魂を誘う アキ

軸

誘うのが下手で影法師になった

兼題「ビデオ」

西口 いわゑ選

阪神の勝ったビデオは飲みながら 庸佑

横綱が負けたビデオがおもしろい 螢

人生を巻き戻せたらふと思う 房枝

どげんかせんとビデオゲームに潰される 光久

懐かしいビデオオキラキラしてた頃 能子

ビデオ見てまた感動の小津映画 好

私のビデオデッキにある宇宙 富美子

ビデオにある猫背のパパが私らし シマ子

ビデオだけ家族の時間止まってる 明子

しおらしい妻の昔を見るビデオ 集一

寅さんのビデオが続くバスツアー 一風

催促のできぬビデオが戻らない 准一

ビデオ廻して時々母に逢っている 寿子

青い瞳の嫁カタコトのビデオレター 寿美

ビデオには甘いわたしと彼がいる 葉子

八ミリがビデオになっていまデイスク 滋郎

ふさふさの髪をビデオで懐かしむ 直樹
 パーシロードビデオの父はコント見せ たもつ
 パパ何故かビデオの箱に鍵をかけ 見清
 あなたと見る品格欠けているビデオ あきこ
 泣きそうな顔ビデオから飛び出した 月子
 証拠ならビデオにあると妻の乱 直樹
 六キロのビデオ担いで子を追った 天笑
 ビデオから飛び出してくる亡母よ 森子
 アツアツのビデオ残してもう離婚 歌子
 運動会父さん走るパラッツ 欣子
 命のリレービデオがつなぐ四世代 希久子
 料理ビデオ芥子たつぶり塗っておく 義子
 絶対にセーフだビデオ見る限り 喜八郎
 寅さんもひばりも生きているビデオ 寿美
 ビデオあり相思相愛若くいる れんげ
 威勢よく勝ったビデオばかり見せ 蕉子
 つべこべへ産湯ビデオを見せられる 蛙城

ビデオ漬け人と対話がしたくなり 好
 春のビデオ薔薇の吐息が聞こえそう 希久子
 ビデオ見て分かった僕の笑い方 則彦
 ビデオカメラも男も軽い方がよい 楓楽
 亡父の拳ビデオの中で生きている 光久

人
 風の子はビデオゲームで冬籠り 朝子
 生い立ちを辿るビデオに雨が降る 朱夏

天
 いい時をビデオに収め散るつもり 順子
 軸 ビデオではとつても仲のいい夫婦 いわゑ

兼題「羽化」 河内 天笑選

まだ羽化をしたてのような若い知事 保州
 カルチャーで思わぬ才能開花する 舞夢
 夏休み終えて羽化する少年期 惠子
 直ぐに羽根生える私の論吉さん 洋
 成虫になる年齢が論議され 昭
 パラサイト居心地よくて羽化出来ず 靖博
 羽化をする命のドラマ凝視する 賢子
 しばらくは空気読んでる蟬の羽化 (志) 千代
 少年の眼裏にあるヤゴの羽化 扶美代
 羽化できずマザコンのままひきこもる 喜子
 羽化できぬニートが群れる寒い街 准一
 つぎつぎに羽化して夫婦二人きり 明子
 うつすらとお化粧をして子の巣立ち 尚士
 還暦に二度目の羽化と飛びはねる 遠野
 羽化した娘ハツとするほど美しい 賢子
 人の子は羽化してからが手にあまる シマ子
 羽化をするまでの話はタブーです 哲男
 春ですな羽化の背広が街走る 一歩
 姿見に少女は羽化の身づくろい 好
 子の電話羽化したみたいいい歯切れ 一風
 羽化をする一番電車来る前に 和子

覗いたらあかん私も羽化さなか 洋
 ワンルームマンションも決め春や春 (矢) 五月
 お静かに妻から角が伸びてくる 喜八郎
 ひなあられさなぎで終る恋のころ 宏子
 眉細く描いて変身できあがる 喜八郎
 いつの間に羽化してたのか女の子 俣子
 恋のノック受けて少女は羽化をする 富子
 羽化をして見事な母になりました (志) 千代
 離婚印捺しておんなは羽化をする 楓楽
 離婚した途端に女蝶になる 集一
 賑やかに羽化を促すドラマ・ソロ 朱夏
 生意気な羽化だ挑戦状を抱く 歌子

佳
 羽化の苦しみかも知れぬ反抗期 保州
 羽化をする前にたつぶり食べておく 啓子
 遅い羽化まだ恋人がみつからぬ 月子
 恋が今羽化をはじめたところだ いわゑ
 若くいるころの羽化を繰り返す 朝子

人
 羽化をしてうねりに乗って生きて行く 順子

地
 美しくあざむく羽化を待つ少女 富子

天
 大阪で羽化して大阪弁使う 谷口 義
 揚羽羽化ええ生涯であるように 軸

おどろおどろ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

米子住吉川柳会(前月分) 渡辺多美子報

気を抜くと砂に足許すくわれる
 夢一つまた一つ捨てただ元氣
 美しい嘘かもねずみおめでとう
 千とせ鮎一生素直ほそながく
 亡父宛に喪中葉書が届けられ
 温泉のボカボカ抱いて早寝する
 器用な人涙でねずみ書く雪舟
 画数の多い候補はダメと母
 しあわせを護摩にこめられ燃え上がる

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

日枝子 正二 ふみ 欣子 多美子 すみえ 雪江 公一 登実枝

いつか子の世話になる荷を軽くする
 世話好きな人でまっすぐ歩けない
 長年の夫婦にあつたかくれんぼ
 かくれんぼ見つけて欲しい人が居る
 擦れ違いそんな夫婦のかくれんぼ
 かくれんぼ僕がどこにも見当らぬ
 大手術私の個性かくれんぼ
 あなたの名頭の奥でかくれんぼ
 かくれんぼロダンの振りも疲れるわ
 酸欠になって真相語り出す
 ガラクタも自分史語り捨てられぬ
 苦勞など語らぬ人の聞き上手
 昔むかしを聞いたあの日の母の膝
 ひと言も語らぬ人がボスらしい
 お宝の絵本昔を語り出す
 アハハハ何も喋れず幕降りる
 八月を語れば濡れる昭和の絵
 脱皮する子にも親にもあるスリル
 いくつものスリルを越えた今日の風
 陽炎を追ってスリルの橋渡る
 テレビゲームスリルが風化する怖さ
 導火線握りリンゴの木の下へ
 生きている限りは続くサスペンス

松露川柳会

小西

雄々報

登実代 宏夫 美花 昇 次根 桂香 瑛子 朱夏 菜摘 信子 イセ 当代 准一 章子 賀代子 孝子 碧 町子 幹子 純子 和子 保州

悪ないことを賀状のねずみ告げ
 ねずみ年なにか良いこと期待する
 書初めをする気になった久し振り
 初売りへ行列の先福袋
 お年玉やる子も減って淋しがり
 初日浴び生気もらいりフレッツシュ
 鏡開き甘いお汁粉初稽古
 元旦の目覚め今年の初背伸び
 正月の抱負語らず胸のうち
 注連のある内は気持もお正月
 若水も恵方も知らぬ子と同居
 年頃の晴着まぶしい初詣で

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

雅子 三千代 鈴枝 弘子 久子 和代 公美枝 智恵子 信雄 静江 豊枝 雄々

三拍子揃った女が浮いている
 支え合い歩幅揃えて行く余生
 大物が三人揃い進まない
 割り勘と聞いたら箸が止まらない
 急がんでよろし夫婦の遍路道
 着ぶくれて炬燵に入る原油高
 死ぬときも一緒に誓い持つ世帯
 清濁を併せて飲んだ人の幅
 一緒に茨の山も越えられる
 銭湯の帰り待たされ湯冷めする
 心なしか夕日ストンと落ちてくる
 年金法初手から無理と民の声
 ふと声を掛ける用事はないけれど

柳弘 三重子

本当に怒った父の怖い顔
車内放送聞こえぬおぼはんの声で
白票の声なき声を聞き分けよ

岸和田川柳会 土橋 房枝報

永遠のヒーローだった彼も古稀
永遠に不老不死ならどうしよう
永遠に続くものなどありえない
句生むたび永遠なれといとおしむ
菜の花が琵琶湖の冬を追い越した
追越され尻尾振り振りついて行く
親を越す学歴の子がなぜニート
駅伝の選手勇姿の競い合い
寒稔古快活な声凜として
快活な妻に無口な夫添い
快活な子の帰り道祈る無事
快活を心がけたら日日楽し
快活へ大阪のおばちゃん集め
快活な子等を見守る通学路
快活な娘もしとやかな七五三
快活な男しんみり母のこと
快活な金魚掬わぬことにする
数珠入りに臍繰りそつとキープする
キープしたつもり肉へ他人の箸
キープした店も忘れる梯子酒
私がキープしたのを飲まないで
たつぷりとキープしているメタボ腹

太郎 愛論
シマ子
ふみよ
笑司
香代
蛙城
義泰
俊昭
和美
浅子
ゆい
淳風
幸子
寿海
たもつ
弘子
房枝
ダン吉
東吉
泉滴
昭
守
榎代
洋

愛終りキープのボトル独り飲む
帰敬式終えて極楽キープする

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

帰りたい何時か来た道ひとりぼち
お互いにぼちぼち惚けた受け答え
豊かではないけど二人の椅子があり
見たくないものを見た日の眼を洗う
竹林へ春告げている陽のさして
ぼちぼちと行こう残りの当りくじ
貰うはずの遺産があったと言う話
戦陣訓歴史は古くなりました
悔いのない生きざま歴史は何と見る

川柳ふうもん吟社 夏目 一粋報

こすたれの愛は小出しにして与え
名門が鼻につきます後ろ指
越える山あつて元気が湧いてくる
ズタズタの鎧で妻と子を守る
こすたれが銚子しほりに席回る
こすたれに飼われた猫がゴミあさる
三日月の心ようやく丸くなり
ズタズタに男を切った赤い爪
喜寿を迎えギアはスローに切り替えて
こすたれがときどき死んだふりをする
自衛隊まさかUFO待ってるの
まさかの時に使う金たどくれた亡母

珠子 仁緑
惠美子
かつ子
好栄
ちよえ
伸子
聖子
はるみ
博利
清泉
洋々
孝男
一京
無限
善夫
美雪
春男
諏訪男
清帆
一瑠
金祥
茂登子

佳句地十選 (3月号から)

小林 妻子

土に生き土の言葉がわかる父
請求書束になつたら恐ろしい
ちぎれ雲怪しいなどと思つまい
椿の幹とところどころにテーピング
勝ち組も負け組もなし蟻の列
欲得に走る暖簾が揺れている
ど演歌のリズムでわたし丸洗い
かまぎりの祈るかたちに干酒ひる
笑うしかないほろくそに言われたら
拜んでも戦に負けたではないか

ズタズタに夢を砕いたレントゲン
春近し隣家の娘嫁ぎそう
裁判員まさか私が選ばれる
線香を二本に折り一つ立て
飯粒も拾わぬ子等にくる報い
こすたれじやないぞ一粒まで食べる
人を恋う温もりだけは持っている
選をする心臓がもうズタズタだ
今朝もまたテレビおわびで始まった
まさか娘が俺より上の彼つくり
弱虫がある日まさかの叛旗振る
元部下が三段跳びで上にくる
名門に生まれなかつた身の軽さ

志げ緒 行男
圭一郎 蟹郎
妻子 山節子
かをる あしび
由美子 菊香
殺 秀四

名門の生まれしがらみ首をしめ
ズタズタの老舗のれん何時縫える
こすたれつ子親の背中を見て育つ
地震国まさかの時に用意する
吉兆のおごりが坂を駆けだす

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

一日のベルト外すと僕になる
足跡に生きた夫婦の詩がある
投げられたブーケを受けてからの縁
花束の刺にさされたことがある
夫から花束貰うたことが無い
ヒロシマに花束ひとつ時雨降る
百万本のバラではないが必死です
花束を上げたい母の日の母に
足跡を辿る師の影い一度
路地裏のよさ足跡にある温み
カラスのあしあと隠せないヒラリ
足跡を辿れば父の始発点
子が悩む親の足跡大きすぎ
八十路坂生きた足跡自画自賛
乾いているんだね愛をあげましょう
辞書繰って脳ミソ少し足しておく
のりしろを補う人のあたたかさ
縦糸を補う妻の糸車
行間を補うものは愛らしい
お互いに補い合って無二の友

喜子 昌鼓 益子 虎尾 一粹 裕美 富美子 登美代 英子 俣子 泰 克子 豊太 みつ子 寿子 よりこ 紀子 よしこ 佐一 夕胡 大輪 小雪 和子 順子 三男

補い合う心へ春の雪しきり
窓のない部屋にせめても風景画
今日へ一明日も一をプラスする
一肌ぬいで補佐してくれる姑がいる
風除けを補う母の底力
ゴムベルトほどの自由は貰つてる
ひとり暮らしのとても自由なゴムベルト
ベルトコンベヤー外れてこの世知らされる
太い目のベルト女を主張する
旧式で安全ベルトありません
鹿野みか月 福西 茶子報

輝子 保州 紀久子 めぐみ 和香 あきこ 徑子 怜 美羽 三喜夫 宣子 孔美子 久枝 螢 公子 和子 武彦 弘子 忠良 蟹郎 彩子 幸枝 富久江 小鹿 実満

名物の鯖寿司貰いありがとう
点滴ほとほと死にたい人を死なせない
この胸に感謝と恨み抱いている
立春の橋のたもとで待ち合わせる
感激の涙は上を向いて拭く
能弁も無口も湯豆腐が似合う
ほとほと寡し人間が夕暮れる
ポトポトと涙の痕の日記帳
花の夢いま湯豆腐に飽きぐる
立春に動く気配の鯉となる
湯豆腐と銚子は今日も仲がよい
立春へ如月の風まだきつい
人生の今真つ盛り姥桜
考えがあつてポトポト歩いてる
来年も無事迎えたし春立つ日
川柳クラブわたの花 西川 義明報

睦子 完司 房子 はるお きみ子 盛桜 諷人 みさ子 汲香 永子 かおる クニ子 節子 みどり 茶子 義明報 美代子 耀一 知佐子 民 君江 博子 愛子 ミツ子 宏至 幸江

家事苦手夫にさせて妻遊び

みそぎ終え今まつしるに流れ雲

うるさいと言われる妻のおせつかい

アメリカにお手おあすけのポチである

賄賂だと本人ちゃんとはわかるはず

野心なく欲心もなく悔いもない

精力も口も負けてるかあちゃんに

ゴールまで照る日曇る日織る錦

背負う荷が少しずつ減るすこしずつ

節目には棒をつける心なな

姉クリスチャン天国のコネ予約する

終電を妻に代ってポチが吠え

身の丈に合った生き方しています

うるさいがそういう人も要る社会

職人にゴールは無いとのみを研ぐ

福を呼ぶ恵方に添って初参り

しがらみを断って気ままな風に乗る

愛犬を相手の時の妻の笑み

脳リラックス笑って寝よう目覚め良し

遠い日の悪がき寄って師を偲ぶ

長柳会

村上

直樹報

油断めさるな税鬻りとる黒ねずみ

信じてる真顔で言って信じさす

終電車居眠りをして乗りすこす

走らない頭と足で老いを知り

幸あれと破魔矢にたくす初詣で

莊司

美はる

克美

いつみ

義明

宏

正春

欣子

妙子

俊子

晴美

浩三

孝子

和子

八寿子

ふりこ

ますみ

はじめ

たえこ

一風

みぞれ空早く雪にとスキーヤー

金儲けうまい話に油断する

人生を走り過ぎたか悔い残る

若き日の油断喫煙悔やまれる

油断したすきにつけ込むずるい人

走っても走っても追う影法師

油断させ手品のようにさつと拘る

ガソリンが上がって無駄な走りやめ

旅日記思い出巡る走馬灯

うっかりをケガした指が主張する

年金をかじる子ねずみまたふえる

絵手紙の賀状見事な西富士

救急車走れど着かぬ目的地

おしゃれたその日彼女はシャープ

バトン受け孫反対へ走ってる

油断さす笑顔可愛い落し穴

人生はマラソン私伴走者

美女と酒とろり油断を召されるな

喜怒哀楽包み込んでる夕茜

家計簿の油断を誘う春の風

まだ出番あつて冬野を走り抜く

夫婦ですちつとも油断してません

高知川柳社

川竹

松風報

相談に行つて相談受けてくる

わたしにも相談をして欲しかった

相談を受けて不眠の日が続く

武男

たけし

明子

正一

もこ

マサ

明信

よしお

三和子

史

正博

芳野

正美

淳司

敬二

一慧

けい子

和子

和代

富美子

英実

正子

正座して何を切り出す娘の瞳

談合の罪裁いても裁いても

ご相談と来たな金庫をロックする

貴女だけと相談されて荷が重い

相談は口実恋が芽生えてる

三人の寄る相談が姦しい

出直して来ると気になる頼み事

相談をすれば違つた道もあり

相談へやつぱり父の太ッ腹

救命ヘットボトルが負う祈り

祈つても祈らなくても陽は昇る

我慢さすことも子供へ愛のムチ

芋粥を食べて我慢をした昔

芸の道我慢の上に花も咲く

石筍の億年我慢したいのち

言わぬが花ぐつと我慢の喉仏

竹原川柳会

古田

太虚報

昇進の背広奮発する春だ

今日生きた自信明日に進めます

少年のひたすら進む瞳を見たか

決めた道進むしかない空の青

一步進む柱時計は見ていたな

手の平に進むと書いた始発駅

スタートに最上級の筆を買っ

戦争は嫌いだ蟻の列続く

空をとぶ気分でジャンプしています

功

京子

暖

(竹)千恵子

美々

まき子

和江

てるみ

哲史

和広

勢子

千鶴

栄美子

千鳥

みどり

臣子

淑子

敬子

一路

笑子

現代

規子

太虚

節夫

千枝

すつぱりと私を包む亡父の膝

み仏の慈悲に包まれ生きてゆく

シユート決め歎喜の声に包まれる

乳房二つ包んで笑顔もみじの手

ケイタイの包围の中で泳がされ

恋心包みほんのり寒牡丹

人の手は哀しみ包むためにある

参拜の親子を包む鈴の音

祝い箸二代揃うすこやかさ

晩酌が至福となりし夫婦著

黒豆をじょうずにつまむ初春の箸

幾山河越えて安らぐ夫婦著

ウニクラ河豚蟹鮎著迷う

九十五まだ健康の太い箸

決断は正しかったと軽い箸

離乳食初めて食べる母の味

川柳塔おっぱい吟社

川崎ひかり報

凍てついた心を溶かす春の風

春一番老いの夢追う種を播く

翔べる羽根が待つてる老いの春

育児日記嫁取る孫に送る春

春座敷今年聞く日記帳

初エビス素敵な春を連れてくる

春一番子等の吉報乗せてくる

春が来て貴女と語る五七五

春よ来い早よ飛んでいけ油危機

蘭幸

房子

慶子

輝恵

白狐

幸子

あゆみ

栄香

栄恵

汎美

比呂子

厚子

弘子

万年

力子

史子

春の夢語り合ってる種袋

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

寒風に山茶花の紅暖かく

節分の鬼の顔も疲れ気味

充実の日日生き甲斐に知恵絞る

充実の頁が弾む日記帳

温暖化北の大地に住み変える

ひとり者なりふり構わず旅に出る

珍しい父の通信二行半

良い事があるから明日へ生きてゆく

賀状チェック元気な顔が目につく

赤い花バレンタインを待っている

硝子戸を透して光る元日の夕日

欲は言うまい夫の病癒えるなら

年重ね皆愛されこの一年を

ひかり

純

東園

幸子

寛之

守弘

ゆき子

昭三

和子

武庫坊

久子

千恵

年代

道子

京都塔の会

都倉 求芽報

名画ですねコピーはたんと積まれてる

偽の美を承知で迷うのが男

ブランドも私が持つと偽物に

古紙混ぜずバルブ一〇〇パーの再生紙

鍵かけてそっとしておアレだけは

とんど焼き息災願い丸い輪に

百歳にあやかる握手してもらおう

毎日が大事あやかりたい品位

あやかったジュニアも集う甲子園

いいらしい黄色のサイフ買ってみる

仕切り直したケンカの元がわからない

逆立ちで今日一日をやり直す

縫い直しの晴着がまふし二十歳の娘

ゆつくりと直すうう年の日付

やり直すチャンスをつかむ春の靴

自分史を重ね浪速の今昔

果てるときまで今昔の鉢を打つ

昔も今も風邪には葱がいいと言う

芋粥で大志を抱いた日青かった

オカリナはすぐに昔をつれて来る

駄菓子屋の今昔いまはコンビ二か

昔も今もお正月には餅を食べべ

川柳ささやま

遠山 可住報

老い二人おもしろい話は聞かぬこと

湯の郷にはあさん首も仲間入り

あこがれて入社一すじ四十年

播いた種いつの間にもやら恩返し

温泉で素顔見せてるいい笑顔

糖尿の身にもおいしい鏡割り

温泉の湯気のベルが心地よい

おいしいと言わぬが焼肉忙しい

太陽のご恩鍵穴まで届く

飽食へ親への恩もミニサイズ

温泉で寝そべる姿無位無冠

ふるさとの水のうまさにある余生

輝美

福子

則彦

満子

和友

啓子

庸佑

欣之

克治

石舟

篤子

美義

綾子

純子

美緒子

二英

美紗子

靖子

多美子

照代

幸子

富美

美智子

哲男

可住

親思う娘のやさしさが孫通じ

川柳塔唐津

仁部

四郎報

開子

返事ない兄のお部屋は不開の間
悲しみも笑顔に変わる三回忌
大正の爺は今でも知覧の茶
クリスマス除夜の鐘聴き初詣で
形式にこだわるそれが基礎だから
有難う子の送金に手をあわす
神様の視線が扉を越えさせぬ

高明
輝夫
勝視
晴翠
四郎
蜂實
朗

南大阪川柳会

吉川

寿美報

勇気である大阪知事の若返り
遮断機をくぐって救う車椅子
席ゆずるひと声勇気だしてみる
出発点に戻る勇気は持っている
勇気百倍妻が味方をしてくれる
破門されあれから男光つてる
門構えのあの邸はけちだつて
天下り門に偽装を掛けてある
とぶように売れて湯タンポ在庫切れ
とべるかな指輪をそつと抜いてみる
偽の年はじきとはして初日の出
町工場ロケット飛ばす力みせ
卒業式羽織袴にハイヒール
服装に季節感ないエアポート
対決と大連立は組しない

福世
憲太郎
なぎさ
たもつ
楓楽
ダン吉
(吉) 修
克己
東吉
弘子
滋郎
直子
弘風
忠昭
勝弘

ちくはくを繕いながらまた夫婦
ちくはくな服で鏡に叱られる
おばちゃんを選んだ知事は子沢山
いたいた命に背筋伸ばさねば
あすを向くことばを探すおぼろ月
初の干支賭けるものなしマイペース
養殖のエリート増えてくる人科
寒風に耐えてエンドウ四股を踏む
することがなんにもなくて腹が減る
太陽と一緒に起きた日のゆとり
にこにこと介護をすれば報われる
辛抱が熟しきつたぞさあ破裂
跳びなさい両手広げて母が待つ
ライバルがいるからとべた水たまり
ちくはくを詠めば豆秋日本一

ほたる川柳同好会

水野

黒兎報

ワンサイズ落すつもり服を買う
新車買うロケット買うか迷っている
予報より予感が当たる明日の雨
予感などなくて二人の半世紀
チョコレート効いてきたなという予感
計画がずさんとムチが入られる
家計簿の預金の欄は無計画
万歩計計画通りに動かない
計画ではきれいな内に死んでいる
貸す側に計画性を教えられ

春代
柳童
信男
肋骨
見清
久子
禮子
勇治
宇乃子
黒兎

一杯が二杯三杯午前様
老いてなお花いっぱい夢を追う
愚痴いっぱいおいて笑顔で娘は帰る
二十四時いっぱい使いたい余生
ルーキーに夢いっぱいを抱くファン
もういっぱい欲しいおでんがうますぎる

川柳茶ばしら

板山まみ子報

誰に言うともなし金があつたらな
節分に合格巻きが先に売れ
ああうまい茶漬に惚れた帰国の夜
腕上げた子にキッチンを開け渡し
ゆつくりと歩めば見えて来た景色
お行儀の悪さ知つてる掘こたつ
衰えぬ腕が支える師弟愛
また一つ仕事増やした好奇心

川柳塔なら

坊農 柳弘報

美はる
彰治
カズ子
隆子
博一
ふりこ
章久
千梢
孝子

ひとりりの女守つてやるも男です
 発車ベル立ち食いそばが熱過ぎる
 左遷地へ追いやる合図発車ベル
 やつと金婚妻に百べんありがとう
 一線を守り渡らぬ橋がある
 永遠に憲法九条守らねば
 一城を守る父の背に夕日
 縮め直す傘寿の帯のかた結び
 しきたりが老母に生きてる清め塩
 ポンポン船で島の生命守る医者
 一斉救済武士に二言はおまへんか
 ネクタイを結び直して守る椅子
 一粒の米の守りに身を削る
 千枚田守り通したあばら骨
 お願いだからわたくしだけを見て欲しい
 もう腹を決めよと発車ベルが鳴る
 純白を守り扱きます雪だから
 羊水で守るいのちに夢無限
 雪よ降るな今日楢山に参ります
 寿いで寿いでこそこの命
 見切り発車深いところにある覚悟

川柳花の輪

妻谷

重風報

豊かさの次に来るのは没落か
 豊かです一男一女がでんといる
 飽食のつけ病院を梯子する
 動かない山を動かす熱血漢

隆子
 重風
 一幸
 泰子

茂雄
 秋泉
 弘風
 一風
 比呂志
 勝弘
 六助
 寿美
 順啓
 恭昌
 柳弘
 秋雄
 弥生
 道子
 朝子
 ダン吉
 理恵
 富子
 のりこ
 真理子
 美十子

寒い夜は熱爛おでん良き友と
 この熱は風邪かそれとも恋やまい
 ツパとはし語る男の熱に惚れ
 熱いお茶入れて至福の老い二人
 情熱のおもむくままにポランティア
 西宮北口川柳会
 黒田 能子報

善栄
 やすの
 音成
 薫
 ルイ子
 朋月
 忠
 歳子
 光子
 折杭
 能子
 正和
 宏一
 直
 耕治
 五月
 奮水
 萬的
 江美
 静子
 嘉代子
 婦美子
 光久
 昭三
 比ろ志

こぼれぬようそつとシールをはる内緒
 デートした日にはシールを貼つた夜
 シールはるのり百均で買っている
 今日のお白ヘキラキラシール貼って寝る
 雪が舞うドラマの中にいるような
 虚も実ものせて出て行く霊柩車
 旅の宿波音だけが身を包む
 子らの声窓開ける人閉じる人
 飼犬に老いていく様教えらる
 郵便受け春の奇蹟を待っている
 川柳塔きやらばく
 大塚 恵子報

哲子
 千代
 富喜子
 わこ
 いわゑ
 哲男
 紀乃
 弘子
 孝一
 瑞枝
 雪江
 ふみ
 やえ
 すみえ
 寿々子
 田鶴
 富美子
 てい子
 春枝
 恵子
 那珂子
 千代
 章江
 亜弥

残り時間子らのはげまし生きてゆく
 タンポポの綿毛についてとんだ夢
 老境は静かに過ぐす二が日
 三猿をまねて静かに寝正月
 人間の弱味知つて鯛の骨
 つまずかず歩こう子年の私です
 弟から卒寿の姉へお年玉
 五体投地素朴な祈り美しい

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

響くまであなたの心ノックする
 打ち方によつては響く僕の脳
 響き合ううちに老後の策を練る
 地響きをたててトイレへ走る妻
 無事祈るサイレン響き夜深し
 肩こりもそろそろほぐれ春の風
 狂言師そろそろ歩む戻り橋
 干し柿を猿に取られた話聞く
 日だまりへ干しておきます泣きつつら
 一言の温い言葉で溶けるウツ

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

節分の豆が靴からこんには
 関白は夢のまた夢めしを炊く
 腕組みをほどいてとけたわだかまり
 欲すしあつて迷路を抜けられぬ
 燃えろ燃えろころの芯が溶けるまで

玲子
 ゆき
 初枝
 蘭
 日枝子
 千春
 紫泉
 なみ
 能子
 喜美子
 ますみ
 烈
 香住
 シマ子
 弘直
 慶子
 加津子
 あずき
 浩三
 いさお
 秋雄
 紀乃
 あかり

仏壇の掃除ついつい愚痴こぼす
 小さくなった母へ襟巻き三重に巻く
 関白のその後は知らぬ庭の石
 人間味あつてころが揺れ動く
 揺れながら心を開く恋ころ
 品格がありそうだった喋るまで
 土割つて命をひらく早春譜
 ぼうぼうの枯れ草隠す銀世界
 古希近し気楽に暮す是非々々で
 品格の器たまつたまま光る

城北川柳会

伊達 郁夫報

辛口の友に何度も助けられ
 自分にも辛い点つけ凍と生き
 七色の夢素うどんの唐がらし
 びつり箱の中に潜んでいる火種
 チャンスにはまだ燃え上る火種持つ
 話し下手せめて演じる聞き上手
 近頃はテレビに返事してしまふ
 カーテンの囁き今日の風を知る
 時々は齢を感じる風呂あがり
 おふくろの性に合わない無洗米
 赤ちゃんが笑うと丸い輪ができる
 良いお酒浮世忘れて酔うできた
 校正を片付けてのむ胃の薬
 成果主義他人に譲る心消え
 雪道の赤南天に癒される

一風
 耀一
 扶美代
 賢子
 朝子
 幸生
 欣之
 柳伸
 紀雄
 弥生
 正
 たもつ
 柳弘
 志華子
 賢子
 美智子
 和夫
 典子
 求芽
 重人
 ひさ乃
 昭子
 萬的
 勝弘
 福世

噂とど怖さ無口になつて
 休肝日野暮を言うなど待つビール
 コンビニの傘が混んでる雨の駅
 酔い覚めの水は玉露の味がする
 古書市でくすりやと笑う本探す
 血眼の時は見えない探し物
 騒がせるサブプライムと言う魔物
 割箸の森の喋りを聞いてやる
 思慕の情マグマとなつていろ火種
 唐からし乳首へ塗つて乳ばなれ
 行間にたつぷり七味振つておく
 掘り出した遺跡が喋り出した過去
 丹田に火種を抱いている無口
 淡い恋火種のままで消えてゆく
 心にもカーテンがあるおつき合い

ルイ子
 章久
 麗
 弘風
 一步
 順三
 東吉
 昭
 朝子
 倫子
 郁夫
 明子
 集一
 修
 とし子
 鬼焼
 七朗
 信子
 弥生
 未知
 彦次
 澄子
 高鷲
 壽峰
 糺

僕の手の中で牡丹になるだろう
 父の背は生きる姿の影法師
 土くさい男の汗を信じたい
 土を愛で土を極めた父の指
 休耕田動脈硬化の土となり
 大輪の花を育てて土になる
 弥陀の掌の中にもあった鮎と鞭
 気配りの言葉空氣が澄んでいく
 澄まし汁妻の本音が浮いてくる
 子ねずみが財布かじりに来るも春
 どうなろうと道を曲がるのはわたし
 漂うと見えるクラゲに意志をみた
 赤い薔薇入ってますか福袋
 落ちる実を一途に受ける日の大地
 善い人と言われてからは氣をつける
 おおらかに生きる我慢は二の次に
 澄んだ瞳がすこし怖くなってくる
 乱世なりいよいよ五感研ぎ澄ませ
 土捏ねて捏ねて轆轤になる心
 泥水を飲んだ花碗が光ってる

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

奏子 武人 ダン吉 紅紫朗 和子 恵子 義子 あかり 佳子 登子 伸雄 千華 寿之 よしみ ひろし 鐘造 アキ 深雪 欣之 森子

カラフルな杖でも使い若返る
 いつの日か杖を頼りに歩きます
 花柄の杖をこっそり置いてある
 避雷針立てて頬杖堂々と
 祝い酒ドライブには酷なもの

ネオン街社長社長と酒が湧く
 ストレスを溶かす媚薬を盃に盛る
 泣きながらやはり飲んでる通夜の酒
 勘定になつて上司の目が覚めず
 とつくりを振つても妻は知らぬ振り
 どちらかと言えばメシより酒をとる
 左遷の地迎えてくれたのは銘酒
 手書き文字あなたと逢つた氣持ちする
 ほめられて萎れた花が笑い出す
 ほめ殺しされてルンルン生きている
 孫の書く習字うまいとほめちぎる
 ほめてから三日続きのおでん出る
 ほめるより怒つてばかり子育て期
 ほめられて園児本音でしゃべり出す
 ほめられたぶんしつかりと走らされ
 ライバルにはめられ敗けだと思つ
 ほめられたら私木にも登ります
 甘えるなきつぱりいわれ眼がさめる
 きつぱりと正論述べて身は左遷
 きつぱりと禁酒禁煙して惚けた
 友だから借金きつぱり断つた
 きつぱりと断りなさい核兵器
 戦争はきつぱりノーという一票

川柳ねやがわ

籠島

恵子報

神さまが落書きをする春霞
 あの頃のあなたの写真に疼きます

和夫 一知 恵子 かつみ 一壺 いさお 庸佑 美喜 アヤ子 ヨシ枝 敏 耕策 りつえ 猿杓 重人 泰子 喜久子 フジ 久仁子 六点 章司 真一 みつこ

励ましがストレスになる塾通い
 旨かつた医者がゆるした三分粥
 疼く肌あなたの指紋残し冬
 ストレスが溜まるあんたが居るだけで
 宝石箱でストレスためているダイヤ
 ふと見れば鏡に俺の貌がない
 ストレスの即効薬になるお金
 幸せは老いたちはははまだ達者
 落書帳をして少女は脱皮する
 パンうどん値上げの前に食い溜める
 病状を聞き悲しんでくれる医者
 大空ヘダイナミックな飛行雲
 落書だいや芸術だピカソの絵
 神さまのお目にとまらぬまま老いる
 紅を引く女の性をまだ疼く
 会いたくて会えないジレンマの疼き
 廃校の写真に疼くものがある
 ねじれ国会さくら咲いてもまだ疼く
 医者がいる街に住んでる有り難さ
 説明書小さな文字に落とし穴
 あの女と会える兆しか指疼く
 疼くハート私もそろり羽化します
 街ぐるみ落書きを消すポランティア
 吐き捨てた言葉が疼く冬枯れに
 電柱も大にストレスためている
 真実を誤魔化すペン先が疼く
 この先もまだ消ゴムは必需品

栄二 寅幸 仁清 洋 亜成 博泉 一風 柳弘 さち子 ルイ子 茜 鈍甲 恵子 朝子 賢子 たもつ とし子 麗 かすみ 弘風 修 三郎 じゅんこ 良三 祥昭 寿男

チョコレート夫にも一つおすそ分け 銀杏

柳川柳会 八十田洞庵報

予定通り育つてくれる子はいない
投げる足心飾らぬ終電車
心の闇にかくれた鬼が悪さする
おかみさん料理も口もうますぎる
もしかして毒かも知れぬうますぎる
葉書の人達の冬はころびて
今日もまたうまい話の電話する
小商人浮世をわたるこまい世辞
工作を途中で投げる短気な子
投げるより部屋の得意は殴る蹴る
早春賦愛の投網落り抜け
キタに来てミナミの料理はめて去に

米寿なる夫は演歌で上機嫌
おでん鍋よもやま話腹十分
立春の声に白梅動き出す
激動の昭和医院で話す友
元旦は音色も変わるハト時計
影一つ回転ドアに乗ってくる
三年連続日記今年を迎え撃つ
自給自足まずは我が家の畑から

いずも川柳会 佐藤 治代報
胸底の乱の一つを飼いならす
意地を張るカラーだんだん濃ゆくなる
マンネリのカラー刺激のないひと日
句読点きつちり休みまた進む
たらたらは目立たないよう日向ぼこ
今宵こそ乱れてみたい訳がある
混乱を招く手紙はゴミに出す
腐れ縁同じカラーの飯を食う
頑固一徹己のカラー通し切る
休ませて下さい羽がちぎれそう
母の香を着ても母には叶わない
美しいカラー夢見ているカラス
好きだから擦り切れるまで一張羅
一喝が子のたらたら根切りする
胎動の祈りを纏うマタニティー
乱雑な部屋だがはくの匂いする
グループのカラーに少しづつ染まる

君の持つカラーに染まってゆくつもり
乱された夢のかけらは拾うまい
乱伐の祟りか雨の海に居る
本籍が不明で白い曼珠沙華
妻の乱あの手この手を使い分け
モラルなど喉につまって遊ばれぬ
休肝日バイオリズムが狂い出す
着物着て少しは娘らしくなる
主人にも産休せよと言う通知
匠技作るころを磨いている
山陰のカラーに染まり生きている
消し壺の中に入つてしまふ乱
人生も終りになつて着こなせる

一枚のチョコでも気持いい合う
義理チョコが朝のデスクで苦笑い
献金が賄賂かファジーのままで消え
ファジーでは駄目です嫉糸の位置
雪が降る村がファジーに暮れて行く
ファジーには出来ぬいじめを子の蟻
ひっそりと迷彩色の中で生き
生れつきファジーなんです気楽です
気遣ったファジー言葉が誤解生む
戦いはファジー理論では勝てぬ
国会の論議ファジーのまま終る
一徹な父でファジーで済まされぬ

岩美川柳会 石谷美恵子報
一枚のチョコでも気持いい合う
義理チョコが朝のデスクで苦笑い
献金が賄賂かファジーのままで消え
ファジーでは駄目です嫉糸の位置
雪が降る村がファジーに暮れて行く
ファジーには出来ぬいじめを子の蟻
ひっそりと迷彩色の中で生き
生れつきファジーなんです気楽です
気遣ったファジー言葉が誤解生む
戦いはファジー理論では勝てぬ
国会の論議ファジーのまま終る
一徹な父でファジーで済まされぬ

岩美川柳会 石谷美恵子報

信夫	幸	幸報	洞庵	富美子	東吉	悦子	蛙城	桜琴	茂平	俣子	とみ	年子	令子	和美	ます美	喜美	蘭水	瑞枝	俊夫	秀夫	かずこ	愛子	しげる	美江子	桂子	登貴枝	佳子	治代	敬子	たえこ	煩惱児	玲子	すみこ	歌子	ちえ	佐余	寿美	放舟	昌枝	多喜	喜子	房子	多賀子	美佐子	蘭水	浜丘	まこと	茂美	きみえ	文子	章峰	ちかし	圭一郎	公子	忠良	一瑠	よしえ	茶子	節子	稔	たぬ	幸枝	雅女	かつみ
----	---	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	-----	----	-----	----	----	----	-----	-----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	----	----	-----	----	-----	----	----	-----	-----	----	----	----	-----	----	----	---	----	----	----	-----

さよならも忘れて帰るこの寒さ
酷寒に耐えた男は暖かい

受話器もち殻の音を娘にきかす

寒風に耐えて凍々しく梅の花

孫達の寒さ知らずの笑い声

寒いけど炊事楽しむわたし主婦

みんな寝る時刻に起きてくる男

自分では異色などは思つたらん

若いのが異色の車買つている

たまげたなギヤル曾根の腹どんな腹

バラ園に異色の野菊キラリ咲き

お葬式派手な和服がいらつしやる

何時か咲く人とは違う色探す

ようこそと寒さを包むいい笑顔

六甲川柳会

伊勢田

毅報

アクセルとブレーキ違えてからの鬱

叱るとき逃げ道一つ用意する

初孫の瞳に描く未来像

幼子の澄んだ瞳に吸い込まれ

涼やかな姉の瞳は父親似

介護待つ母の瞳は子に還る

懐かしい瞳に会いにふる里へ

澄みきつた瞳の歌が風に乗る

嘘をつく瞳が宙を泳いでる

手話を読む子等の瞳が光つてる
休日妻の指さす方へ行く

螢

孝男

重忠

清帆

菖子

和子

完司

一京

はるお

蟹郎

幸安

和枝

幸子

美恵子

東の間の冬の陽だまり至福です
腰痛も千歩歩いて一休み

休止符を打たねば明日が辛くなる

真夜中に爆音響く滑走路

病室で一句閃きペンを取る

虫食いの葉っぱ恋しくなる事件

笑うこと免疫高めガン退治

不携帯留守電からも叱られる

猛犬と書かれた家にお古着てパート

もつたいない子供のお古着てパート

チョコレートだけが知っている愛情度

人並みに嘆いてみたい低金利

手作りにアツと驚く隠し味

梅林の固いつほみをそつと撫で

やさしそなばらもクイズも棘がある

迷うだけ迷えば光る道が見え

倉吉川柳会

竹信

照彦報

ピョンヤンとベキンに向けて鬼ハ外ッ

よくにあう蛸鉢巻の豆しほり

小粒でも豆のパワーは大人なみ

豆撒きにおひねりもある餅もある

豆の畑機嫌そこねて生えてこん

節分に追われた鬼も豆ひろう

世の中は豆ぶつきたい鬼ばかり

世の流れ十年前は大むかし

水ぬるむ春の流れに逆らわず

悦子

繁義

無限

祥子

美恵子

淳子

基輔

美穂

政一

慶子

千賀子

政子

正己

洋一

みつ子

欲ばつた虎の子流れすつてんでん
おだやかな流れ時には牙をむく

終戦後流れ流れて生かされる

満天の星異端視されて流れ星

聞き流す知恵を身につけ生きやすい

過去のことに水に流してすつきりと

どたばたとねじれ国会もめている

どたばたと働く母のまるい爪

どたばたと暮らしていたらもう二月

一日のどたばた脱いで仕舞風呂

どたばたと慌てふためき跳ねた靴

どたばたと家中荒らし去つた孫

どたばたと急いで帰り忘れ物

ピカソの絵だまつて見てるのが礼儀

名画より君の裸は美しい

次々と名画生み出す風と雲

沢山の偽物のあるのが名画

亡き姉は名画のままで胸に棲み

人はみな神の描いた名画かも

モナリザのモデル誰かと騒がしい

あいさつのママなかえーが聞かれない

川柳塔おとり

草も木も恵みの雨に生きかえる

なつかしい賀状へ慕情甦る

早春賦すこし記憶が甦る

富士を背に日本の明日を語り合う

日出子

由紀子

和子

玲子

悠子

貞子

泰輔

きみ子

鬼一

和枝

京子

龍枝

美津恵

重忠

螢

完司

慶子

次男

克枝

茶子

照彦

登美報

由多香

艶子

雄々

以和万津

夕焼けは人を小さくしてしまふ
雪景色悪魔に変わるときもある
雪景色重たい雪が待っている
ケータイを切る前に言つ有難う
鈍行に景色を友の一人旅
親子づれ娘ら田舎景色ほめ
丈夫です無駄に感じる保険料
五感みな甦らせて春の音

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

花手桶また悔いている親不孝
啓蟄の虫を迷わす風が吹く
四面楚歌空から神も下りて来ず
カレンダー一枚剥がす冬の底
擦り切れた尻尾を今日も振り続け
父さんにギョウザのチェックさせました
川柳の魅力にはまりそのまんま
改めて魅力を探すフルムーン
その顔も眉毛が威張る雪ダルマ
いのちキラキラみどり児にある未来
空気にはなれず溜め息深くなる (久) 千代
子のチェック声のトーンでしてはる母
加えても減らしてみても齢は齢
血圧計が明日の命をチェックする
冗談か本気が困ったことを言つ
お大事に加えた文の思いやり
それ以上チェックしないでバケの皮

芳光 風花 真一 螢 清子 小生 道子 登美 重人 庸佑 郁子 志津子 尚士 勇治 寿美子 巴子 寅次郎 早人 玲子 宇乃子 美義 求芽 能子 都代子

福は内鬼もおははいり寒かろう
儀杖チエックのスカート真面目です
ほんまもんの病人になる検査漬け
加齢には負けじ逆立ちしてみせる
とほけたり忘れた振りになつつかしい
伎芸天わたしの心わし掴み
チエックされ都合次第でセクハラに
いい目覚めもう冗談が口に出る
チエックアウト幸せ少し持ち帰る
追加予算曰くありげな澱がある
ポストには用心のため猫の名も
次の世もやっぱりきみと添い遂げる
日溜りのような笑顔に逢いに行く

川柳塔まつえ吟社 三島 淞丘報

美智代 タミ 石舟 則彦 蕉子 夢 真人 見清 満寿巳 肋骨 佳恵 幸雀 十八娘 町紅 知恵子 多喜 静恵 螢 治代 畔 昌枝 紫見 幸子 多賀子 小生

滑りぐせ付けて三浪次を待つ
銀盤の滑りわたしも蝶になる
口も手も足も滑って老いの坂
おえらいさん口が滑って世が裁く
愛嬌で口を滑らせ座が和む
水点下滑る積雪踏みしめる
足元に夢を叶える鍵がある
恩返し叶わぬままに葉が落ちる
小さくとも叶うことから先にする
呑気者叶わぬと知り神だのみ
腕相撲若い人には叶わない
叶うならあの世で君を妻にする
福分けと開ければ夢の玉手箱
笑う門開ける家々狭くなり
窓開けて外の空気に抱かれよう
開けて待つ心のゆとり子は育つ
書留を開けると浮かぶ母の背な
鬼は外こころのドアを開け放つ

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

茂美 房子 政子 スズコ ちえこ 英子 たけし 玲子 きみえ 蘭 和歌子 柳歩 日出子 桂子 幸 注湖 淞丘 小寺 花峯報 きよし 初江 柳子 洋子 ヒサ子 美鈴 成柳

芸達者ソロバン抜きで笑い取る
腕すくで玩具とり合う双子ちゃん
聞く耳を持たぬ男で値踏みされ
綱引きの腕力あてに駆り出され
パチンコの腕上げにゆく定年後
切れたりほしない母さんデカイ石
算盤高い男の背なにヤマセ吹く
ソロバンの桁が萎んでゆく暮し
算盤ではじけなかつた午後
ケロイドの腕を隠した八月忌

川柳塔打吹

野口 節子報

ネズミ年暮開け知らず鐘の音
音荒い今日は機嫌が悪そうだ
まな板の音にも春がやってきた
鐘の音が響く恋人たちの街
心音が元気づけんと鼓動する
寒月や山には山の音がある
水の音まな板の音母の音
木枯らしと春一番のチャンバラだ
故郷のテレビ賑わう雪まつり
のっぽ竹重い雪着て最敬礼
止まり木で待っていたのは雪女
執燭よ鍋よと雪の降るたんび
コーヒか煎茶にするか客を待つ
いい人と言われそわそわしたくなる
ライバルの側でそわそわ美辞麗句

一呑 準人 銀波 花匠 愁女 井蛙 花峯 慕情 五楽庵 清 美美子 やえ 美ツ千 禎元 芳光 美知江 石花菜 和子 久芽代 螢 玲坊 京子 照彦 睦子

そわそわと鍋の中身の肉にらむ
本命のチョコがソワソワ動き出す
そわそわもじきもきもなく石地蔵
そわそわしオギャーの声を待っている
そわそわせず待つて下さい閻魔様
布張りの連風上げる大砂丘
赤い布振られて御用ねずみ捕り
愛用の巾着いつも腰に下げ
真っ白な布に表も裏もある
湯タンポを布に包んで暖貰う
ハンカチに包んで渡す針もある
見えずいた嘘大風呂敷に包む
良い生地は虫も知ってた目が高い
どうにでもなる布だから白で織る
よれよれになれど生れは黄八丈

サークル檸檬

吉田あずき報

人間の欲で氷がとけていく
温暖化工夫してみる呼吸法
花屋に花あふれ世の中不況とや
ある筈のないフライドがひょいと出る
B面に方向音痴寄ってくる
会議では解決できぬ温暖化
マイ箸で地球を少し喜ばす
どげんかせんと今に地球は海の中
生さるって毎日ドジのつみ重ね
夜更しを朝に回したエコライフ

紀美恵 美代子 孝恵 貴恵 重枝 滋 善江 公恵 和枝 きみ子 玲子 龍枝 三津子 節子 哲夫 遠野 楓楽 房子 扶美代 昌紀 みつ子 光久 義子 あずき

エコバッグ軽い財布も気にしない
情熱の赤をまとって冬を越す
ニユースショー汗を知らない人しやべる
どてら着てお客もてなすエコライフ たもつ
温暖化地球が徐々に干涸びる (A)千代
川柳さんだ 北野 哲男報
鍋嫌いの娘は今や鍋奉行
換気扇となりの鍋はカニのよう
ライバルは丹頂僕はナベヅルだ
急用の客も一緒にかこむ鍋
夜食にも気づかないをする母の愛
塾靴投げて夜食をつまんでは
ほんやりと湯船に浸り夢浮ぶ
ほんやりとしばし見とれるバックシャン
新技術お月さんを丸裸
口紅の仕上げはペロが一回り
切符買っ同じ景色に逢いたくて
愚痴こぼしながら元気になる女
家庭科は必須科目かも知れん
この人と決める笑顔が好きだから
次の世は違う女と決めている
青でつせばんやりするなクラクション

米子住吉川柳会

渡辺多美子報

初詣で健康祈る神様に
家こもり悠々自適それは夢

いわゑ 希久子 清生 千代 哲男 章子 正和 美紗子 順子 雅司 和代 好文 哲夫 千代子 二英 朋月 哲男 登美枝 正二

半分はくるなど視野に入れて待つ
賞味期限家族に偽装してました
身障者ランブの宿でリハビリを
今朝の雪時き餌に集う軒雀
老齡のねずみ一ぴきとるところと
おやつ半分仲良く分けて古い二人
よく噛んでゆつくり食えと母に言う

翠洋会 谷口 義報

それではと座り直した妻の勝ち
勝利者へどこまで続く向い風
運針なら昔の業で勝ちました
今日を勝つよしよこらしよで黄昏れる
かす汁を炊きつつしんみり母おもう
サバの骨とりつつ計報の電話聞く
しんみりは苦手執爛追加する
しんみりと諸行無常の琵琶の音
鉛筆を握ると脳が反射する
4Bの直線だけで生きた父
鉛筆が懂れている直木賞
鉛筆のこんなところにバーコード
句が浮かぶ鉛筆さがしうろたえる
決意して濃い鉛筆に持ち替える
如月や鉛筆で書く路の臺
HBのようなお方で生き上手
火の車うすうす感じ目を伏せる
何度も窓のぞき嬉しい雪化粧

日枝子 多美子 欣子 すみえ ふみ 雪江 公一 捷也 集一 舞夢 春 照子 蕉子 理恵 茶々 満作 富子 尚士 千歩 叡子 昭 義 楓 久峰 さと美

ダイエツト頼むたのむと膝が言う
言い負けてババはトイシで吠えている
皿洗いで一浪のサクラサク
生かされて頭打つたりよろけたり
麻酔さめしんみり愛す我が命
冷蔵庫を大掃除した毒餃子
新年の誓い二月にもう雪崩
ありし日のひと偲び降る雪しきり
母だけは僕の決意に気づいてた
十年の流れ大人になりました

すみよし川柳会

岩崎 公誠報

えべっさん今年はうちへ福が来る
正月が来るたびまたも歳をとる
よく笑う良い子だ嫁に来て欲しい
言いづらい苦情を言いに来たお嫁
迷いながら生きてきました長い道
良い知らせ来そうな予感春うらら
来る来ない花占いで待つ貴方
トツランナー来た来たと旗を振る
来ると聞きあわててなおす眉と紅
姑さんが来るといので大掃除
来るものを拒んで世間狭くする
来る時が来たらとばかり言うてはる
温暖化二月の春が来る
甘い部屋やつと来ましたドアノック
ギヤング来る疲れが倍の日曜日

日の出 浩二 桃花 志華子 れんげ げんえい 正雄 恭昌 恭昌 千梢 幸子 明江 萌 日の出 かりん 桃花 遠野 定子 ヒロ 半銭 裕之 ダン吉 昌紀 舞夢 篤子

川柳大阪

長井 善純報

来てくれたん母はいつでも待っている
来来来 来来軒へいらつしゃい
来た来たたとハグで迎える孫二人
来るとすぐ帰る帰るというお客
平凡な来る日来る日にありがとう
晴れた日が来ると信じてめしを炊く

引返す勇氣忘れぬ登山靴
勇氣いる愛の告白初キッス
勇氣など軽くは言わぬ母でした
告発がなければ今も食べている
番犬も勇氣を出して吠えている
縁あつておかめひよつとこしています
最高の縁を生きている二人
縁がないうちの娘も春が来た
縁側の定位置はの白い髪
元他人金婚乗せた夫婦舟
額縁も一味違うゴツホの絵
寅さんよ縁があつたらまた会おう
縁の下役に徹した母でした
ともすれば独り善がりになる粘り
七十年風雪なんの粘り勝
粘つたらきつと神様居てくれる
七転びしても懲りずに天狙う
粘る物体に良いとドクターも

蕉子 正太郎 五月 伸子 りつえ 公誠 一風 功 修 ダン吉 勝弘 美籠 重人 朝子 すがお 孝一 彦太 かよこ 青道 一步 柳弘 喜楽 笑風 川童 司

信念を貫く人の粘り腰

粘るのはよそう相手が聞いてない

百歳をめざして粘る納豆好き

おおきにの大阪弁にある心

守屋さん接待おおきに額賀です

世話かけた母におおきに暮まり

おおきにとやうてはるけど笑わへん

出す前に札を言われたお年玉

おおきにと指まで温い茶をすする

おおきにの涙に応えたい介護

堺川柳会

河内 月子報

毎日がだんだん早くなってきた

今日一日元氣おねがい致します

美味しいと言ったら今日もカレーです

毎日の新聞紙面よく埋まる

筋力はないが金力ならおます

筋書きがないので夢のあるドラマ

毎日休み要らんとやうてはり

ライバルに心読まれて負け戦

カラオケでお経読む声鍛えあげ

毎日を忘れぬやうに書く日記

これも愛苦いジユースを飲まされる

街の筋一つ違えば静と寂

平凡に毎日暮らすのも非凡

毎日が気楽だ猫もとうさんも

東吉

若香

鉄心

信醉

紀雄

五月

柳昌

章久

美花

善純

朋月

舞夢

玄也

時雄

公誠

みつこ

さくら

鐘造

雅明

りつえ

千代

冬虹

好

かりん

エプロンを毎日替えて一人棲み

毎日が戦争だった子沢山

霧困気を読んだか猫が出て行った

日記では毎日佳い日つづいてる

一冊の本人生をかえました

悩むまい毎日夜は明けてゆく

年中無休元氣な妻がいてくれる

生きる知恵笑い上手に聞き上手

平仮名が読めて嬉しいカルタ取り

聖書読む一時こころ洗われる

亥年の偽に別れを告げて来たねずみ

日記には今日ももてたと書いてこう

楽しみは園児に童話読んであげ

手相より顔色読んでいる易者

爆撃のない毎日がありがたい

筋通す一人に会議採めている

潤子

惠勇

倅子

篤子

伸子

萌

五月

日の出

八千代

ルイ子

像山

としお

綾乃

天笑

童之介

健吾

あかつき川柳会

日時 5月9日(金) 14時

会場 住まい情報センター

地下鉄天六③出口

兼題 「晴れ」「父」

「流れる」「時事吟」

投句先 〒599 022 阪南市箱作

1586-14-1102 森村 美花宛

第9回大根島ぼたん句会のご案内

とき 4月29日(祝日)

ところ 八束町公民館

時間 締切12時 開場10時 披露13時

兼題と選者「うなぎ」 新家 完司 選

(各題共選) 松本 文子 選

「浴びる」 熱田圭詩朗 選

三島 裕丘 選

「籠」 木天 麦青 選

安黒登貴枝 選

「洞窟」 石橋 芳山 選

小谷美ツ千 選

各題 2句 席題 なし

会費 1000円(句会誌呈 秀句賞3名)

欠席投句料 1000円(締切 4月20日必着)

連絡先 〒690 044 松江市八束町5225

門脇波留子

電話 0852-176-2112

予告

第14回 川柳塔まつり

平成20年10月5日(日)

柳界展望

○第59回三原市神明祭協賛
川柳大会、三原市市民福祉
会館にて2月10日開催され
た。同人の特選句。

沈黙は愛だと思ふ石畳

石原 淑子

○第57回西大寺会陽川柳大
会は2月24日、岡山県西大
寺ふれあいセンターに於て
195名の参加により開催。同
人の特選句。

拘置所の壁へ冥想深くな
る

河内 天笑
好き勝手させて手綱は離
さない

○川柳塔わかやま吟社では
平成19年度各賞を発表。同
人の受賞は次の通り。

〈葵水賞〉

人間を愛し心の灰汁をぬ

松原 寿子

〈あおい賞〉

雪しんしん昨日が美しく
消える

牛尾 緑良
地球の芯ズキズキ痛む温
暖化

〈課題吟賞〉

スクリーンのしづき浴びつ
つフルムン

○第17回播磨文芸祭川柳大
会事前投句の部で297名の応募
の中から次の句が秀句に
選ばれた。

草を引くときはとつても
広い庭

三宅 保州
▽出版

○長柳会（代表村上直樹）
は創立二十周年を記念して
合同句集を発売。会員34名
の句を掲載、B6判70頁。

○柿花和夫氏（理事・堺市）
は、なにわ柳壇百句記念と
して川柳句集「七転八起」
を発売。B6版66頁。

▽同人動向△

○2月24日(日)第57回西大寺
会陽川柳大会に出席の為、
天笑主幹他8名岡山県西大
寺行。同日播磨文芸祭川柳
大会へ西出楓楽理事長他4
名姫路市行。

○川柳塔まつえ吟社の役員
変更。主幹（総括）として
三島松丘氏、顧問（相談役）
に恒松町紅氏が就任した。

○木本朱夏さん「常任理事・
和歌山市」は雑誌「上方芸
能」167号にエッセイ「美
学な幕切れ」を発表した。

○日本現代詩歌文学館特別
企画展（詳細表2面）に河
内天笑氏（主幹・堺市）の
次の句が展示されている

「倅せを追いかけているい
そがしさ」また同文学館常
設展「宇宙・天体と詩歌」

に奥田みつ子氏（相談役・
西宮市）の句「亡き人のメ
ールか月が美しい」が一年
間（四月・三月）展示される。

○2月28日、大阪城公園内

の鶴彬句碑建立（9月14日）
予定地に於て植樹祭が行わ
れた。楓楽理事長他43名が
立会った。関連記事が朝日
新聞大阪版2月29日付に
「反戦川柳思い今に」とい
うタイトルで掲載された。

○鶴彬没後七十年の記念事
業の一環としてあかつき川
柳会（会長・川端一歩）は、
小冊子「鶴彬と私」（木本
朱夏著）を作成。頒価200円。

▽訂正とお詫び△
3月号71頁下段11行目、二
代党首→二代党首。

▽新誌友紹介△
尼崎市 藤井 宏造
紹介者 木本 朱夏

加東市 宮田 正臣
三田市 村川 忍人

河内 北野 哲男
竹原市 河崎 厚子

神戸市 石原 淑子
紹介者 山口 武彦

松江市 山崎 光久
紹介者 松 彬

三島 三島 裕丘

鹿兒島市 田口 礼子

▽常任理事会△

3月7日(金)出席18名。①各
地川柳会代表者会の反省と
今後の課題②継続審議事項
③第2回部長連絡会審議事
項の報告④定例確認事項⑤
各部報告事項⑥その他 次
回は4月7日(月)13時30分、

川柳塔社大会等ビデオテー
プ（VHS）保存版左記四
本「米田恭昌編集」を事務
所にて貸出し致します。希
望者は事務所まで御連絡下
さい。（郵送不可）

①西尾栞・橋高薫風句碑建
立祝賀記念ツアー
（平成5・8・11）

②四先生追悼川柳大会
（平成9・6・18）

③薫風先生叙勲記念川柳大
会（平成13・9・24）

④高杉鬼遊先生を偲ぶ
（平成3・4・18）

④川柳塔創刊80周年記念川
柳大会（平成16・10・10）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳さんだ	15日(火)午後1時より 浮く・本番・うっとり・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
岸和田川柳会	19日(土)午後2時締切 海老・拝む・格安・ギャル	岸和田市立福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳塔まつえ	19日(土)午後2時締切 世間・踊る・のどか・セールス	松江市総合文化センター (プラバホール) (0852-27-6000) 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳藤井寺	20日(日)午後2時締切 作法・なぞる	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳ねやがわ	20日(日)午後1時半締切 連絡・握手・足跡・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半締切 クーラー・走る・心配	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	21日(月)午後1時50分締切 間違う・邪魔・コンビ・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブわたの花	25日(金)午前9時30分から 窓・調査・知恵・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
和歌山三川柳幸会	26日(土)午後1時から 年金・自転車・呼ぶ	勤労者総合センター 4F会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市同好会	26日(土)午後7時締切 チャンス・届く・大変・紋	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの市川柳民会	27日(日)午後2時締切 卵・習う・せかせか・アニメ	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	27日(日) 吟行会 満タン・がむしゃら・暗示	問合わせ先 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 0857(22)8978 田中かをる
南大阪川柳会	28日(月)午後6時より ずる休み・折る・くよくよ タブー	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	28日(月)午後2時締切 はらはら・太い・褒美	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳塔松露川柳会	28日(月)午後7時半から ぜいたく・税・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	3日(木)午後1時から そして・庭・加減	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口歩5分) 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
尼崎 いくしま	4日(金)午後2時締切 卯月・歌・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
倉吉 川柳会	5日(土)午後2時締切 砂丘・荒れる・深い	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
富柳会	5日(土)午後2時締切 深・久しい・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城北 川柳会	5日(土)午後1時開場 賞状・美しい・マイク・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
八尾市民 川柳会	6日(日)午後2時締切 未練・積む・ぶつぶつ・雑詠	山本コミュニティーセンター3F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 唐津	7日(月)午後1時半から 渡る・歌・スーパー	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時半締切 奥の手・値上げ・止める	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火)午後2時締切 新・好き・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
川柳塔 みちのく	12日(土)午後5時半締切 投書・踵・鉛玉	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
堺川柳会	12日(土)午後1時から スポーツ(全般)・競う 「さがみ(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打吹	12日(土)午後2時締切 岸・壺・ぼちぼち	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳大阪	12日(土)午後1時から 奇跡・壁・ピンチ	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 わかやま 吟社	13日(日)午後2時締切 峠・遙か・マジック・「色」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 灯・期待・ゴール・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

編集後記

☆2月16日、第4回の代表者会議が行われました。今回は「川柳雑誌」時代の路

師を知る数少ない同人、

早川清生氏に「路師師薫風

師から学ぶもの」と題して

貴重なお話を伺いました。

私達の知り得なかつた路師

師の生身の姿や若き日の薫

風師のことを聞き、両師の

川柳に対する情熱の深さを

改めて思いました。要旨は

80ページに掲載していま

す。会議も中身の濃いもの

で、川柳塔を思う熱いこ

ろを感じることができうれ

しく思いました。

☆その前日15日は番傘川柳

社の岩井三窓さんのエッセ

イ集『紙鉄砲Ⅱ』の出版を

祝う会に出席しました。

本の帯には「なんでもな

いことが、とんでもないこ

とになつてくる。そんなエ

ッセイが73篇」とあります。川柳とエッセイをドッキン

グさせ、日常の何気ない出

来事が軽妙に、味わい深い

一篇に仕立てられていま

す。

作句と三窓さんのエッセ

イには共通点があります。

①題材はどこにでも転がっ

ている。対象を色々な角度

からみつめる。

②辞書はいつも手元に数種

取り揃え、繰ってみる習慣

をつける。

③わかりやすい正しい言葉

で表わす。

等作句にも参考になると思

つた次第です。

またアトラクションとし

て、労務士で落語家のポエ

ム亭楽生（上野楽生）さん

の、年金をテーマの創作落

語に大笑いをしました。高

いテーブルの上に座布団を

して、文字通り高座をし

つらえての熱演でした。

(希)

鶴彬没後七十年記念植樹祭

した。

二月二十八日、大阪城公園の一角で「鶴彬没後七十年記念百日紅植樹祭」を行いました。記念祭には川柳界をはじめ各界代表者や市民など四十三名が参加しました。

来賓の挨拶には日川協事務局長

の本田智彦、元大阪城天守閣館長

の渡辺武、鶴彬の映画づくりで奔

走の岐阜教育映画センターの平野

寛三氏より温い祝辞激励を受けま

この事業はあかつき川柳会が大阪市と五年余の話し合いを進め、全国四十五都道府県一千余名の川柳と平和を愛する仲間の熱い応援の結果実現した貴重な成果です。

記念樹の場所は豊国神社の東側

一番櫓の南西です。そこには石に

刻まれる「晁を抱いて闇にゐる晝」と記した公札が建ててあります。

大阪城にお越しの節は是非お立ち

寄り下さい。(川端 一步)

ひとつと

★人の世や 嗚呼にはじま

る広辞苑

薫風

★広辞苑第六版が刊行され

た。一九五五年五月二五日

に初版刊行以来、五年が

経過。日本語の変化、時代

を反映して改訂を重ねてき

た。今や辞書といえは広辞

苑として定着している。

★現代生活に必須の二万語

を新収、総項目数は二四万

語。早速編集部も購入した

がズッシリと重い。うっか

りと足に落とせば、骨折し

るような位の重量感がある。

★現在は軽くて便利な電子

辞書が手軽である。しかし

広辞苑は枕代わりになるが

電子辞書は薄くて枕になら

ないという笑い話がある。

★本誌の「川柳讃歌」でお

馴染み木津川計先生は常々

「趣味人」という言葉がどの

辞書にも採用されていない

と嘆かれていた。残念なが

ら今回も漏れている。

★第六版には植木等が収録

されている。納得がゆかな

い。無責任男・お気楽サラ

リーマン、スーダラ節のイ

メージが違和感を拭えない。

★「広辞苑ものがたり」に

よれば青いクロスの装丁

は、洋画家・安井曾太郎の

手になるものらしい。また

初版以来の累計部数は、一

一〇〇万部という。永遠の

ベストセラーといえるかも

知れない。(朱)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)」

地名

都道府県

市
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区太道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「コピー」 (4月15日締切)

6月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

B A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名		住所	電話	紹介者
		〒 —	—	
年	年			
月	月			
から	から			
一年	半年			
9	5			
8	0			
0	0			
0	0			
円	円			
該当の方に○をつけて下さい				

〒543-0052

川柳塔社

(電話 06-6779-3490)

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



第32回 全日本川柳2008年福岡大会

日時 平成二十年六月八日(日) 午前九時半開場
会場 アクロス福岡イベントホール(B2)
〒(8100) 福岡市中央区天神一丁目一

交通機関 JR博多駅から地下鉄で7分
福岡空港から地下鉄で11分

宿題 (以上いずれも地下鉄天神から徒歩5分)
第一部 四月十五日締切(当日消印有効)

「旗」小島 蘭幸 選「棒」津田 選
「祭」石田 一郎 選「隠す」土田 欣之 選
(事前投句、小・中学生の部)

「まつり」てじま 秋道 選「人形」松木 千秋 選
「自由吟」安藤 富久 選
専用紙のない方は、2×16cmの句箋一枚に
一句宛記入・各題二句・無記名、封筒の裏面
に住所・氏名明記。

投句料 一〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を
同封して左記郵送のこと。

投句先 〒530 004 大阪市北区天神橋二丁目北一―二
ステップイン南森町九〇五

全日本川柳協会 宛
租 〇六(六三三)二二二〇
郵便振替口座 〇〇九七・九一三二五五

宿題 第二部(当日投句、十一時十分締切)
「人形」敷田 無煙 選「屋台」三宅 保州 選
「方言」近江 秀ら 選

第二次選者 各題二句当日配布の句箋に記入
場見草映・大木 俊秀・河内 天笑
新家 元司・田中 寿々夢

会費 四、〇〇〇円(食費、記念品含む)
表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞
(3)川柳大賞 (4)大会賞
ジュニア部門は賞状とメダルを予定

全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳福岡大会実行委員長 大場 可公

△表彰式典・前夜祭(案内)

◎表彰式典 平成二十年六月七日(土)
午後五時三十分

◎前夜祭 大会十年連続出席者・川柳文学賞
表彰式典後、同一会場
会場 ソラリア西鉄ホテル B Fホール
〒(8100) 福岡市中央区大名二丁目六
(西鉄天神駅西)

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
大会・前夜祭の問い合せ先
〒(8100) 福岡市南区長住一丁目一八
大場可公方 日川協福岡大会事務局 宛
租・租 〇九(九一五)六一三六

大会・前夜祭参加費の送金先 四月十五日締切
郵便振替口座番号 〇一七八〇九一三九九〇〇
日川協福岡大会事務局

△宿泊・観光ご案内

宿泊 ソラリア西鉄ホテル・アークホテル博多他
宿泊料金 一泊朝食付、税込込み
航空・宿泊バックもあります。

観光 初夏の筑紫路を巡る特別史跡大宮政府庁舎
日時 六月七日(土) 十二時 四、五〇〇円
JR博多駅新幹線口 十一時半集合
最少催行人員 四五名様

博多湾ディナクルーズ
六月八日(日) 十九時 五、〇〇〇円
宿泊・観光の申し込みは、別紙「ハガキ」申込
書に記入し、ご送付下さい。
四月十五日必着です。

宿泊・観光申し込み・問い合わせ先
トツツアール 福岡支店 担当者・千代島 誠
租 〇九(七三三)〇〇一〇
租 〇九(七三三)七七七三

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)